

熊本県文化財調査報告 第164集

鞠智城跡

— 第 18 次 調 査 報 告 —

1997年

熊本県教育委員会

序 文

鞠智城跡は、アジア情勢が緊迫した7世紀後半に、大和朝廷が築いた古代山城の一つです。九州には鞠智城跡の他に三箇所の古代山城があり、その三つの山城はいずれも国の特別史跡になっています。

このような重要性から、熊本県教育委員会では、県内で古代に築かれた唯一の山城である鞠智城跡の発掘調査を国庫補助事業や県の自主事業によって、これまで、17次にわたって実施してきました。

これまでの発掘調査の結果、貴重な文化財が残存していることが確認され、「県総合計画」の中に「歴史公園化を目指し調査と整備を促進する」と位置付けられました。文化財の保存と活用という基本的姿勢で、鞠智城跡の調査を実施しており、今回の第18次調査は、鹿本郡菊鹿町米原の長者原地区において、建物跡集中地区を中心にして調査を行いました。

この報告書は、第18次調査の結果をまとめたものです。

調査を実施するにあたりまして、文化庁、検討委員会の先生方からご指導をいただくとともに、菊鹿町教育委員会や地元の皆様など、多くの方々のご協力を承りました。ここに、厚くお礼を申し上げます。

平成9年3月31日

熊本県教育長 松尾 隆樹

例　　言

1. 本書は鞍智城跡整備事業に伴う発掘調査の調査報告書である。
2. 調査現場での遺構実測・写真撮影・遺物取り上げは、各調査員が主に行い、遺構実測・遺物取り上げについては、祐理蔵文化財サポートシステム熊本支店の補助があった。
3. 本書に使用した方位とグリッドは、国土座標を用いた。
4. 遺物の整理・実測・拓本と遺構・遺物のトレースは、西住欣一郎が主に行い、北原美和子・曾我数子・三浦佐代子・川上寧子・金光里美・服部美紀子・古閑敬士の補助があった。
5. 図版の遺物写真的縮尺は約1/5である。
6. 本書の執筆は西住欣一郎が行った。
7. 本書の編集は熊本県教育庁文化課で行い、西住が担当した。

本文目次

第Ⅰ章 調査の概要	
第1節 調査の組織	1
第2節 調査の進行状況	1
第Ⅱ章 調査の成果	
第1節 II区の調査について	5
1 5・6号建物跡の調査	5
2 土坑の調査	37
第2節 IV区の調査について	45
1 遺構分布について	45
2 5・5号建物跡の調査	47
3 5・7号建物跡の調査	48
4 5・8号建物跡の調査	48
第3節 VI区の調査について	49
第4節 IX区の調査について	50
1 土坑の調査	50
第Ⅲ章 まとめ	61
付論 鞍智城56、59及び65号建物礎石の岩石および採石場調査	63

挿図目次

第1図 鞍智城跡地形図	2
第2図 調査区位置図	3
第3図 56号建物跡・土層断面の位置図	5
第4図 56号建物跡実測図	6
第5図 56号建物跡礎石上面の平坦面位置図	7
第6図 56号建物跡礎石拓影の位置図	8
第7図 56号建物跡断面実測図	9
第8図 56号建物跡礎石上面拓影	10
第9図 56号建物跡礎石上面拓影	11
第10図 56号建物跡礎石上面拓影	12
第11図 56号建物跡礎石上面拓影	13
第12図 56号建物跡礎石上面拓影	14
第13図 56号建物跡土層断面実測図	15
第14図 4層遺物出土状況実測地区図	18
第15図 4層遺物出土状況実測図(A地区)	19

第16図	4層遺物出土状況実測図（B地区）	20
第17図	4層遺物出土状況実測図（C地区）	21
第18図	4層遺物出土状況断面図	22
第19図	4層出土瓦片の接合関係図	23
第20図	56号建物跡整地1層出土遺物実測図	25
第21図	56号建物跡礎石掘り込み出土遺物実測図	26
第22図	4層出土須恵器実測図	27
第23図	4層出土須恵器実測図	28
第24図	4層出土土師器実測図	29
第25図	4層出土土壷物実測図	30
第26図	軒丸瓦実測図	31
第27図	丸瓦実測図	32
第28図	丸瓦実測図	33
第29図	平瓦実測図	34
第30図	平瓦実測図	35
第31図	平瓦実測図	36
第32図	平瓦実測図	37
第33図	平瓦実測図	38
第34図	平瓦実測図	39
第35図	石器実測図	39
第36図	鉄製品・瓦二次加工品実測図	40
第37図	土坑分布図	41
第38図	1号土坑・2号土坑実測図	42
第39図	3号土坑実測図	43
第40図	1号土坑出土遺物実測図	43
第41図	3号土坑出土遺物実測図	44
第42図	56号土坑1号実測図	45
第43図	56号土坑1号出土遺物実測図	46
第44図	IV区遺構分布図	47
第45図	55号建物跡実測図	48
第46図	57号建物跡実測図	49
第47図	58号建物跡実測図	50
第48図	VI区地形実測図	51
第49図	1号不明遺構実測図	52
第50図	1号不明遺構出土須恵器実測図	52
第51図	丸瓦・平瓦形態分類図	62

表 目 次

第2表 硬石加工工具の輒計測表	17
第3表 遺物観察表	53
第4表 遺物観察表	54
第5表 遺物観察表	55
第6表 遺物観察表	56
第7表 遺物観察表	57
第8表 遺物観察表	58
第9表 遺物観察表	59
第10表 遺物観察表	60
第11表 遺物観察表	61

図 版 目 次

- 図版1 上 56号建物跡
下 56号建物跡
- 図版2 上 土層断面A-Bの一部
中 土層断面C-Dの一部
下 土層断面E-Fの一部
- 図版3 上 56号建物跡東側4層A地区の一部遺物出土状況
中 56号建物跡東側4層B地区の一部遺物出土状況
下 56土坑1号検出状況
- 図版4 上 56号建物跡1号硬石検出状況
中 56号建物跡3号硬石検出状況
下 56号建物跡4号硬石検出状況
- 図版5 上 56号建物跡5号硬石検出状況
中 56号建物跡7号硬石検出状況
下 56号建物跡8号硬石検出状況
- 図版6 上 56号建物跡9号硬石検出状況
中 56号建物跡11号硬石検出状況
下 56号建物跡12号硬石検出状況
- 図版7 上 56号建物跡15号硬石検出状況
中 56号建物跡23号硬石検出状況
下 56号建物跡25号硬石検出状況
- 図版8 上 56号建物跡29号硬石検出状況
中 56号建物跡35号硬石検出状況
下 55号建物跡検出状況
- 図版9 上 平瓦①(第29図1)
中 平瓦②(第30図2)
下 平瓦②(第30図3)

第Ⅰ章 調査の概要

第1節 調査の組織

調査主体 熊本県教育委員会
調査責任者 桑山裕好（文化課長）
調査・整理統括 丸山秀人（教育審議員）・大田幸博（主幹・整備係長）
調査担当者 西住欣一郎（文化財保護主事）・最上 敏（文化財保護主事）・北原美和子（嘱託）
調査指導 堀内清治（熊本県文化財保護審議会会長・熊本工業大学教授）
坪井清足（(財)大阪府文化財調査研究センター理事長）
岡田茂弘（国立歴史民俗博物館教授）
小田富士雄（福岡大学教授）
澤村 仁（愛知みずほ大学教授）
甲元真之（熊本大学教授）
北野 隆（熊本大学教授）
調査事務局 関上重喜（教育審議員）・江尻靖子（総務係長）・高宮優美（参事）・岸本誠司（主事）・猪方宣成（参事）・東 修（主事）
報告書担当者 西住欣一郎（文化財保護主事）・北原美和子（嘱託）
協力者 菊鹿町教育員会
菊鹿町米原地区・翁池市堀切地区

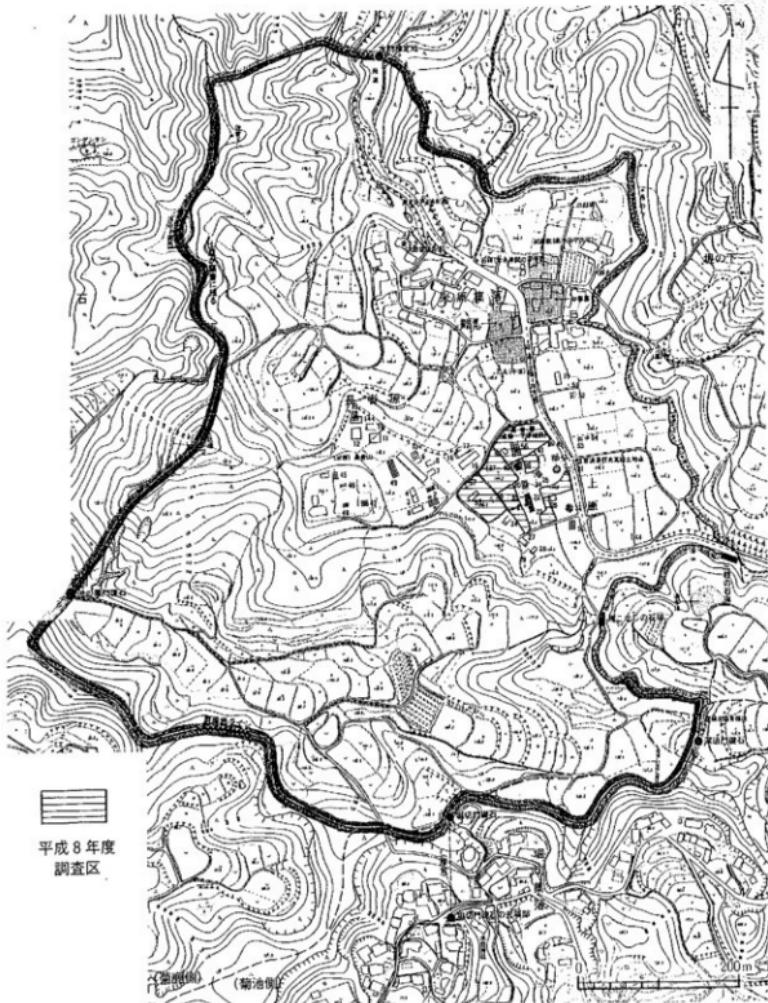
第2節 調査の進行状況（第1図・第2図・第1表）

第18次調査の発掘調査は平成8年4月10日から同年12月27日まで行い、遺物整理は平成8年4月10日から平成9年3月28日まで行った。

発掘調査を実施したのは、長者原地区の建物跡集中部分の隣接地点で、未調査地区を対象にした。調査は

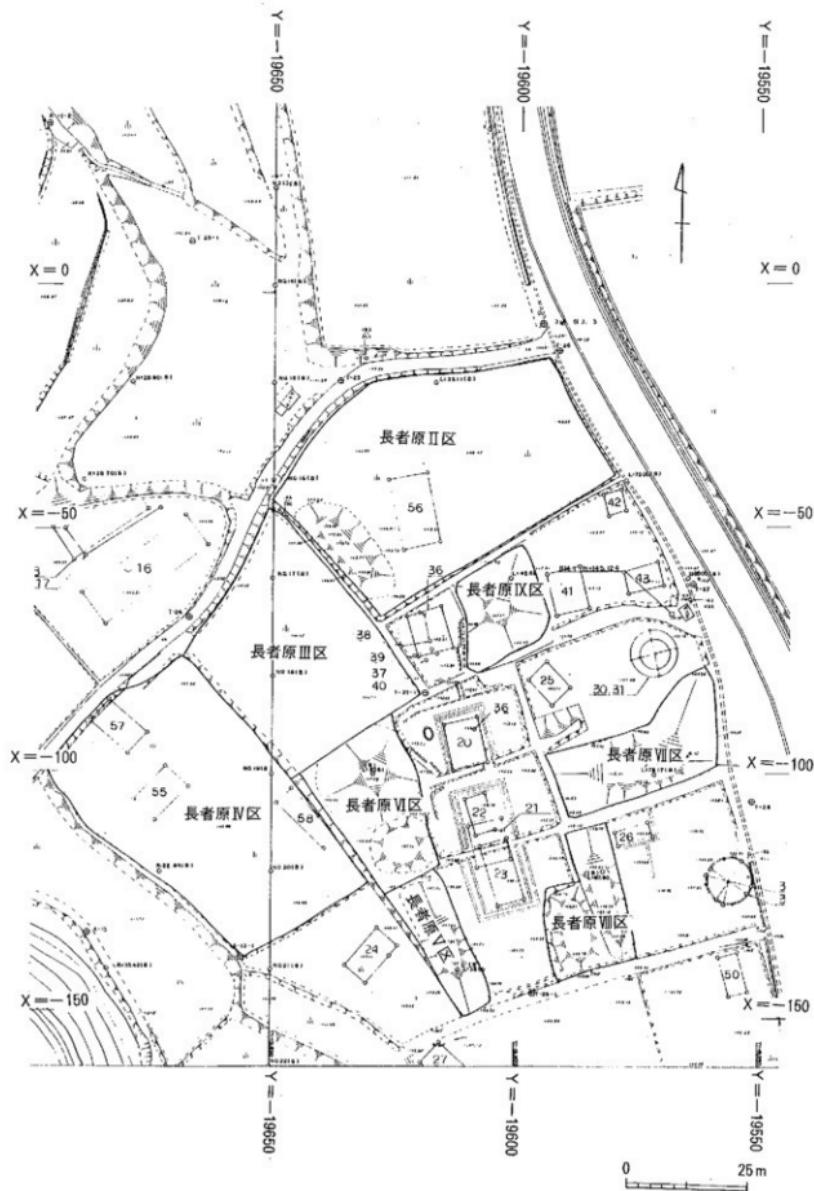
第1表 調査進行表

調査区 \ 月	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3
II 区	表土剥ぎ	検出					実測					
III 区		表土剥ぎ					検出					次年度
IV 区		表土剥ぎ	検出									実測
V 区	排土除去・表土剥ぎ	検出										
VI 区		表土剥ぎ	検出				実測					
VII 区	排土除去・表土剥ぎ	検出										
VIII 区		排土除去・表土剥ぎ	検出									
IX 区	排土除去・表土剥ぎ	検出	実測									



第1図 駒智城跡地形図

便宜上、長者原Ⅱ区～Ⅸ区に分けて実施した。Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ区は重機で表土剥ぎを行い、その後、人力で遺構検出作業を実施した。Ⅴ区～Ⅸ区は、以前の調査の排土置き場であったので、重機による排土除去作業終了後、表土剥ぎを重機で行い、人力で遺構検出を行った。表土剥ぎの土と前調査の排土は、仮造成工事の盛土



第2図 調査区位置図

に利用した。

II区～IX区の調査で、遺構を確認できたのはII・III・IV・VI・IX区で、その他の調査区では遺構を確認できなかった。II区～IX区の調査進行状況は、第1表のとおりである。

III区で建物跡を検出したが、調査が今年度では終了できなかった。未調査部分を来年度に実施することにした。

第Ⅱ章 調査の成果

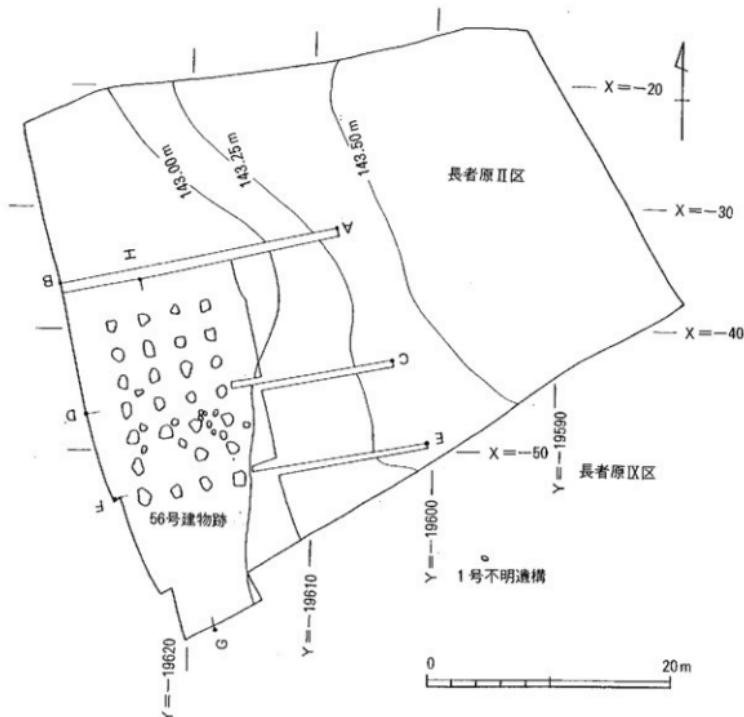
第1節 Ⅱ区の調査について

1. 56号建物跡の調査

(1) 建物跡について（第3図～第12図・第2表）

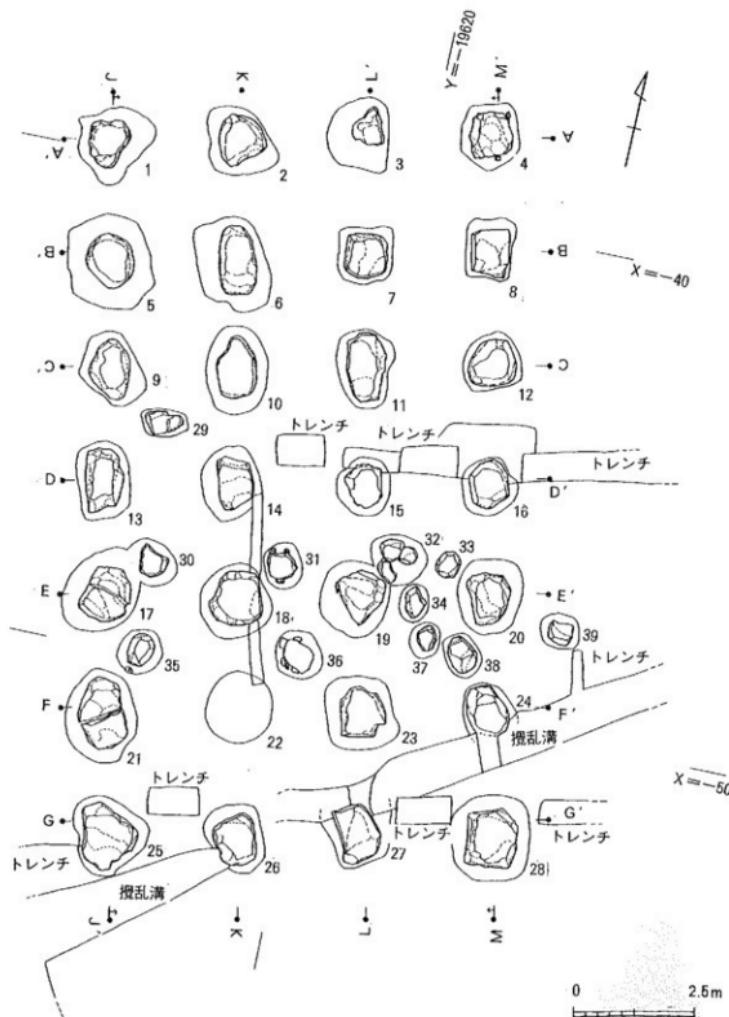
第3図はⅡ区の地形測量図である。測量した地形は、整地Ⅰ層の面と整地Ⅰ層上面に重なるⅢ層下面である。この面での地形は、東側が最も高く西側に向けて緩やかに低くなる。その最も低くなった西側端部に56号建物跡が位置する。56号建物跡の南側には、36号・20号・22号建物跡などが築造されている。これらの建物跡が分布する周辺より低くなった箇所は、米原集落の西側にある谷部が南側にのびており、その頭部にある。

56号建物跡は3間6間の総柱礎石建物跡である。（その礎石の石材については付論で田村実先生が報告さ



第3図 56号建物跡・土層断面の位置図

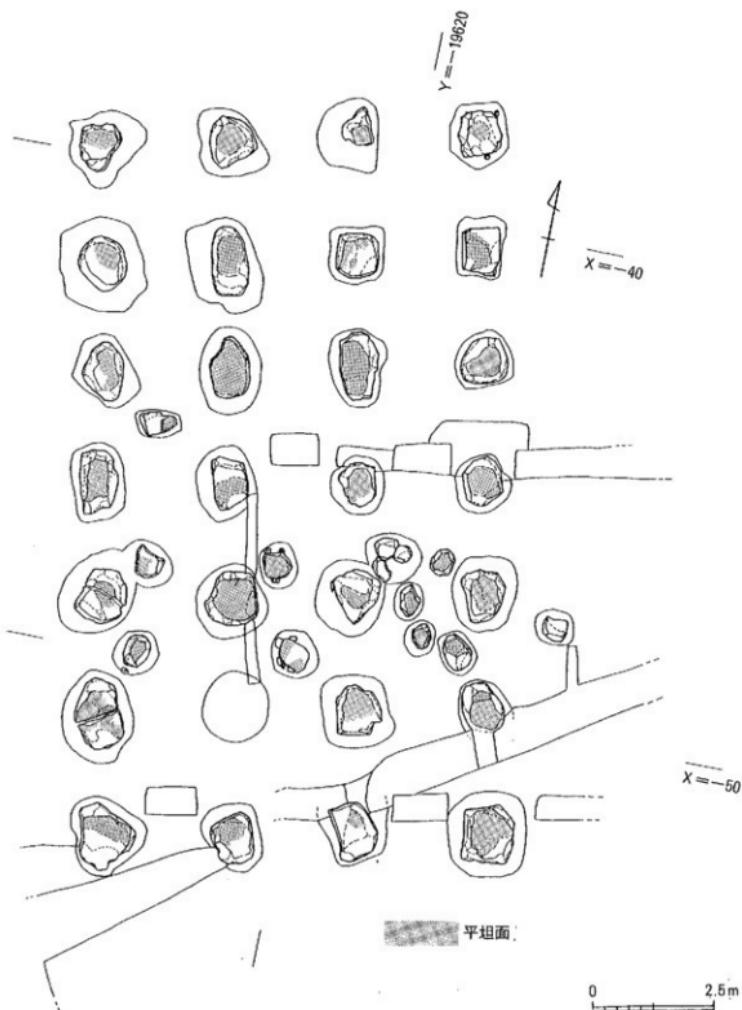
れている。) 碓石については、第4図のように北西端部の礎石より東側へ番号を付けている。22号礎石部分には、細かく破碎された礎石がII層中に存在するが、他の礎石と存在する層が異なるため図示していない。22号以外の礎石は整地I層の上面で検出し、その面で礎石を据えるための掘り込みも確認できた。このこと



第4図 56号建物跡実測図

より、56号建物跡の築造当時の面が整地Ⅰ層上面と考えられる。ただし、33号礎石の掘り込みは精査したが、検出できなかった。

礎石には3間6間の総柱に伴う大型の礎石（1～21号・23～28号）とこれらの柱筋とは異なる小礎石とが

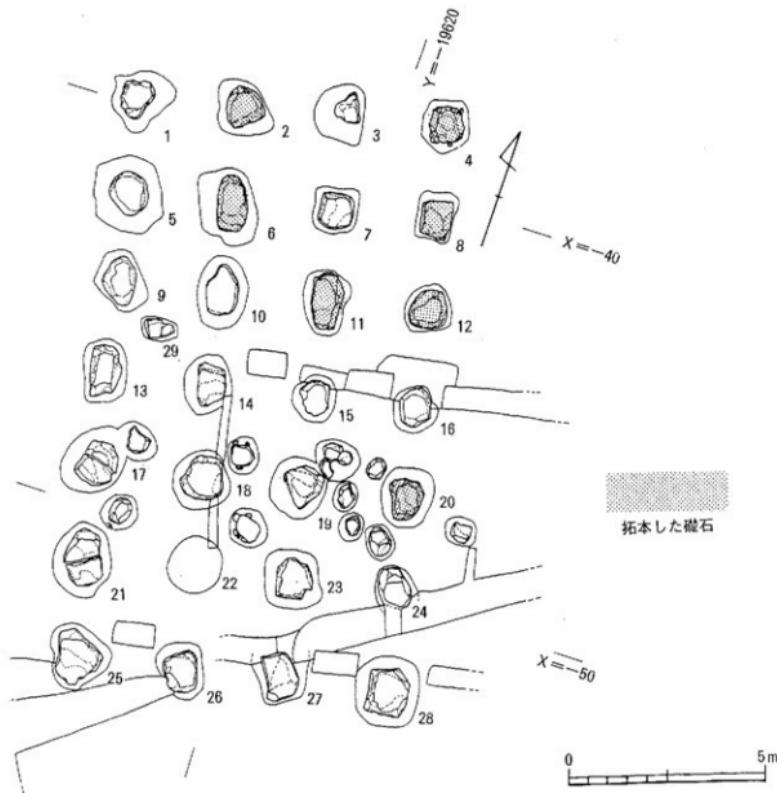


第5図 56号建物跡礎石上面の平坦面位置図

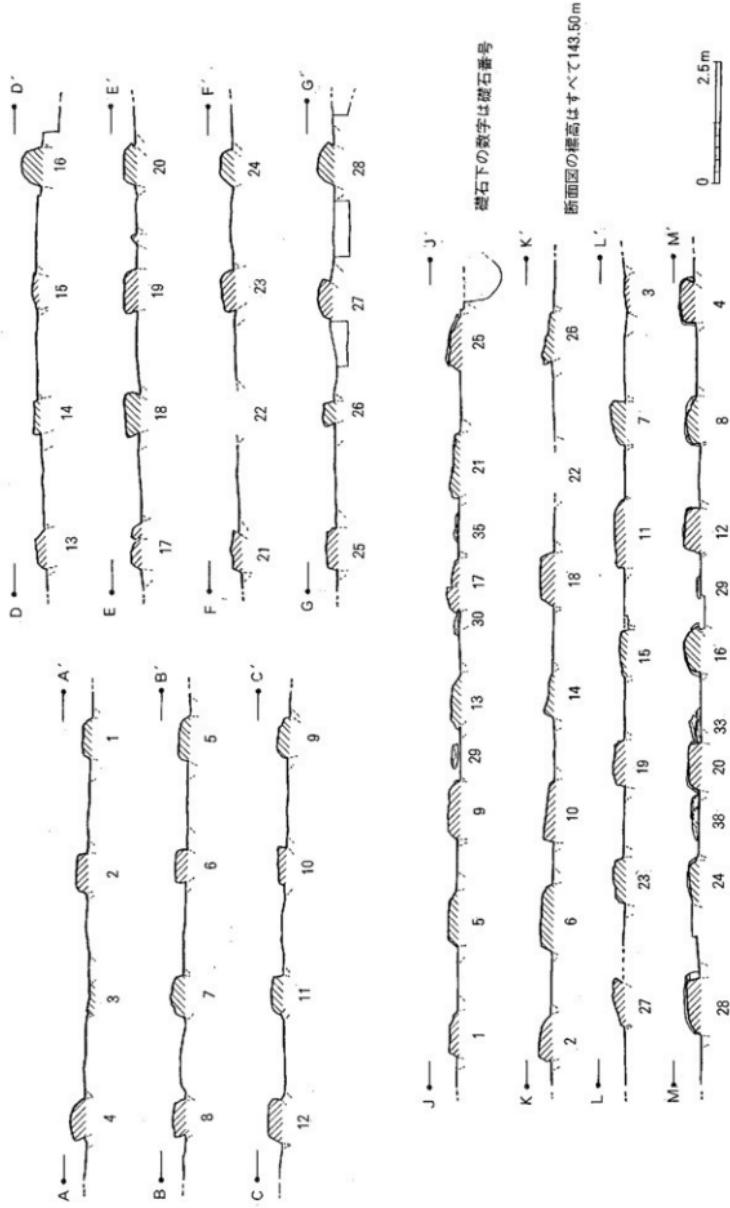
ある（29~39号）。大型の礎石の大きさは最大長約0.7~1.5m、最大幅約0.6~1.1mを測る。小型の礎石の大きさは最大長約35~75cm、最大幅約35~80cmを測る。この大型と小型の両者の礎石は、掘り込みに切り合ひ関係がなく、同時期と考えられる。縦柱に伴う礎石の中で、3号礎石だけは、他の礎石よりやや小型であり、礎石上面の高さが低い（第7図A-A'、L-L'）。32号の掘り込み内には3個の小石が隣接して分布している。31・36号礎石については、検出面で根石が確認できる。17・21号礎石は検出時には既に、ほぼ中央部で二つに割れていた。24号礎石の南端部から27号礎石の北端部にかけての箇所と26号礎石の西側には、複数溝跡がのびる。

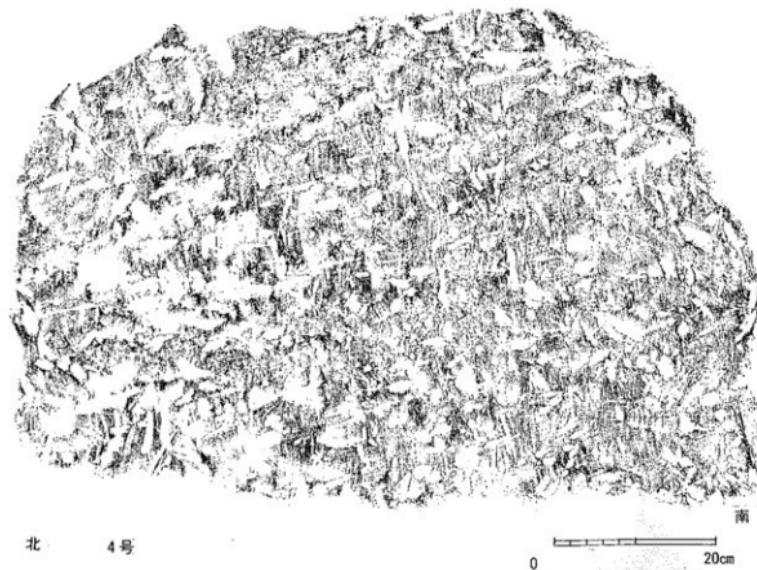
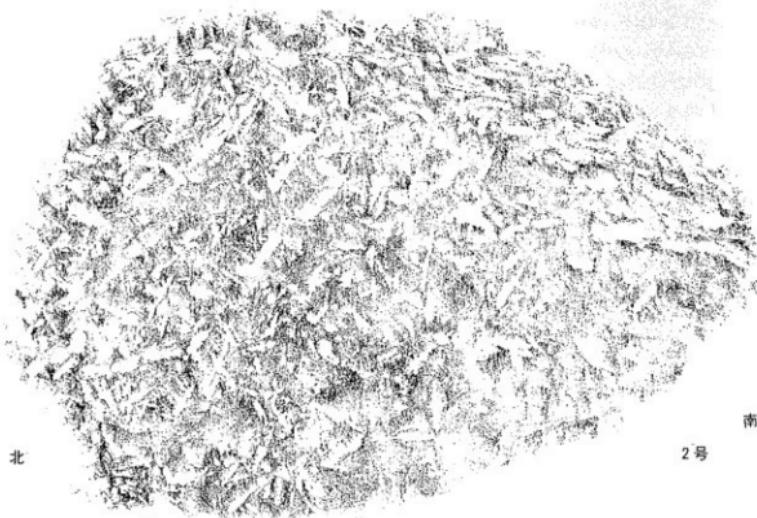
第5図は礎石を観察し、柱を据えることが可能な半坦面に網をかけて表現した。柱を据えることが可能な面より柱間を判断すると、桁行は約2,368m（8尺）、梁行は約2,664m（9尺）の等間となる一案が考えられる。また、小型の礎石については、30・31・33号礎石と35・36・38号礎石とがそれぞれに柱筋が通るようである。

第6図は建物跡の断面図である。先述した3号礎石以外の大型礎石上面の高さについて見てみる。桁行方



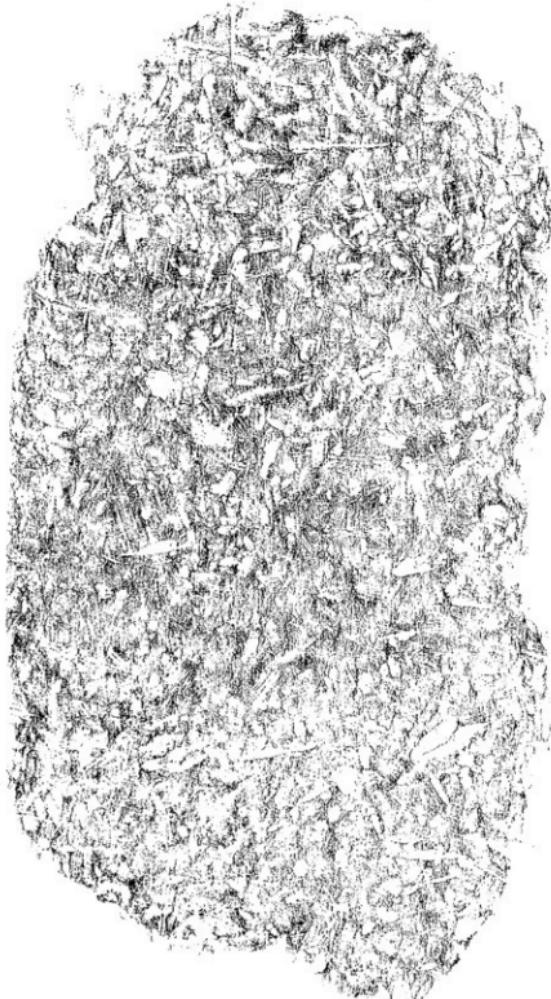
第6図 56号建物跡礎石拓本の位置図





第8図 56号建物跡石上面拓影

北



6号

南

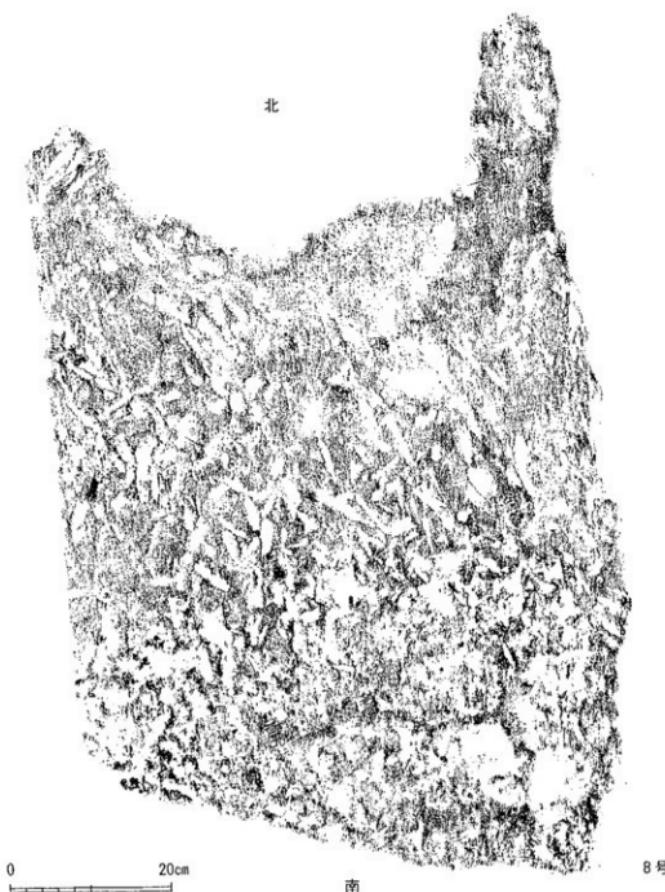
0

20cm

第9図 56号建物跡磁石上面拓影

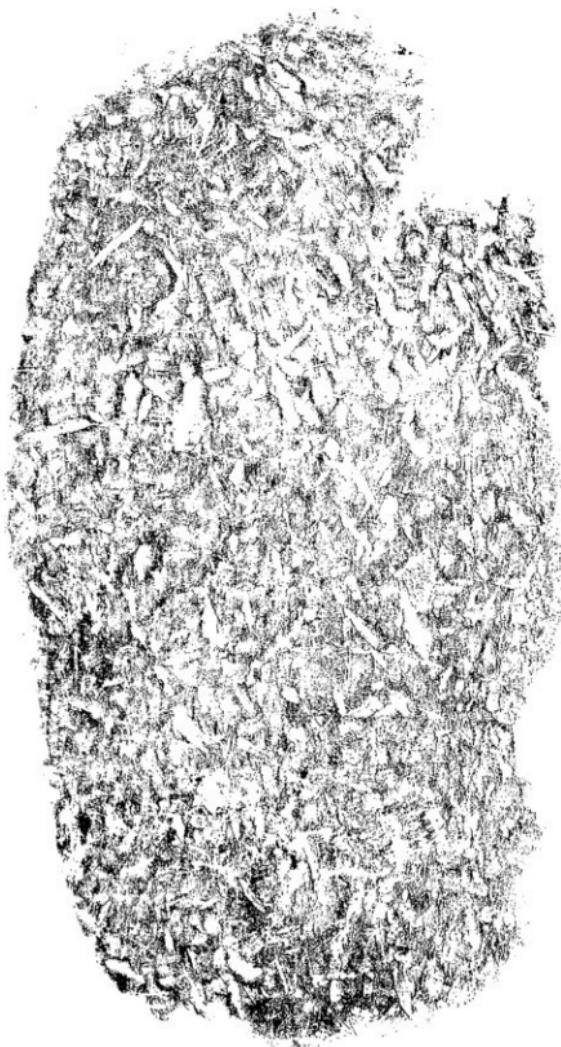
向の礎石上面の高さはほぼ揃っている。梁行方向の礎石上面については、1・2・5・9・10・13・14・15・17・21・25・26号礎石がそれぞれの梁行方向の最も高い礎石より、約10~25cm低い状況を呈している。小型礎石の上面については、大型礎石より一段低い高さ（約10~30cm）で大まかに揃っている。礎石上面の高さの誤差があまり大きくないことや礎石検出状況より、礎石は築造当時の状態をかなり残していると考えられる。ただし、17・21号礎石については、二つに割れた時期が不明である。

溶結凝灰岩の礎石の上面及び側面には、加工痕跡が確認できる。その中でも、加工痕跡が顕著なもの拓本をとった箇所を第6図に示している。拓本をとったのは2・4・6・8・11・12・20号礎石の上面のみで



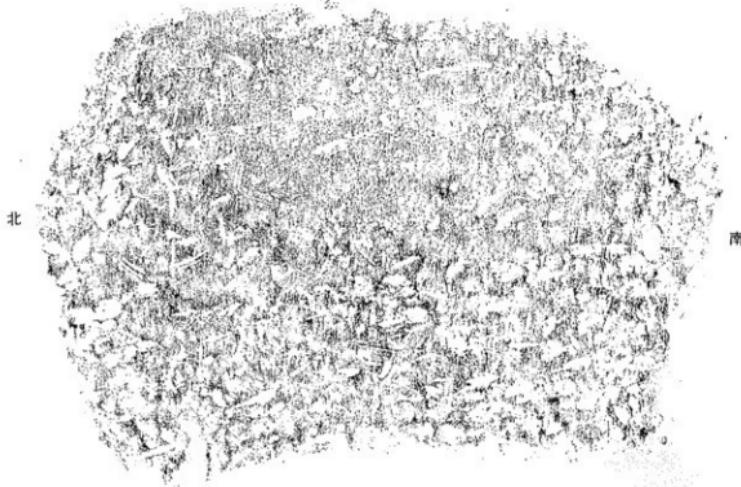
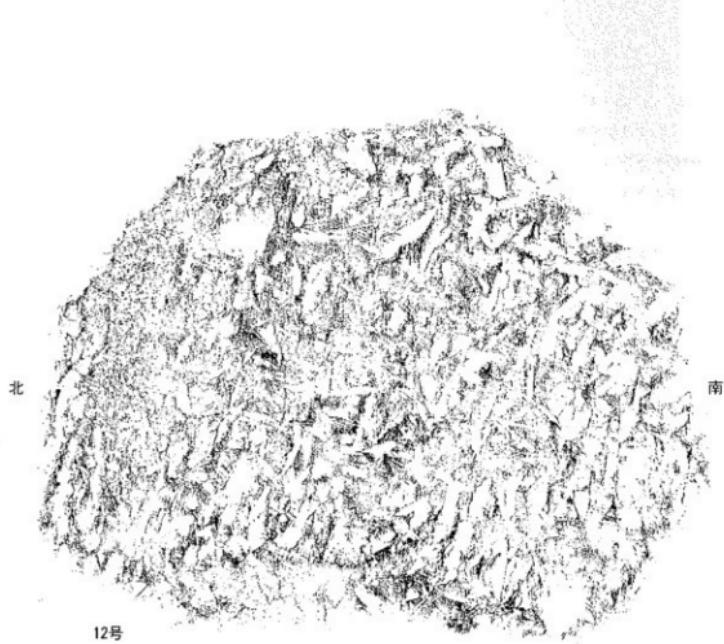
第10図 56号建物跡礎石上面拓影

北

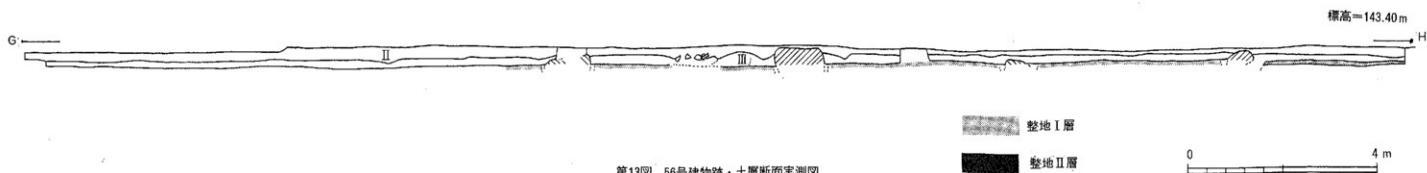
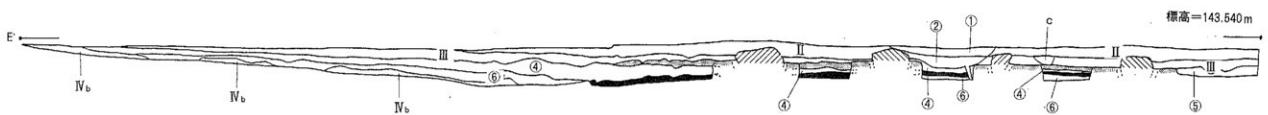
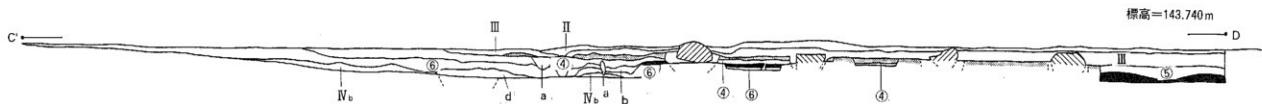
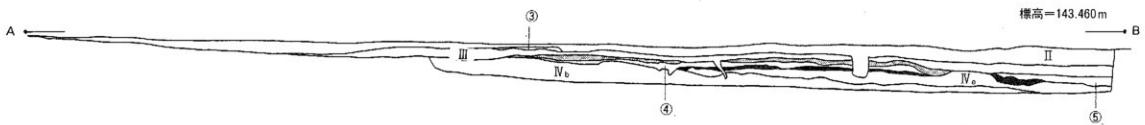


南

第11図 56号建物跡礫石上面拓影



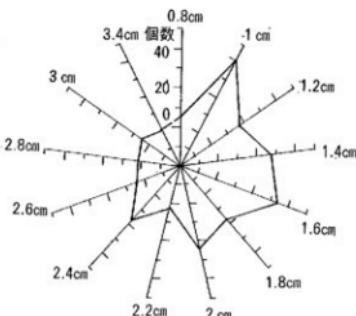
第12图 56号建筑物踏勘石上面拓影



第13図 56号建物跡・土層断面実測図

ある。第8図から第12図にはその拓影を掲載した。加工痕跡を観察すると、調整を加える方向に一定性はなく、あらゆる方向から調整を施している。加工痕跡の長さは短いもので1cm前後、長いもので10cm前後である。加工痕跡の幅については、計測できるものを上記の礫石の中から抽出し実測した。その結果をまとめたものが第2表である。この表を見ると、1cm前後・1.6cm前後・2.4cm前後の三箇所に計測値が集まる傾向にある。このことより、三種類の幅をもった加工工具による調整が推定できる。

第2表 磨石加工工具の幅計測表



(2) 層序について（第3図・第13図）

56号建物跡とその周辺部の土層については、四箇所で実測した。その実測地点は第3図に示した(A-B・C-D・E-F・G-H)。第13図はそれらの地点の実測図である。56号建物跡を含めた長者原地区の基本土層は次の通りである。

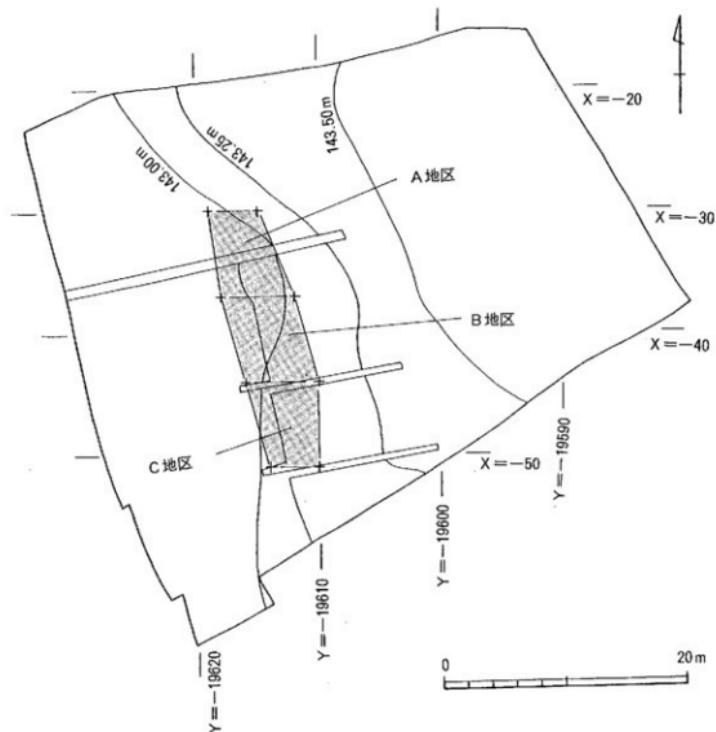
- I 層；耕作土。I層を除去した後に実測したので、実測図にはない。
- II 層；淡黒褐色土。II層は近世以降の遺物を包含する。
- III 層；黒褐色土。III層は炭化米などの炭化物を多量に含む。布目瓦片・須恵器片・土師器片が包含されるが、青磁などの中間遺物も少量混じる。
- IV a層；淡茶褐色土。弱粘質土である。IV b層に比べると、粘性が弱い。
- IV b層；褐色土。崩粘質上で、ローム状を呈している。
- 下記の層は56号建物跡周辺で部分的に見られる層である。
- ③ 層；黄褐色土。ブロック状に入る。
- 整地 I 層；赤褐色粘質土。固くしまる。整地 I 層は56号建物跡に伴う層である。赤色よりも黄色が濃い箇所が部分的にある。細かく見ると層の上面が多少円凸しているが、層全体として見ると、標高143m前後の高さでは水平に分布している。この層には少量の須恵器片・土師器片・布目瓦片が含まれる。
- ④ 層；茶褐色土。多量の布目瓦片や少量の須恵器片・土師器片が含まれる。炭化米などの炭化物も含まれる。
- ⑤ 層；黑色土。この層の分布範囲は、56号建物跡の西側に限られる。
- 整地 II 層；淡赤褐色粘質土。固くしまる。整地 I 層と比べると、赤色が薄い。整地 II 層は深掘したトレチで部分的に確認した。
- ⑥ 層；淡茶褐色土。断面図C-D・E-Fの深掘りしたトレチで確認した。
- a 層；淡黒褐色土。焼土を少量含み、ブロック状に入る。炭化米などの炭化物が多量に含まれる。
- b 層；赤橙色土。焼土である。少量の炭化物が混じる。
- c 層；灰黒褐色土。ブロック状に入る。
- d 層；黑茶褐色土。浸状構造の覆土と思われる。

(3) 4層の遺物出土状況について（第14図～第19図）

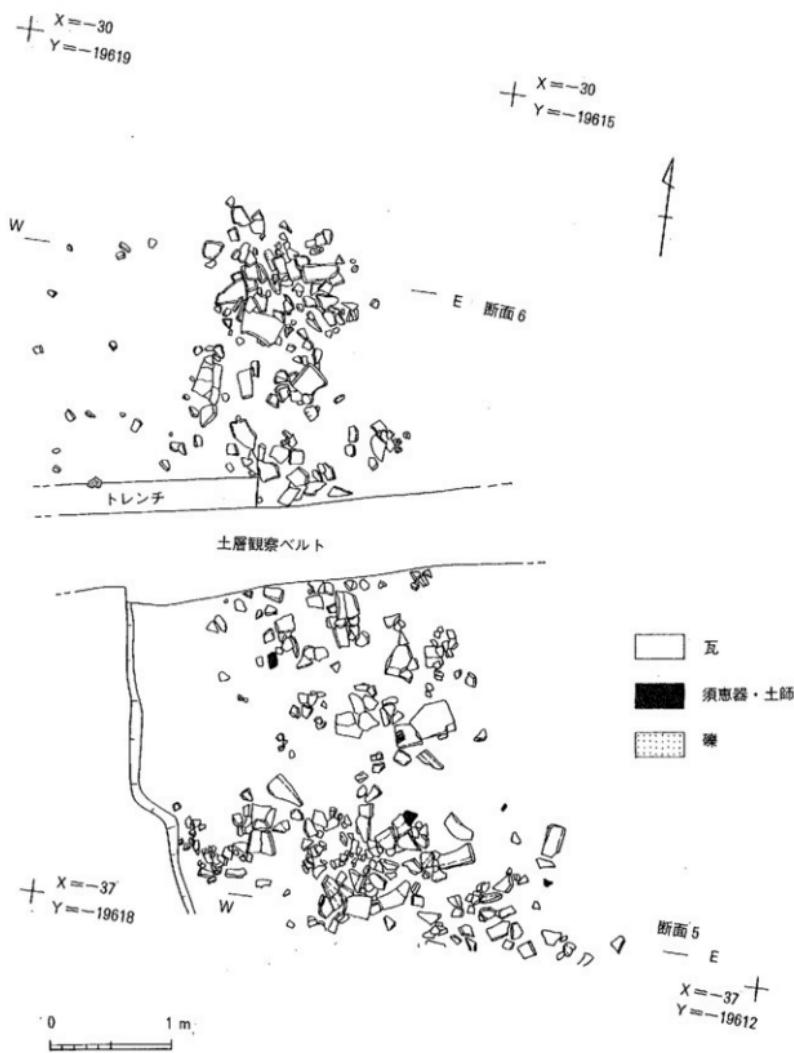
56号建物跡の東側部分より、瓦片・須恵器片・土師器片がまとまって出土した。その分布状況は帯状を呈している。

調査の当初、これらの遺物は56号建物跡に伴うものと判断して検出作業を進めた。しかし、検出作業の終了時点で出土層序を再確認すると、遺物は56号建物跡に伴うものでなく、56号建物跡の整地Ⅰ層より下層に位置する4層より出土していることが判明した。4層出土遺物は、層序より判断すると、整地Ⅱ層に建物跡が築造された時から56号建物跡の築造以前の間に伴うものである。

第14図は後載する遺物の出土状況の実測図の位置を示したものである。実測図の場所は、便宜的に北から



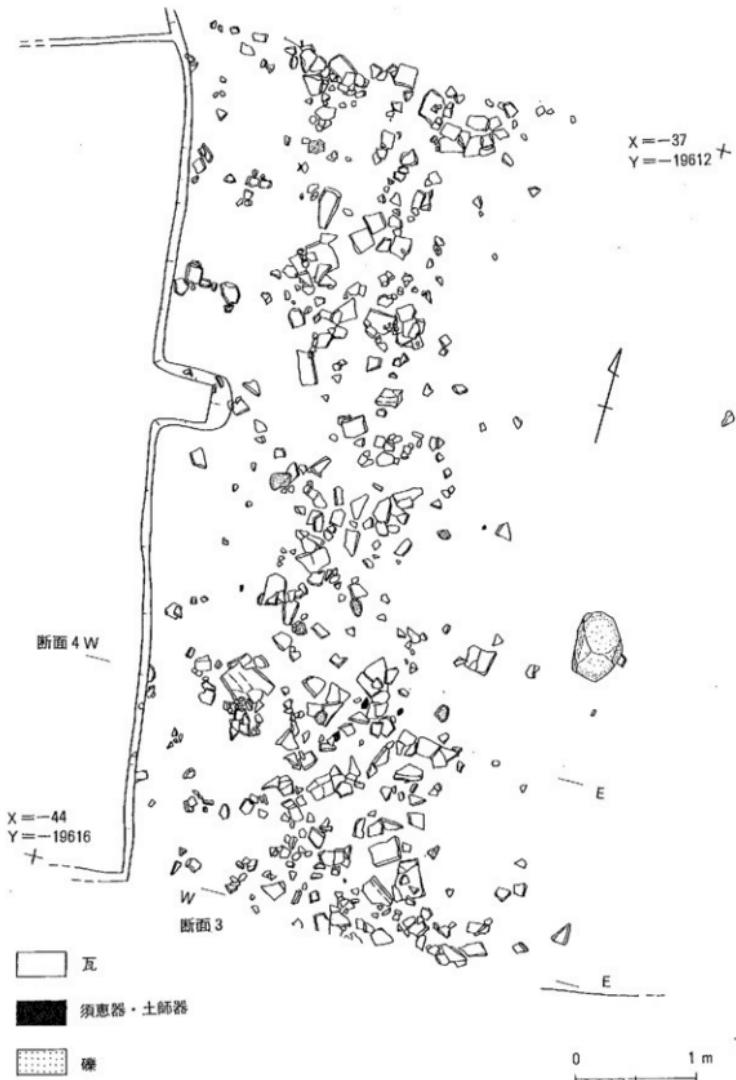
第14図 4層遺物出土状況実測地区図



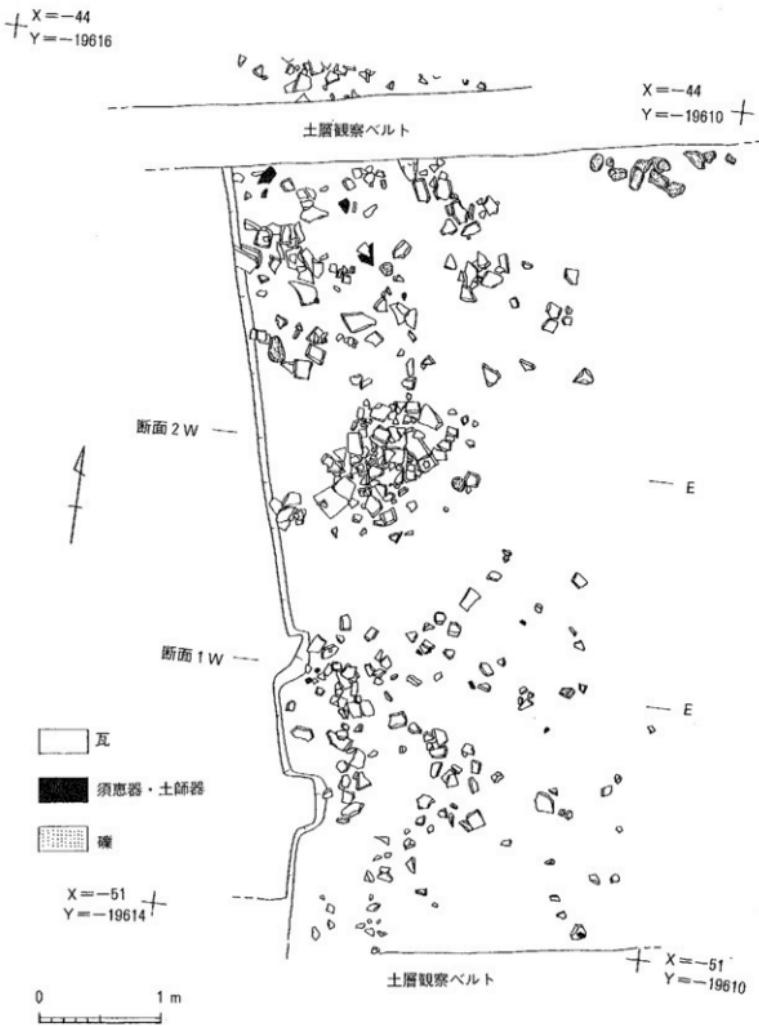
第15図 4層遺物出土状況実測図（A地区）

+ X=-37
Y=-19618

X=-37
Y=-19612 +



第16図 4層遺物出土状況実測図（B地区）



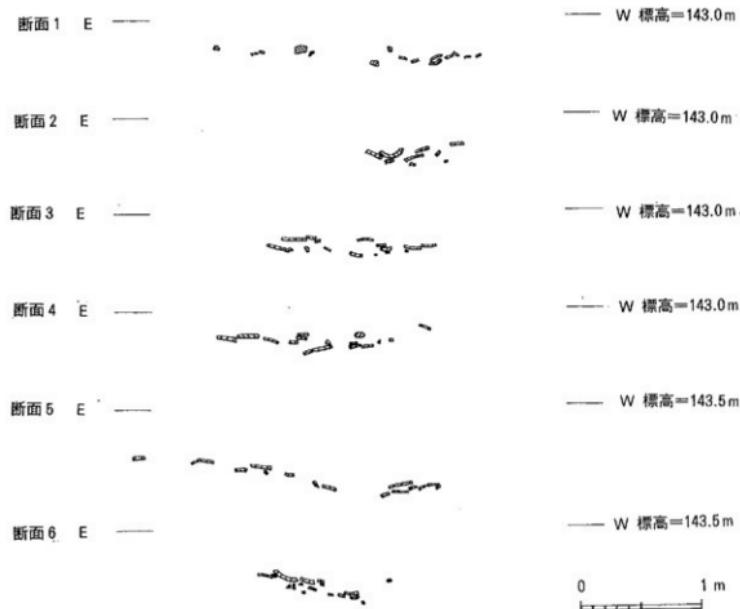
第17図 4層遺物出土状況実測図（C地区）

A地区・B地区・C地区とした。第15図～第17図はそれぞれA地区・B地区・C地区的遺物出土状況の平面実測図である。第18図はA地区・B地区・C地区的断面1～断面6地点の遺物出土状況の断面図である。

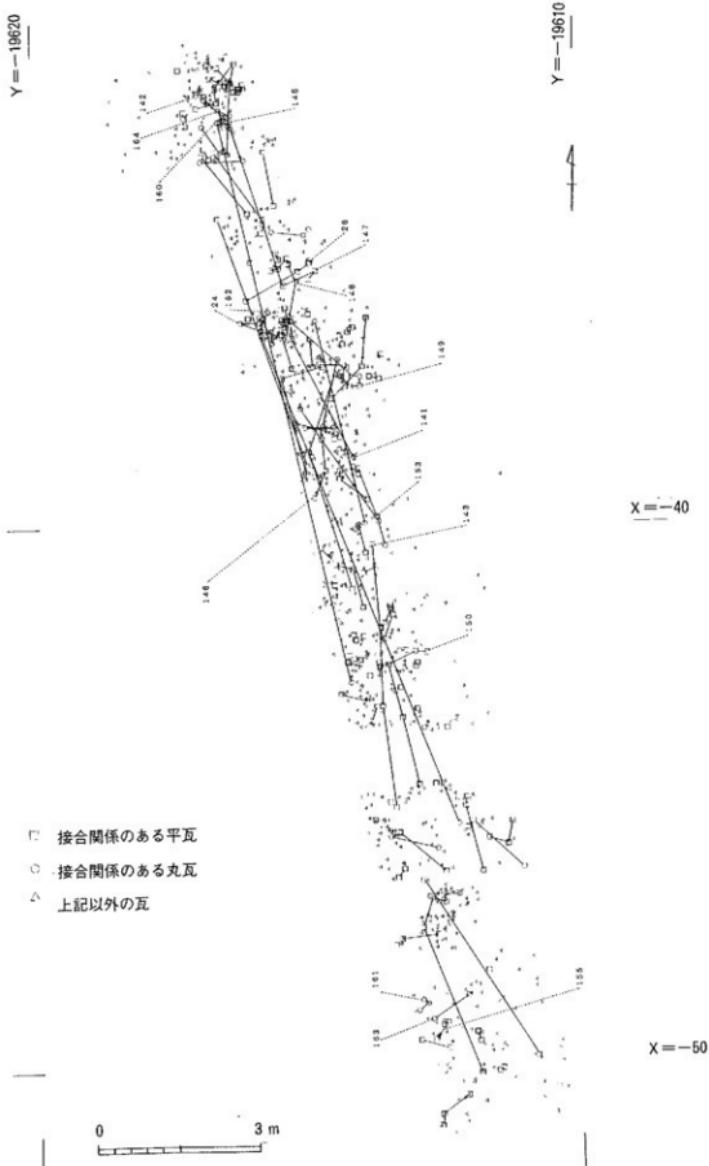
A・B・C地区的遺物出土状況を見ると、遺物は地形の変化に沿った状態で、ほぼ南北方向に帯状に分布している。遺物の殆どは瓦片であり、少量の須恵器・土師器・礫が混じる。瓦片の出土状況を観察すると、大きい瓦片が多く、大きい瓦片の周囲に小さな瓦片が分布している。このような出土状況は、瓦が建物跡の屋根より落ちた状況を呈していると考えられる。そう考えると、4層出土遺物は、整地Ⅱ層に築造された建物跡に伴う可能性が高い。

第19図には瓦片の接合関係を示した。接合関係を見ると、大きく分けて二つの接合状況がある。一つは近接して出土したものが接合する。接合した破片の直線距離は数cm～約50cmを測る。もう一つは接合した破片間にある程度の距離がある。これには接合破片間の直線距離が3m前後のものと10m前後のものがある。

4層出土遺物が整地Ⅱ層の建物跡に伴い、この建物跡が56号建物跡と同様の構造になるとすれば、瓦片は整地Ⅱ層の建物跡の桁行方向にのびる屋根より落下したと考えられる。瓦片の出土状況からすれば、梁行方向にのびる屋根からの落下は考えられない。



第18図 4層遺物出土状況断面図



第19図 4層出土瓦片の接合関係図

(4) 遺物について

5 6号建物跡整地Ⅰ層出土遺物（第20図）

第20図は56号建物跡の整地層である整地Ⅰ層より出土した遺物である。

1は土師器の坏底部片である。内外器面には赤色顔料が塗布される。2は土師器の高台付坏の高台と体部の境付近の破片である。体部は外に開きながら、直線的にのびるようである。3は須恵器の坏蓋である。口縁端部近くに短いかえりが付く。体部上半部には回転ヘラ削り痕が残る。4は須恵器の高坏の坏部であり、脚部が欠損している。体部は外に開きながら内側に丸くなり、口縁端部に至る。体部下半の一部に、回転ヘラ削り痕が残る。5は須恵器の大甕の胴部片である。内外器面には平行タタキが施され、外器面のタタキは重複している。6・7は平瓦片であり、凹面に布目痕が残り、凸面にはナデ調整が施される。側辺端部には、分割面の調整痕が認められる。6の凹面下端部にはヘラ状工具の調整痕がある。

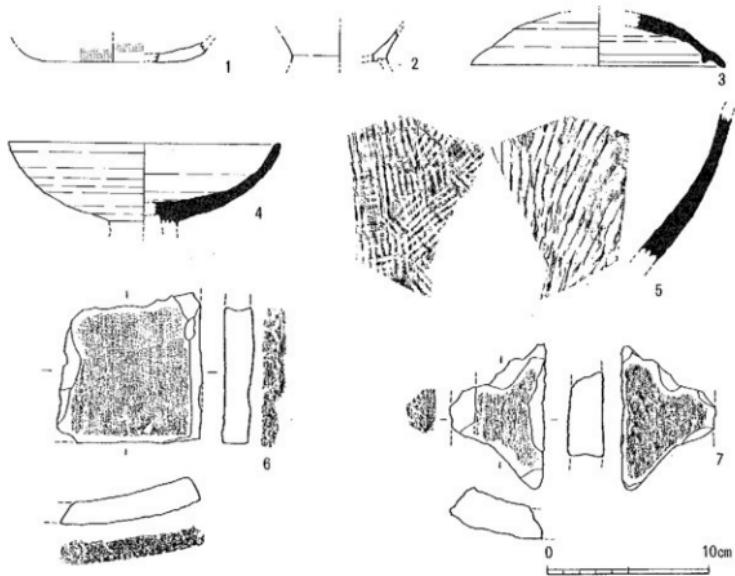
5 6号建物跡礎石掘り込みの出土遺物（第21図）

第21図は56号建物跡の礎石掘り込みの覆土より出土した遺物である。

1・2・3は須恵器の坏蓋片である。1・2の口縁端部付近には、短いかえりが付く。2の体部は内側に丸くなりながらのび、天井部付近の外器面には回転ヘラ削りが施され、それ以外の内外器面には回転ナデ調整が施される。天井部には、鉢状のつまみが付く。3のつまみは2よりやや大きめで、側面が外上方斜めに張り出す。つまみの外器面にはヘラ記号が施される。4は須恵器の高台付坏片である。高台はやや高めで、「ハ」の字形に開き、端部が僅かに外方に跳ね上がる。5は須恵器の高坏の坏部片である。体部は内側に丸くなりながらのび、端部が丸くなる。坏部は変形しており、平面形が楕円形を呈する。6は土師器の坏片である。外底部にはヘラ切りの痕跡が残る。7~10は土師器の高台付坏片である。いずれも底部と体部の境付近に高台が付く。7・8・9の高台端部は細くなりながら僅かに尖る。高台の高さは、7が低く8・9がやや高めである。10の高台は台形の断面形を呈し、「ハ」の字形に外に開く。10の体部は内側に丸くなりながら伸び、底部寄りの箇所で弱い段をもつ。7・10の内外器面には赤色顔料が塗布される。11・12は平瓦片である。11の凹面には布目痕が残り、凸面には正方形のタタキの後、ナデ調整が施される。12の凹面には布目痕と模骨痕が残り、凸面にはナデ調整が施される。側辺端部にはヘラ調整が施される。13・14・15は須恵器大甕の胴部片である。外器面には平行タタキが施される。内器面には13が同心円タタキ、14が平行タタキ、15が平行タタキ・同心円タタキが施される。

4層出土遺物（第22図～第25図）

第22図の中で、23が1~2層出土で、それ以外は4層出土の須恵器である。1~8は坏蓋片で、1・2は口縁端部を下方に短く折り曲げている。1の体部は口縁端部までは直線的にのびる。2の体部は口縁端部付近で弱い段をもち、僅かに外側に丸くなりながら天井部までのびる。3は体部がほぼ直線的にのび、口縁端部付近にかえりを貼付した痕跡が残る。4~8は口縁端部よりやや内側に入った箇所に短いかえりをもつ。かえりには人小があるが、断面形が略三角形を呈し、口縁端部より下方にはのびない。4・7の体部は外側に僅かに丸くなりながらのび、口縁端部が丸くなる。外器面の天井部付近には回転ヘラ削りが観察できる。3・5・6・8の口縁端部は強弱があるが、角ばる。9~12は坏身片で、外底部には回転ヘラ切り痕が残る。9・10は底部片で、僅かに体部が残る。11は外側に僅かに丸くなりながらのびる体部をもち、口縁端部は丸くなる。外器面の体部下半には回転ヘラ削りが施される。12はやや厚めの底部から細くなりながらほぼ直線

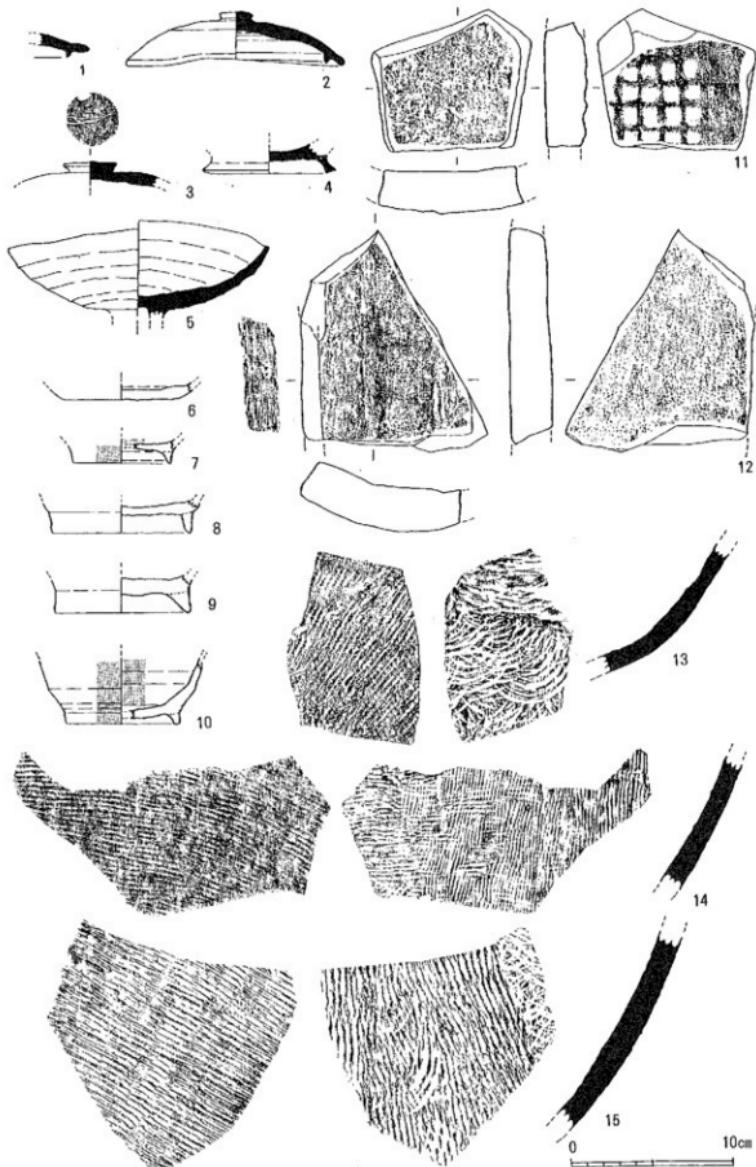


第20図 56号建物跡整地Ⅰ層出土遺物実測図

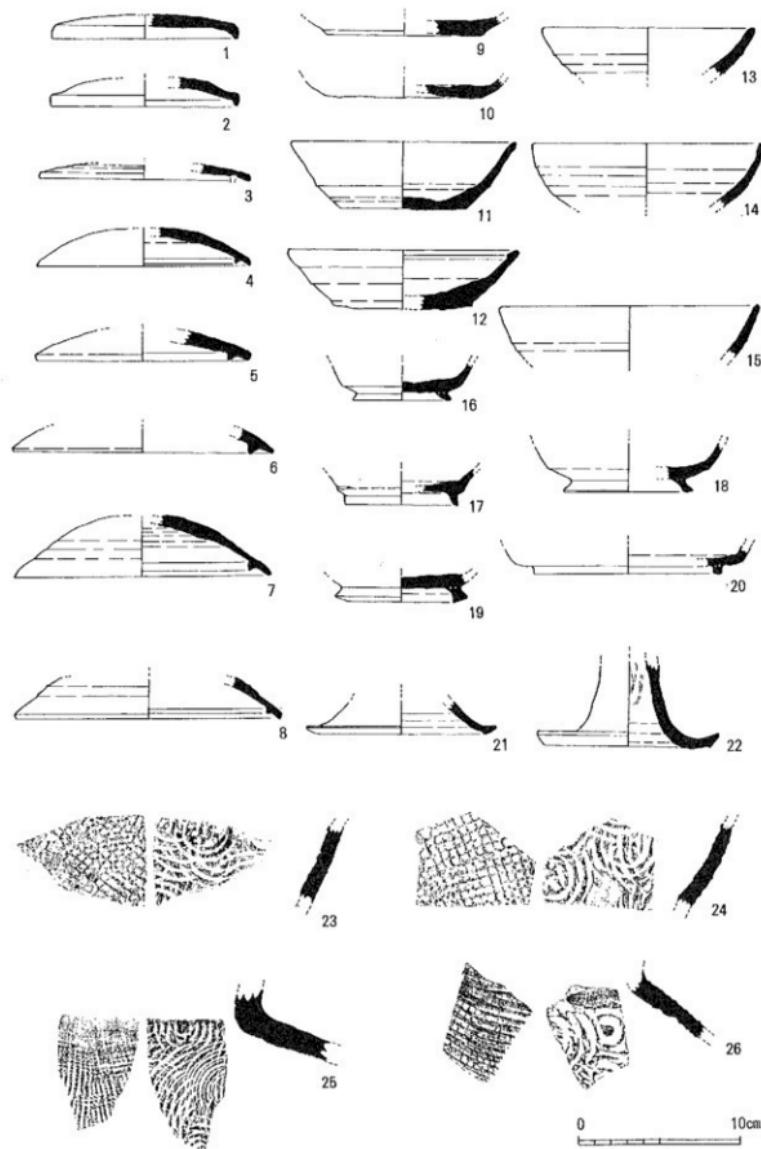
的に立ち上がる体部をもつ。口縁端部の内器面には僅かな段をもつ。13・15は壺もしくは高台付壺の体部片であろう。外側に僅かに丸くなりながらのび、口縁端部が丸くなる。14は高壺の体部片であろう。体部は外側に丸くなりながらのび、口縁端部が丸くなる。16～20は高台付壺片である。16・18・20は底部と体部の境より内側に入った箇所に高台が貼付される。高台の断面形は、20が長方形を呈し、短い。16・18が「ハ」の字形を呈し、18の端部がやや跳ね上がる。17・19は底部と体部の境付近に、断面形が「ハ」の字形を呈する高台が貼付される。19の端部は跳ね上がる。21・22は高壺の脚部片である。21は大きく外側に開き、「ハ」の字形を呈する。端部は跳ね上がり、接地面が僅かに突出する。22は体部が内傾しながら直線的にのび、端部付近で大きく外に広がり、端部が跳ね上がる。内器面には部分的にしばり痕が残る。23・24は甕の胴部片である。外器面には格子目のタタキ、内器面には車輪文タタキが施される。車輪文タタキは、三重の同心円文であり、最も内側の円内に八条の放射線条文がある。25・26は甕の頸部付近の破片である。外器面には格子目タタキ、内器面には同心円文タタキが施される。

第23図は4層出土の須恵器甕の胴部片であり、頸部との境目に粘土接合痕が残る。外器面には平行タタキ、内器面には同心円タタキが施される。

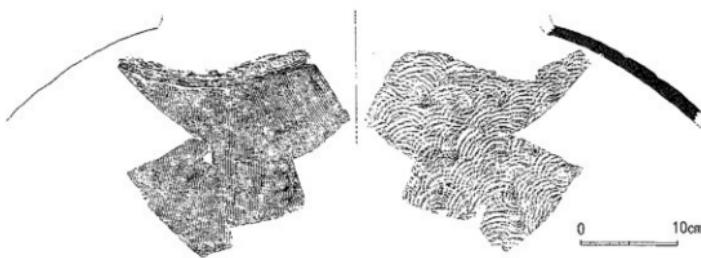
第24図は4層出土の土師器片である。1・2は壺または高台付壺の体部片である。1の体部は外に開きながら直線的にのび、口縁端部が丸くなる。2の体部は外に僅かに丸くなりながらのび、丸い口縁端部に至る。内外器面には赤色顔料が塗布される。3～29は高台付壺である。3～17の高台は、1.5cm前後のやや高めで、底部と体部との境付近に貼付され、「ハ」の字形に開く形状を呈する。3～17のうち、4は高台径が約6.7cmとやや小さく、その他の高台径は8cm前後を測る。高台の端部は、3・8・9・10・11・12・13・15・16が



第21図 56号建物跡礎石掘り込み出土遺物実測図



第22図 4層出土須恵器実測図



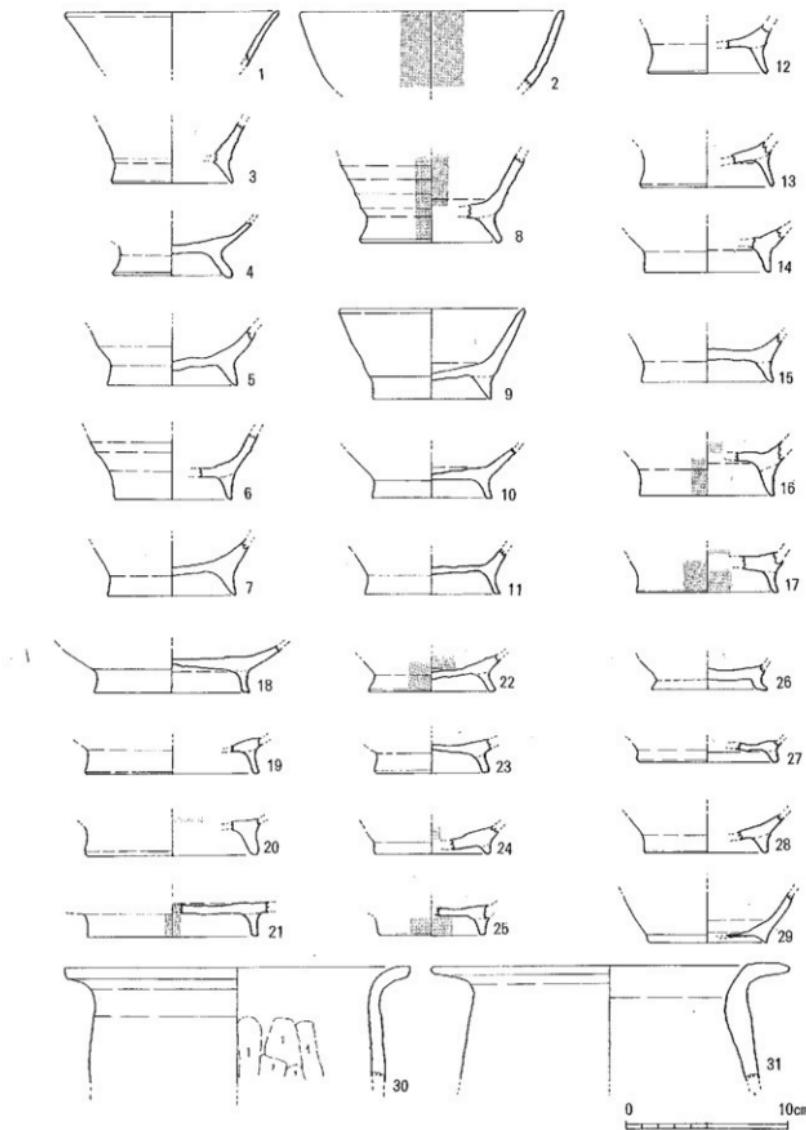
第23図 4層出土須恵器実測図

角張り、4・5・6・7・14・17が丸くなる。8・9の体部は外に開きながら直線的にのび、9の口縁端部は丸くなる。8・16・17の内外器面には赤色顔料が塗布される。18~21の高台は、「ハ」の字形に開く形状を呈し、10cm前後の径、約1.5cmの高さをもつ。高台の端部は18・19・21が角張り、20が丸くなる。20の内器面と21の内外器面には赤色顔料が塗布される。22~29の高台は、「ハ」の字形に開き、1cm前後の高さをもつ。高台径は22~26が7cm前後、27~29が8cm前後を測る。22~29の高台端部の中で、26が端部付近で外側に折れ曲がり、29がやや尖り気味であり、それら以外は角張る。22・25の内外器面、24の内器面には赤色顔料が塗布される。30・31は甕片である。口縁部は強く「く」の字形に屈曲し、端部が丸くなる。直線的にのびる30の体部は、外器面が荒れており調整の観察ができるず、内器面に下位より上位に向けたヘラ削りが観察できる。31の体部はやや外に開きながらのびている。体部の内外器面は荒れており、調整の観察ができない。

第25図は4層より出土した遺物である。1は繩文土器片である。外器面には四本の横位の沈綫文と磨消繩文がある。2~10は土器器片で、底部が観察できるものにはヘラ切り痕が残る。2~4は底径8cm前後のものである。2は器壁が厚い。3は体部と底部との境に弱い段をもつ。4は体部中央が外に丸くなり、口縁端部付近で弱く外反する。口縁端部は内器面側に僅かな段をもつ。4の器形は須恵器を模倣しているのであるか。5~8は底径10cm前後を測る。5の体部は外側に丸くなりながら短く立ち上がり、口縁端部はやや尖る。6は内器面、8は内外器面に赤色顔料が塗布される。6~8は底部から体部にかけての小破片であるため、器形の詳細が分からない。9・10の底径は11cm前後であり、やや大型である。9の内外器面には赤色顔料が塗布される。9・10は甕片が小さいため、全体の器形は分からない。

4層出土軒丸瓦（第26図）

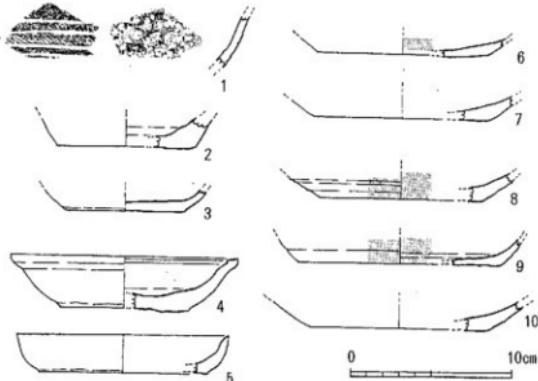
第26図は瓦当部分が離れた軒丸瓦片である。1~4の凹面の先端部付近には、瓦当部を接合するために幅約1~4mmの横位の沈綫を3~5条を施す。1・2・4の沈綫はそれぞれがほぼ平行状態であり、3は沈綫が交錯している。瓦当部接合時の補充粘土が2・3・5には瓦当裏面側、4には瓦当表裏面側に残っている。1・3・4の瓦当前面部の凹面には、丁寧なヘラ調整（部分的にナデ調整）が加えられる。2・3・5の側端部には、ヘラ調整が施される。4の側端部にもヘラ調整が施されるが、切断痕が部分的に残っている。4の側端部に沿った箇所には突起痕が確認できる。凹面には布目圧痕が残り、部分的にナデ・ヘラ調整を施している。



第24図 4層出土土器実測図

4層出土丸瓦（第27図・
第28図）

出土している丸瓦は無段の行基式丸瓦である。丸瓦全体の形状が分かるものが多く、第27図2・4のみが全体の形状をある程度把握できる。2は上端部と下端部との幅に大きな差なく、筒状の平面形を呈する。4は上端部に比べて下端部の幅が広い。上端部から下端部に向けて「ハ」の字形に開き、特に下端部付近の開きは大きく、ラッパ状を



第25図 4層出土遺物実測図

呈する。第26図4の軒丸瓦もこれと同様の形状を呈する。側端部を見ると、第27図1・5、第28図2はヘラ調整を行っている。第27図2・4、第28図1にもヘラ調整を施しているが、切断痕が部分的に確認できる。第27図3ではヘラ調整や部分的な切断痕が確認でき、分割後の未調整面も残っている。第27図2・5には突起痕が観察できる。

4層出土平瓦（第29図～第34図）

今回の調査で出土した平瓦も第5次・第7次・第9次～第12次調査報告と同様に凸面の調整やタタキによる分類が可能である。これらの報告の分類と小田富士雄氏の分類（『熊本県文化財調査報告』第116集 1991年付論）を基にして、4層出土の平瓦を下記のように分類した。

①正方形大型格子タタキをもつもの（第29図1）

凸面のタタキがナデ調整により部分的に消される。側端部にはヘラ調整を施しているが、部分的に切断痕が残る。側端部に沿った箇所に突起痕が部分的に確認できる。広端部寄りの凹面側には横方向のヘラ調整がある。凹面の広端付近には、布目圧痕を切る状態で粘土削り痕が部分的に観察できる。

②正方形小型格子タタキをもつもの（第30図1～3）

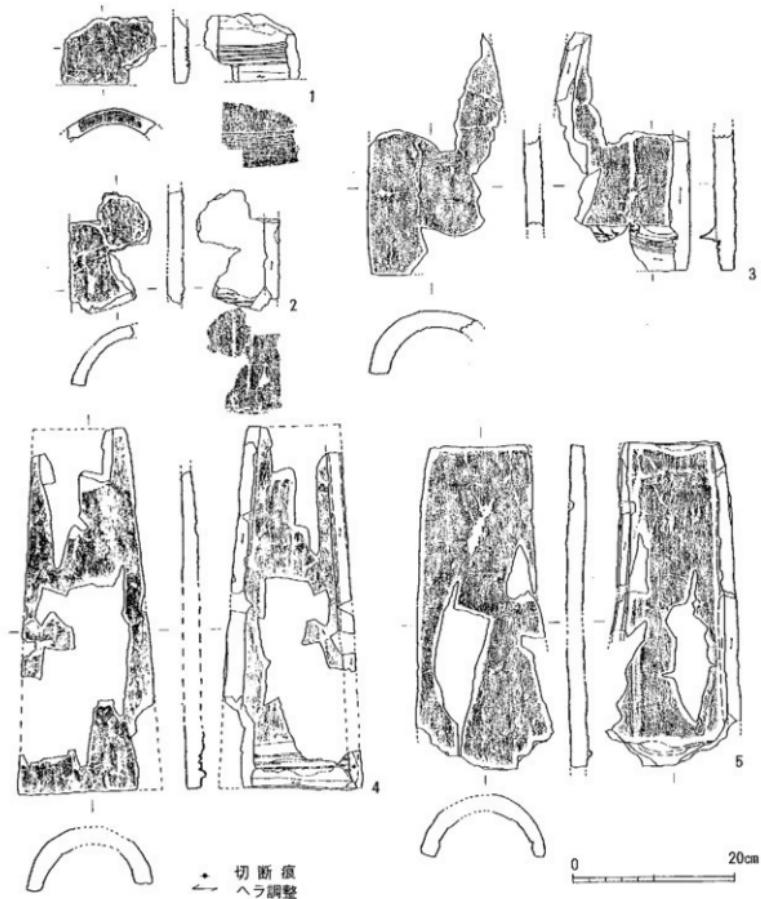
1～3の凸面狭端・広端部寄りのタタキがナデ調整により消される。2・3の側端部にはヘラ調整を施しているが、切断痕が残る。また、側端部に沿った箇所には突起痕が確認できる。1～3の凹面には模骨痕が観察でき、狭端部付近にはヘラ調整を施す。3の凹面には縦位の紐状圧痕があり、広端部付近にヘラによる粘土削り痕が観察できる。

③長方形細型格子タタキをもつもの（第29図2）

凸面に部分的なナデ調整を施す。凹面には模骨痕と縦位の紐状圧痕が観察でき、広端部寄りの紐状圧痕は丸まっている。凹面の広端部付近及び側端部にはヘラ調整を施している。側端部には切断痕と分割後の未調整面が残る。側端部に沿った部分的な箇所に突起痕が確認できる。

④細い平行線をもつもの（第31図1～3）

平行線は浅く、断面形が鋸歯の先端部に近い形状を呈する。1・3の側端部にはヘラ調整を施す。2の凹面には模骨痕が観察できる。



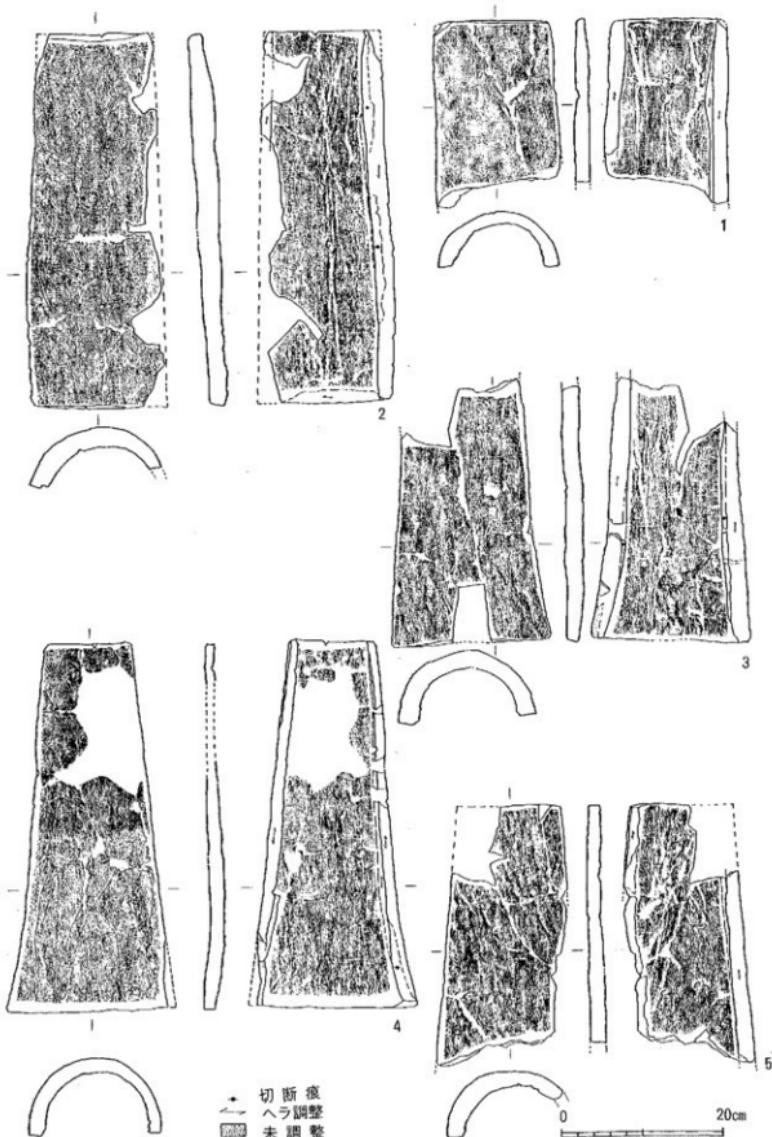
第26図 軒丸瓦実測図

⑤太い平行線をもつもの（第31図4）

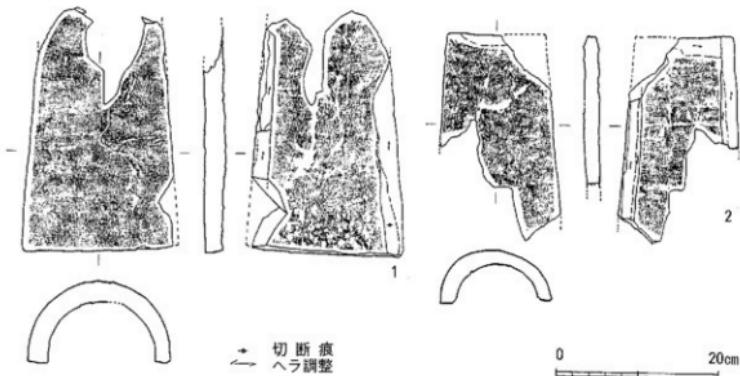
凸面の広端寄りの部分にナデ調整を施す。平行線は上記の④よりも幅広く、断面形が「U」字形を呈する。凹面の広端部付近には、粘土を削り取った跡がある。これには凸面の調整工具と同様な工具を用いたと思われる。また、凹面には模骨痕があり、狭端部付近にはヘラ調整を施している。側端部にはヘラ調整が加えられるが、部分的に切断痕が残る。

⑥縦位の条痕をもつもの（第32図1・2）

1・2とも条痕は部分的に残っている。1の広端部付近の凹凸面にはヘラ調整を施す。側端部には切断痕



第27図 丸瓦実測図



第28図 九瓦実測図

が残り、分割後の未調整面も確認できる。側端部に沿って部分的に突起痕がある。2の側端部及び凹面狭端部付近にはヘラ調整を施す。後者の調整は二段であり、断面形が「く」の字形を呈する。

⑦横位の条痕をもつもの（第32図3）

凸面の広端・狭端両端部付近に部分的なナデ調整を施す。凹面には模骨痕があり、広端寄りの部分に布端痕が観察できる。側端部にはヘラ調整を加えるが、切断痕や未調整面が残る。また、側端部に沿った箇所に突起痕が部分的に確認できる。

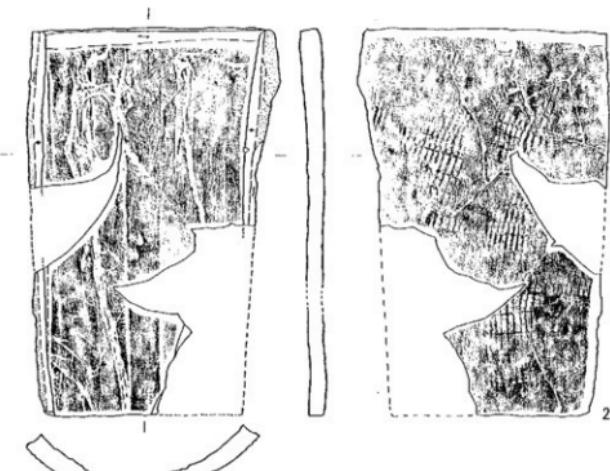
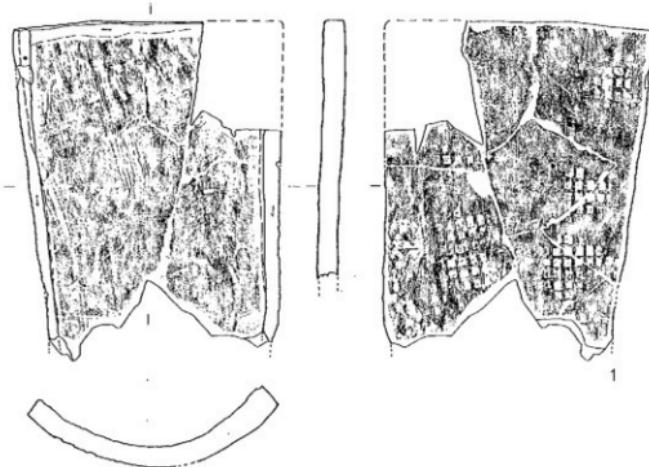
⑧ナデ調整が全面に及ぶもの（第33図1・2、第34図）

凹面には模骨痕があり、第34図の凹面広端寄りの部分に布端痕が残る。1の凸面の小範囲に布目圧痕が残る。1は凹面狭端部付近、2は凹面狭広両端部付近に部分的にヘラ調整を施す。3点とも側端部にはヘラ調整が加えられるが、切断痕が残る。1・2には未調整面も残る。

その他の遺物（第35図・第36図）

第35図1・2は4層出土の砥石欠損品である。1の上面・左側面には、ほぼ全面に磨痕が認められ、部分的に浅い溝状条線と敲打痕が残る。2の上下・左右の四面には、磨痕が全面に観察できる。上・下・左・右の四面は中央部分が端部よりも歪んでいる。

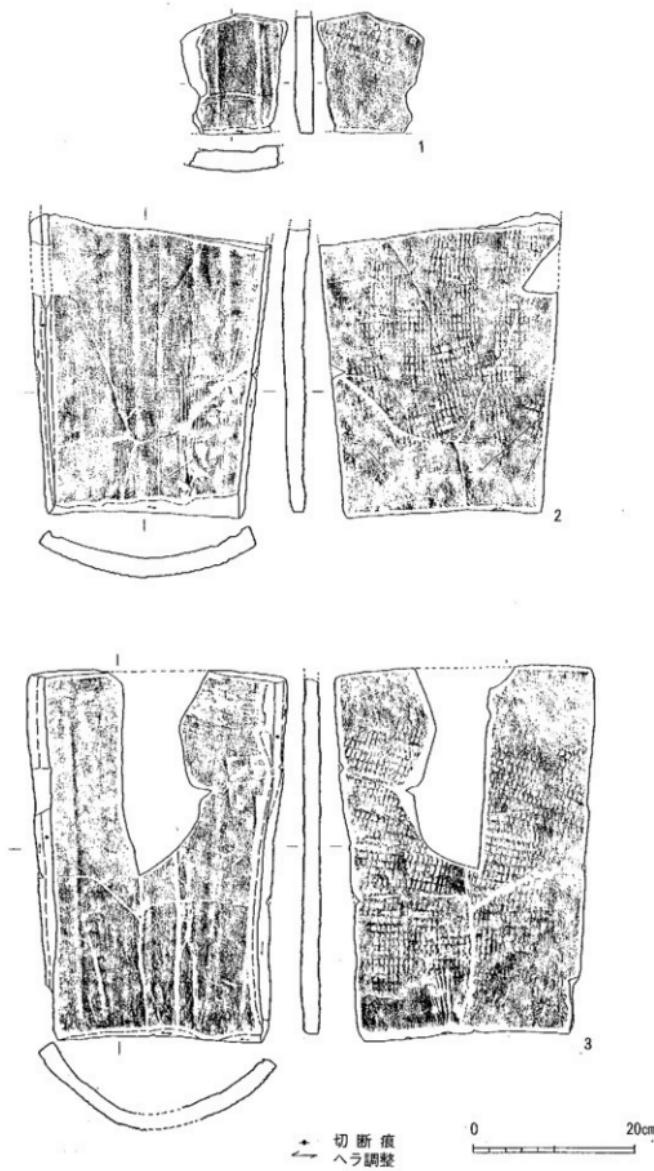
第36図1は田層出土の鉄釘であり、先端部と基部が欠損している。断面形は長方形を呈している。2は4



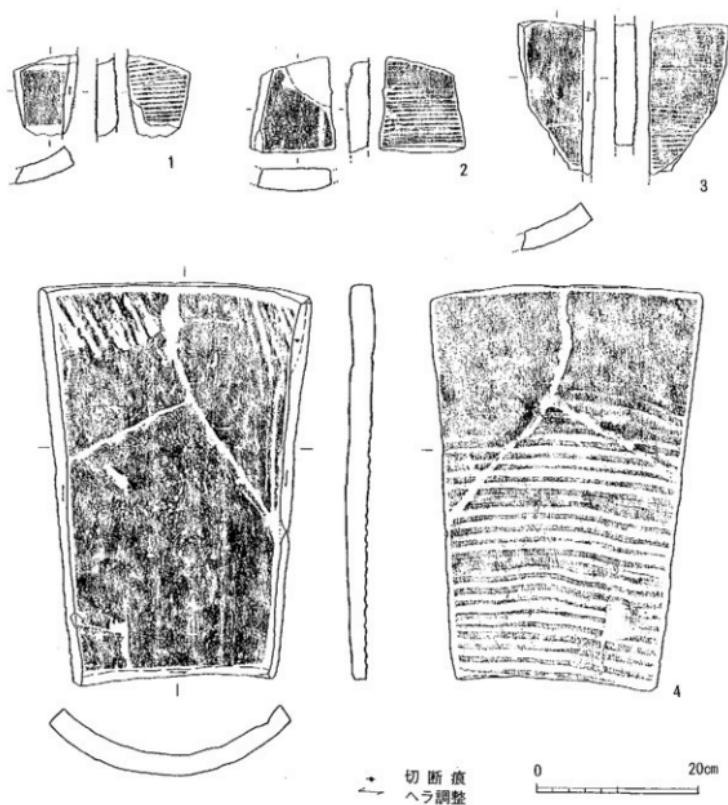
切 断 痕
ヘラ調整
未 調整

0 20cm

第29図 平瓦実測図

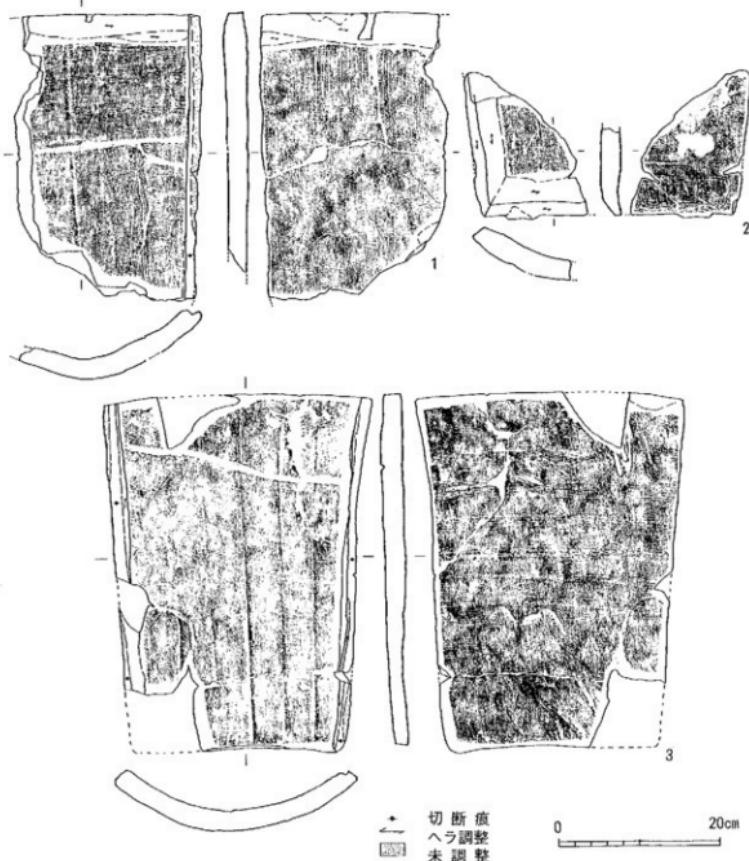


第30図 平瓦実測図



第31図 平瓦実測図

層、3はⅢ層出土の瓦二次加工品である。2は隅丸長方形の平面形を呈しており、周縁部が磨耗している。表面には布目压痕が残る。3の平面形はほぼ円形を呈しており、縁辺部に細かな剥離が加えられる。表面には部分的に長格子のタタキ目が残る。



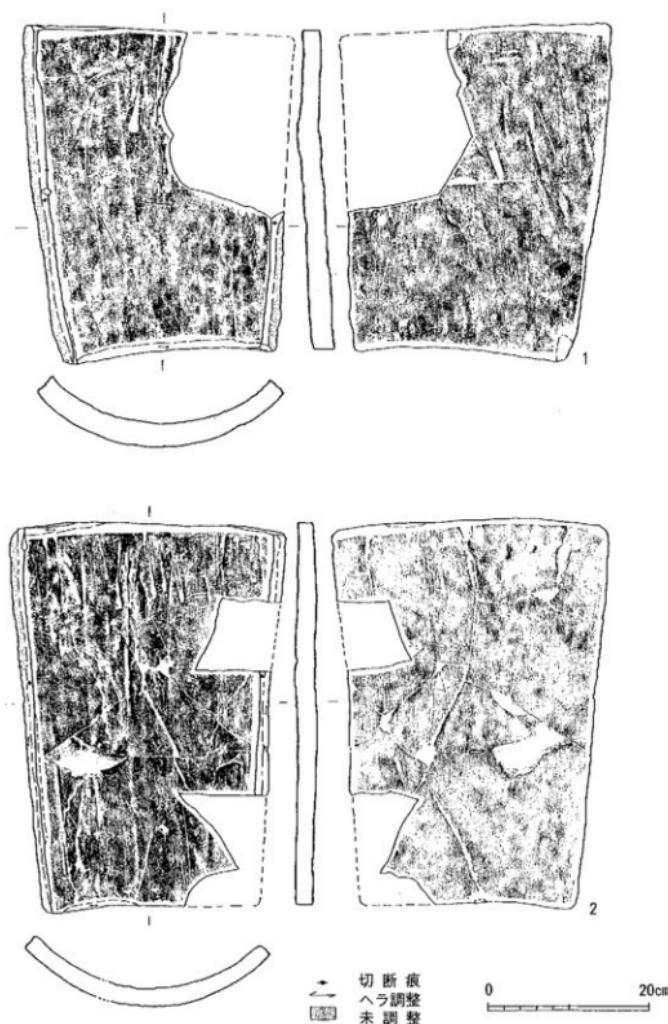
第32図 平瓦実測図

2. 土坑の調査

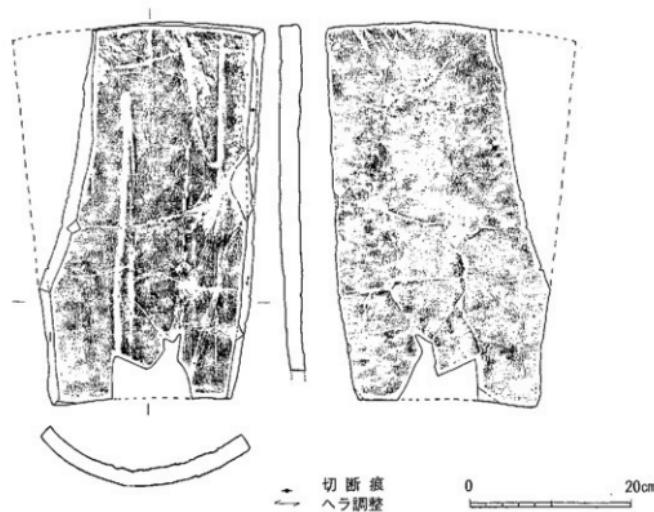
(1) 遺構分布について（第37図）

II区のⅢ層下面の地形は、東側から西側に向かって緩やかに低くなる。1号・2号・3号土坑は調査区の中で最も高くほぼ平坦な地点の南東側に、互いに近接して分布する。

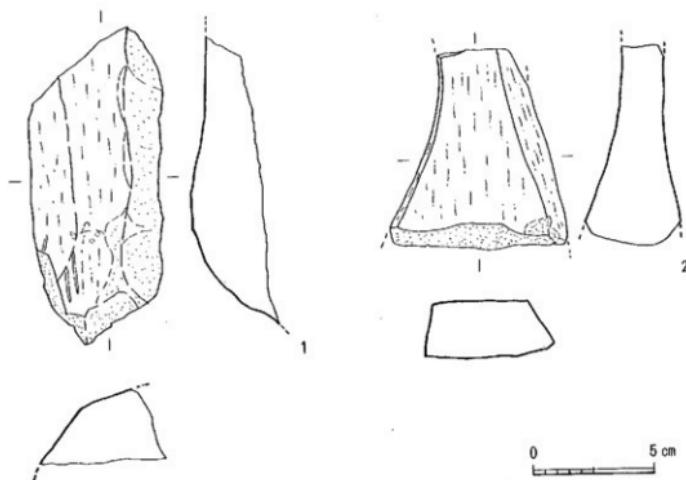
56号建物跡の南西側に、56上坑1号がある。検出時にこの土坑は建物跡に伴うと判断したため、このような遺構名を付けたが、その後の調査により、建物跡に伴わないことが分かった。



第33図 平瓦実測図



第34図 平瓦実測図



第35図 石器実測図

(2) 遺構

1号土坑（第38図）

この土坑の平面形は、南西端部が狭くなつた略楕円形を呈しており、部分的に凸凹している（長径約3.3m、短径約2.4m）。

断面形は深い皿状であり、南西部と南東部の一部が二段掘りになる（深さ約20cm～30cm）。

覆土は擾乱層以外に8層に分けることができる。①層は茶褐色土で、炭化物を多量に含む。②層は淡茶褐色土で、炭化物を少量含む。③層は暗茶褐色土。④層は黒褐色土。⑤層は暗茶褐色土で、⑥層より明るい。⑦層は明茶褐色土で、地山の白色粘土を多量に含む。⑧層は茶褐色土、白色粘土を少量含む。⑨層は白色粘土をブロック状に含む。

須恵器片が床面上より出土した。

1号土坑出土遺物（第40図）

第40図1は須恵器の蓋肩部片であろう。外器面の一部に平行タタキが残る。2は外器面に平行タタキ、内器面に同心円タタキを施した須恵器の胴部片である。

2号土坑（第38図）

2号土坑は、北側の一部分が外側にやや

張り出し、南側が内側に部分的に入り込む不整な楕円形の平面形を呈する（長径約2.6m、短径約2.1m）。北側の壁に沿って小さなピットが二箇所に掘り込まれる（径約20cm・径約26cm～30cm）。

土坑の断面形は深い皿状を呈する（深さ約20cm～30cm）。

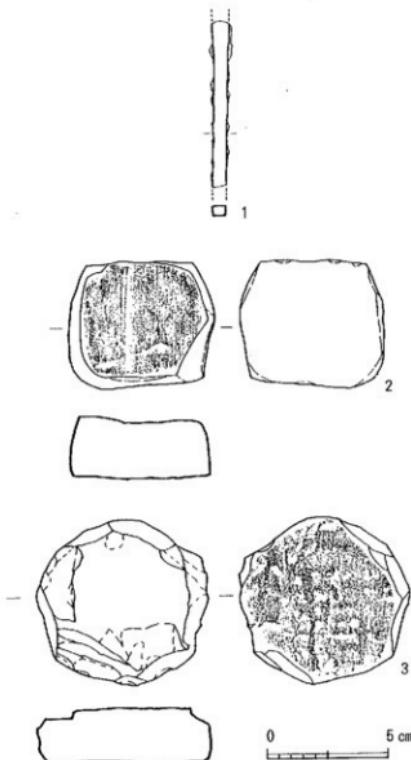
覆土は3層に分層できた。①層は黒褐色土。②層は暗褐色土で、地山の白色粘土を少量含む。③層は黄褐色土で白色粘土を中量含む。④層はブロック状に入る。

この土坑の出土遺物はなかった。

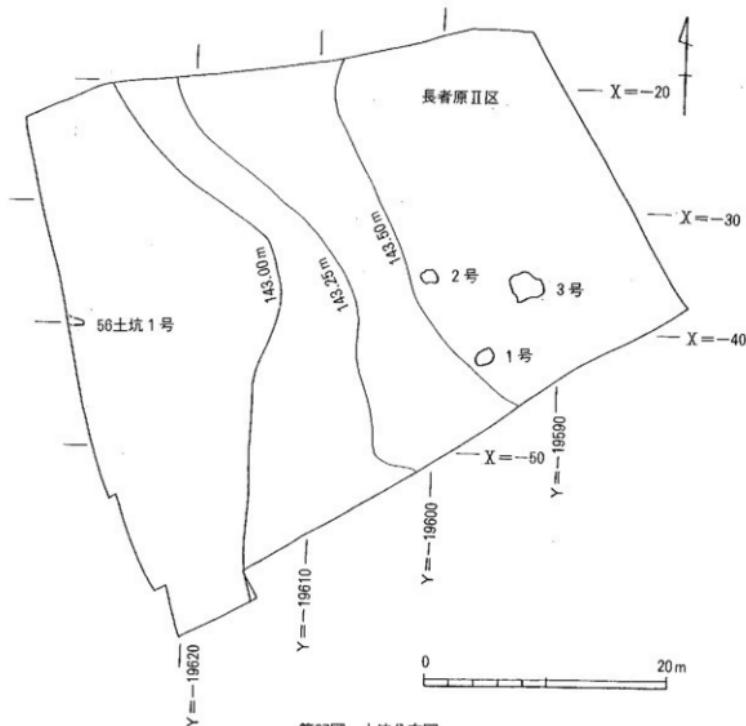
3号土坑（第39図）

この土坑の平面形は、端部が凸凹した不整な楕円形を呈している（長径約5.2m、短径約4.3m）。西壁に沿った箇所には平面形が略楕円形（長径約1.9m、短径約1.3m）、南壁に沿った部分には平面形が略長方形（2.3×0.8m）の掘り込みがある。

これらの掘り込みの床面上及び掘り込み付近より、遺物が出土した。また、土坑の西側端部の床面上に出



第36図 鉄製品・瓦二次加工品実測図



第37図 土坑分布図

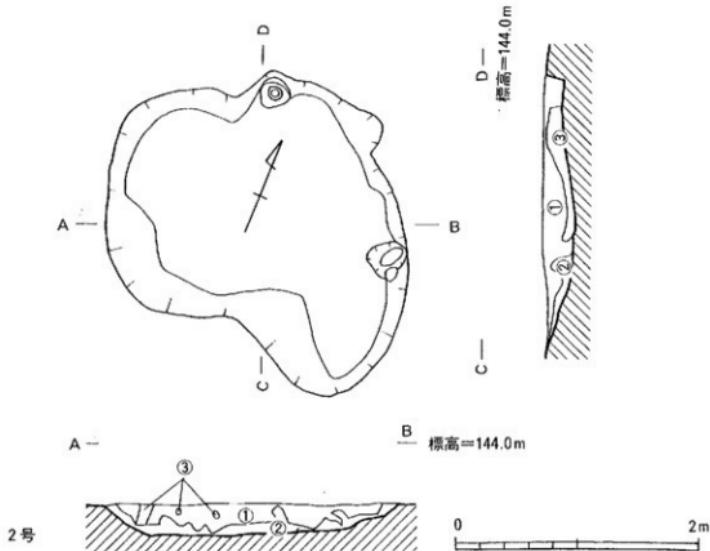
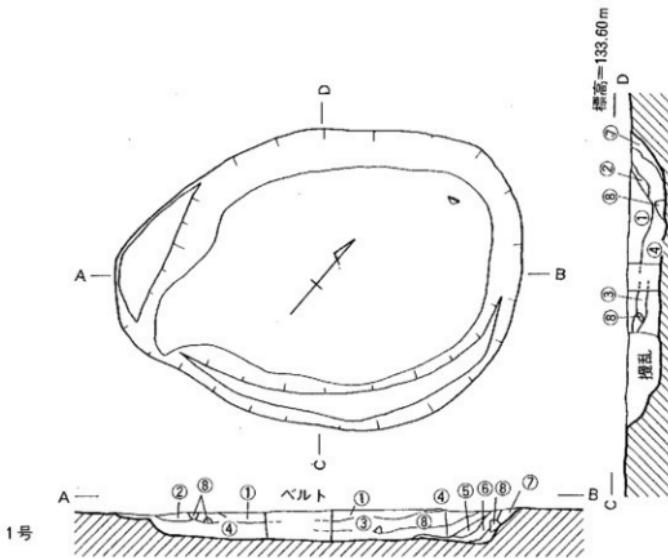
土遺物がまとまっている。

土坑の断面形は深い皿状である（深さ約18cm～24cm）。壁に沿った二基の掘り込みの断面形は、略台形を呈する（深さ約50cm・約20cm）。

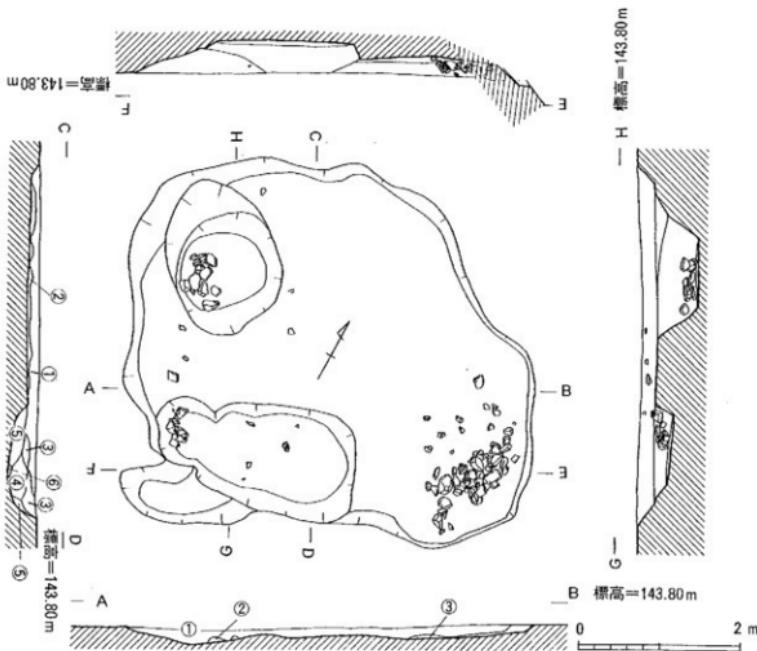
覆土は6層に分層できた。①層は暗褐色土。②層は灰褐色土で、地山の白色粘土を少量含む。③層は褐色土で、白色粘土を多量に含む。④層は灰黄色土。⑤層は灰色土で、④層より白い。⑥層は白色粘土で、ブロック状に入る。

3号土坑出土遺物（第41図）

第41図は土坑の床面上及び床面付近より出土した遺物である。1は平瓦片で、凹面に布目痕、凸面に浅い条痕が残る。2は土師質土器の小皿片である。底部は内側にやや窪み、回転糸切り痕が残る。3は土師質土器の坏片で、内器面の一部に煤が付着する。4～7は瓦質土器のすり鉢片である。確認できるものは、内器面に5～6を単位とした条線がある。8は土師質土器の鉢片である。外器面には部分的にハケ目が施される。外器面・外底部の全面に煤が付着する。9は青磁の碗片である。外器面に蓮弁文、内器面に草花文を施す。底部がぶ厚く体部に行くにつれて細くなる。10は瓦質土器の火舍片である。底部には「ハ」の字形に張り出した脚が付く。外器面には「く」の字形の断面をもつ凸帯が横位に二条張り付けられ、その凸帯間に木の葉



第38図 1号土坑・2号土坑実測図

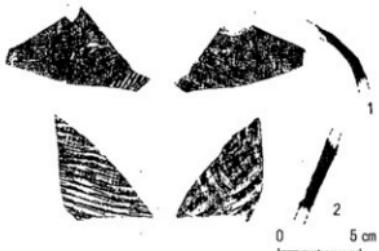


第39図 3号土坑実測図

のスタンプ文を施す。内器面には部分的に横位や斜位のカキ目が残る。

56土坑 1号（第42図）

この土坑は56号建物跡の整地Ⅰ層に掘り込んでおり、土坑覆土と整地層の区別が付けにくいために、掘り込みの検出が困難であった。遺物が出土した後、その周囲を精密してやっと掘り込みを確認することができた。このような検出状況であったため、56号建物跡のトレンチを入れる際に、土坑の存在に気が付かず、土坑西側一部分を壊してしまった。

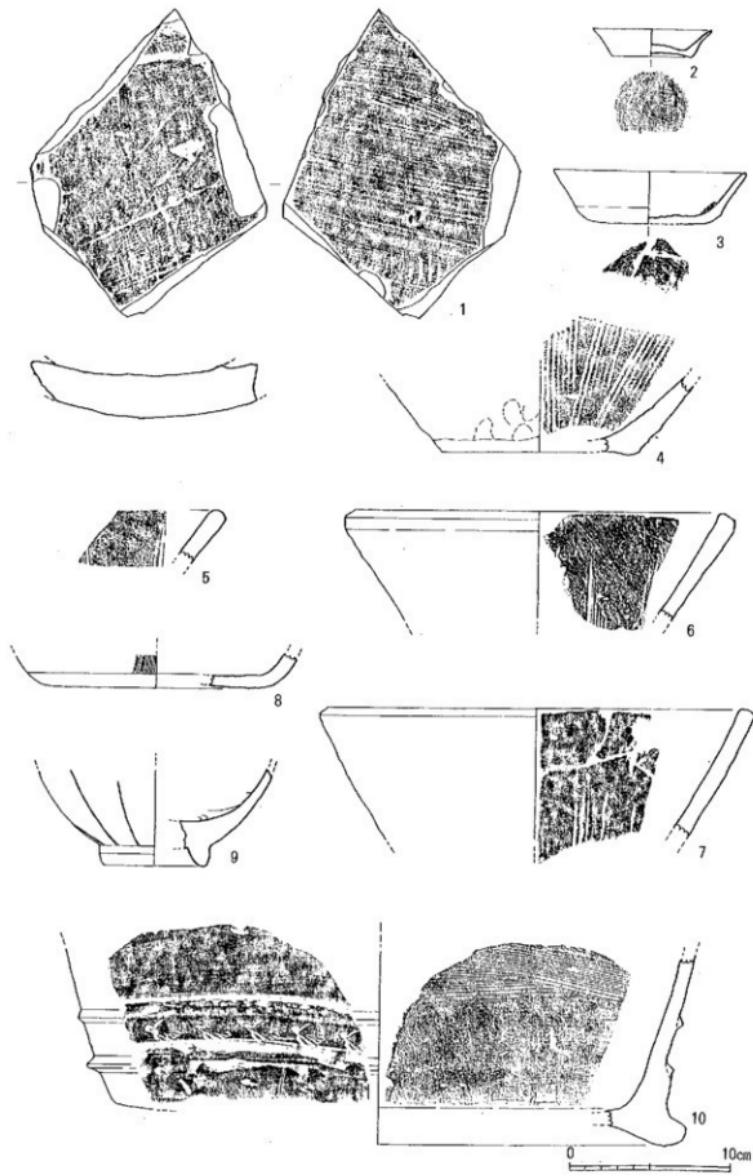


第40図 1号土坑出土遺物実測図

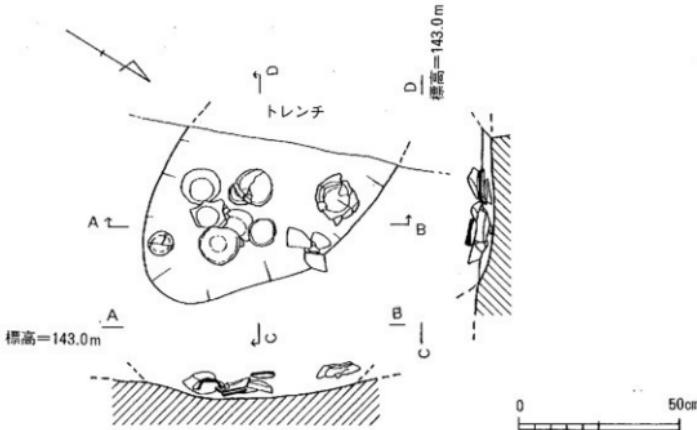
土坑の床面上より、12個体の土師質土器の小皿・杯を検出した。土師質土器の出土状況は、3個体が口縁部を上に、他の個体が底部を上にした状態で、互いに近接して置いた様子を呈している。

土坑の平面形は、楕円形をしていたと思われる（長径60+?cm、短径約60cm）。断面形は浅い皿状を呈する（深さ約5cm）。

覆土は、炭化物を少量含む暗褐色土で、分層できない。



第41図 3号土坑出土遺物実測図



第42図 56土坑1号実測図

5 6 土坑1号出土遺物（第43図）

第43図1～12は56土坑1号より出土した土師質土器の一括遺物である。いずれも外底部に回転糸切り痕をもつ。

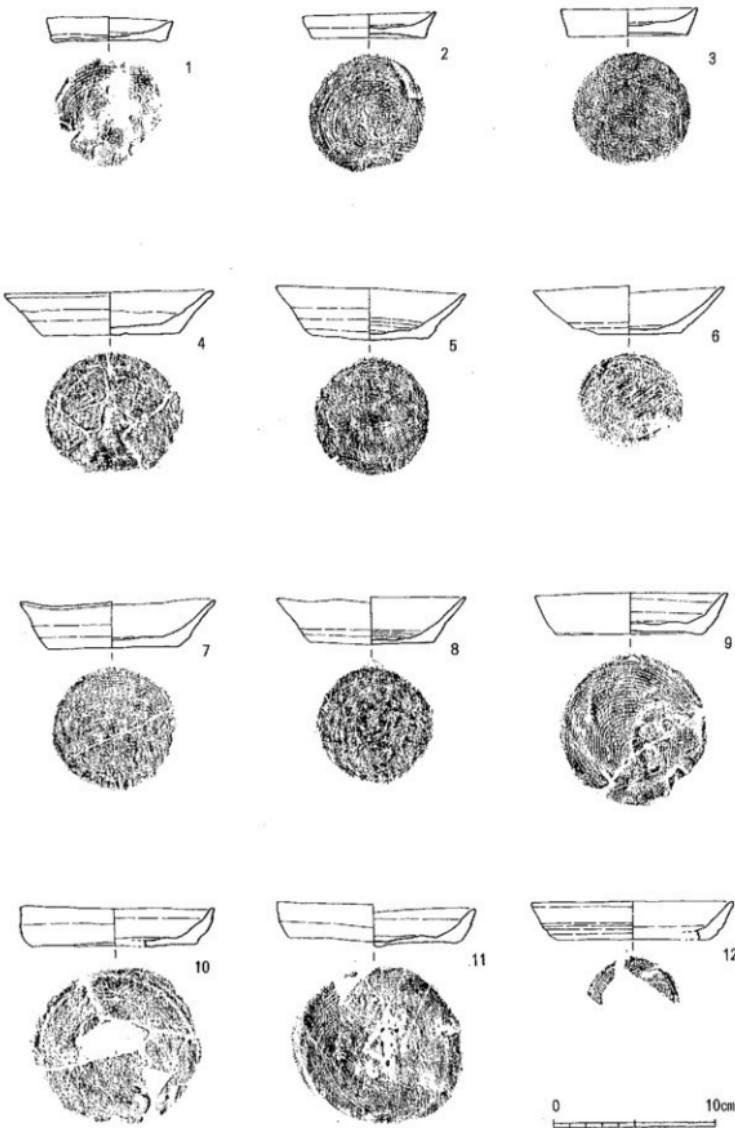
1～3は小皿で、体部が底部から短く外側に開きながら立ち上がり、そのまま口縁部にいたる。4～8の环は、底部から長く直線的に立ち上がる体部をもち、口縁端部が細くなりながら丸くなる。6は底部近くの外器面に僅かな段をもつ。9～12の环は、体部が僅かに内湾しながら立ち上がり、細く丸い口縁端部にそのまま続く。9・10・11は体部と内底部との境がナデにより窪む。

第2節 IV区の調査について

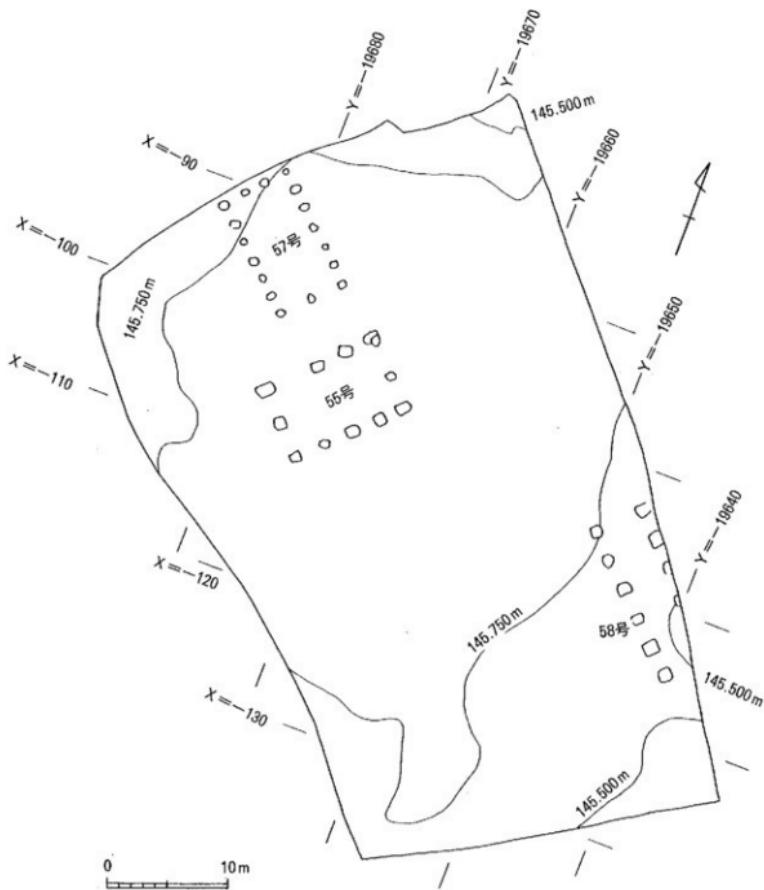
1. 遺構分布について（第44図）

IV区は長者原地区の中で、長者山に次いで標高が高い箇所である。しかし、後世の削平がIV層上面まで及んでおり、土層の残存状態は良くない。

IV層上面での地形は、調査区のはば中央部に平坦面があり、周辺部に向かって緩やかに低くなる。検出した遺構は、掘立柱建物跡3棟である。調査区の北西側に寄った箇所に、55号掘立柱建物跡と57号掘立柱建物跡が分布する。58号掘立柱建物跡は東側端部に位置している。57号・58号掘立柱建物跡の主軸方向はほぼ一致しており、55号掘立柱建物跡の主軸とは直交している。三棟とも出土遺物はない。



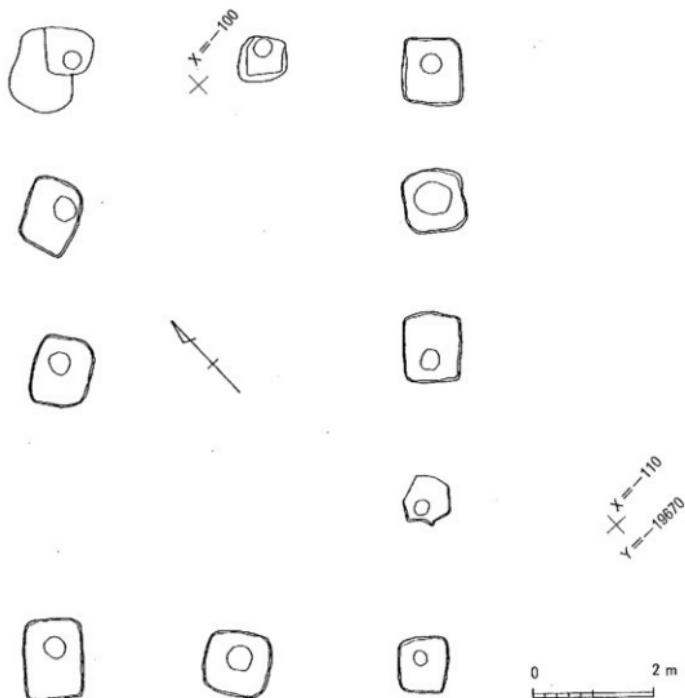
第43図 56土坑1号出土遺物実測図



第44図 IV区造構分布図

2. 55号掘立柱建物跡（第45図）

55号は2間4間の掘立柱建物跡である。桁行部北西側の掘方1基が検出できなかった。桁行部南東側の掘方1基が不整な方形の平面形である以外は、方形もしくは長方形の平面形をした掘方である。掘方の大きさは、方形のものが約0.8~1m、長方形のものが約0.7~1.3m×0.6~0.9mを測る。桁行部南東側の東から2基目の掘方には、柱の抜き取り痕跡が確認できる。それ以外の掘方には柱痕跡が残っている。柱痕跡の大きさは径約20~40cmである。柱間は梁行が約3m(10尺)、桁行が約2.4m(8尺)の等間である。



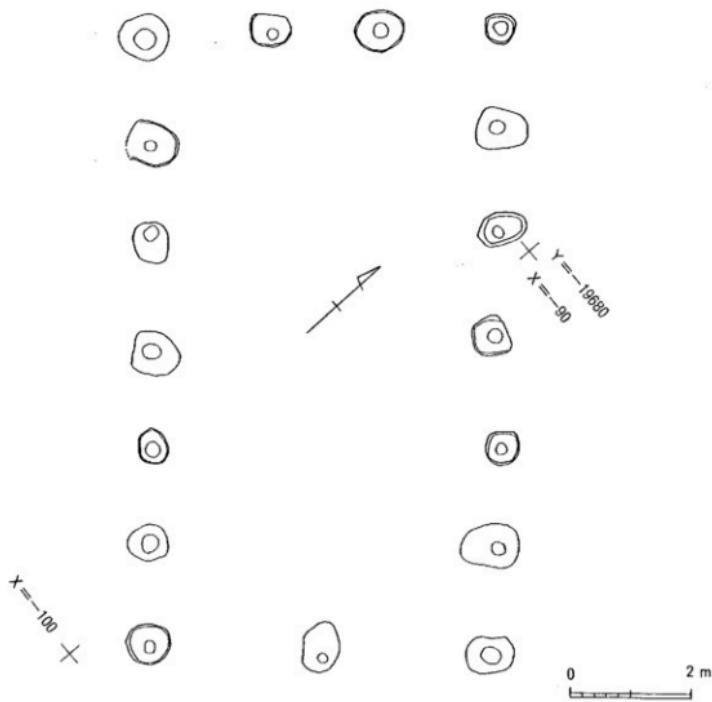
第45図 55号掘立柱建物跡実測図

3. 57号掘立柱建物跡（第46図）

57号は桁行6間、南東側の梁行が2間、北西側の梁行が3間の掘立柱建物跡である。掘方の平面形は55号・58号とは異なり、円形もしくは楕円形である。掘方の大きさは、円形が径約50cm、楕円形が長径約60~90cm、短径約50~70cmを測る。柱痕跡はすべての掘方に確認でき、径約15~30cmの大きさである。桁行の柱間は北西端部より、約1.8m（6尺）、約1.5m（5尺）、約1.8m（6尺）、約1.8m（6尺）、約1.5m（5尺）、約1.8m（6尺）を測る。北西側の梁行の柱間は西側端部より、約1.95m（6.5尺）、約1.8m（6尺）、約1.95m（6.5尺）を測る。南東側の梁行の柱間は約2.85m（9.5尺）の等間である。

4. 58号掘立柱建物跡（第47図）

58号の桁行は5間で、梁行は1間分を検出した。梁行1間分以外の掘方は、農地の段により削平されており確認できない。掘方の平面形は、方形・長方形・楕円形を呈する。掘方の大きさは、方形が約0.9~1m、長方形が約0.9~1.2m×0.7~0.9m、楕円形が長径約60~90cm、短径約50~70cmを測る。柱痕跡は三箇所で



第46図 57号建物跡実測図

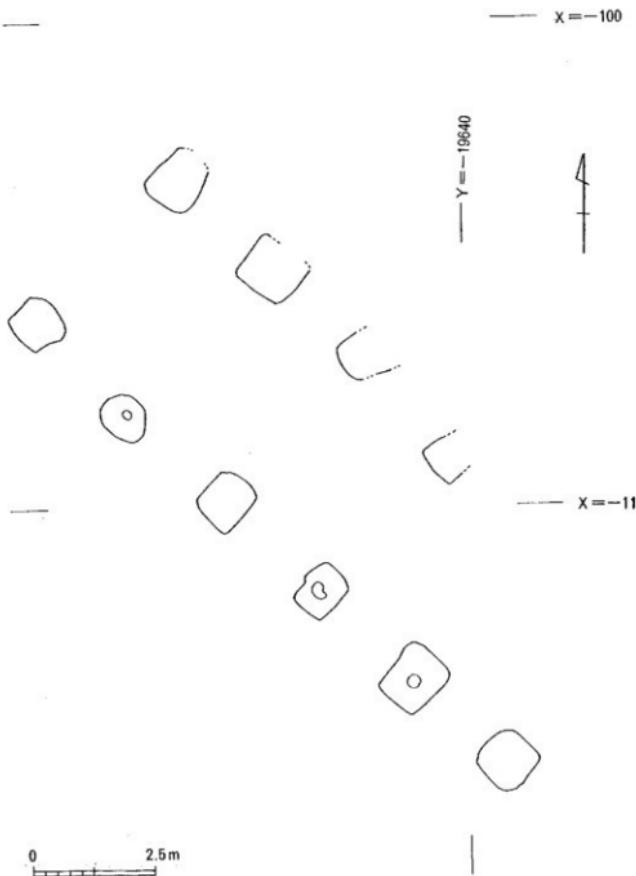
確認でき、径約20~30cmである。柱間は桁行が約2.7m(9尺)の等間であろう。梁行が約4.2m(14尺)(?)を測る。

第3節 VI区の調査について（第48図）

VI区は地形の改変が著しく、削平がIV層まで及んでおり、旧地形をとどめていない。削平後の地形は、西側が最も高く、東側に向かって傾斜している。周辺の地形から判断すると、VI区の旧地形は西側から東側に向けて緩やかに低くなると考えられる。

検出した遺構は、A～Hの8基の掘り込みで、調査区の北側箇所に分布している。AとB、EとFには切り合い関係がある。BがA、FがEを切っている。A・B・C・Dの4基が調査区北側のはば中央にまとまり、GとHが近接している。

遺構の時期については、E以外は出土遺物がなく不明である。Eの埴土から弥生時代後期の土器片が出土している。Gについては、掘立柱建物跡の掘方に近似しているが、これに対応する掘方がない。



第47図 68号建物跡実測図

第4節 IX区の調査について

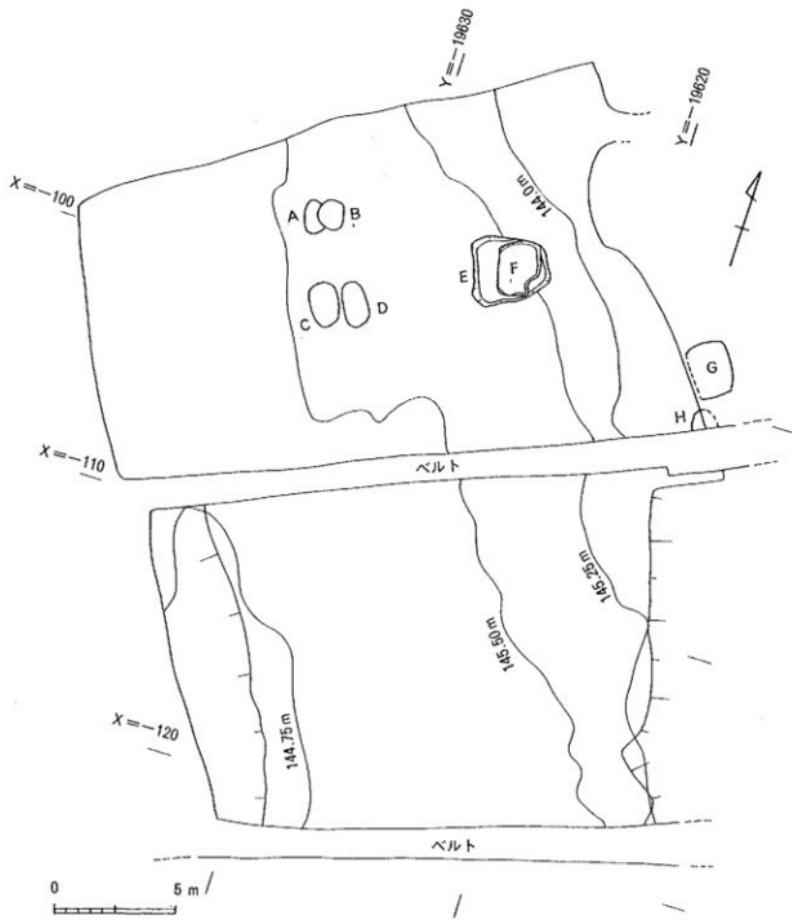
1. 土坑の調査（第3図）

長者原II区の南側に隣接して、長者原IX区を設定した。IX区からは性格不明な土坑1基を検出した。この土坑の造構名を1号不明造構とした。

1号不明造構は、41号建物跡の北西方向に隣接して存在する。

1号不明造構（第49図）

この造構の掘り込みは、平面形が小さな椭円形を呈し（長径約45cm、短径約40cm）、断面形が深い皿状を

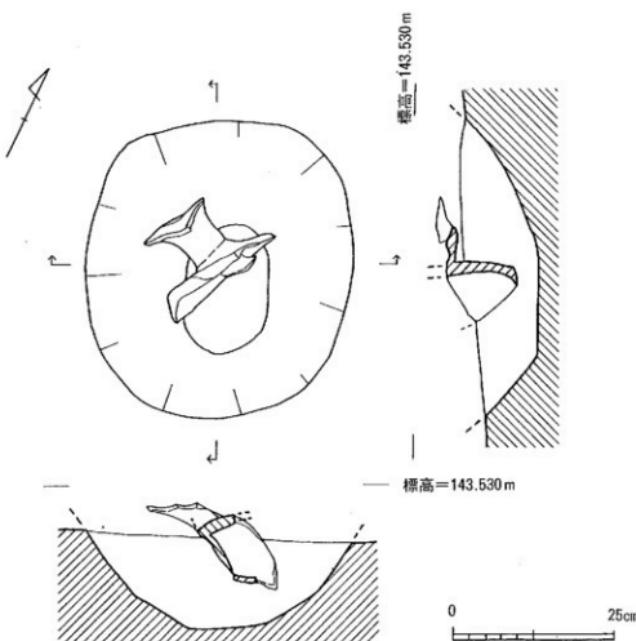


第48図 VI区地形実測図

呈する（深さ約18cm）。掘り込み内には、須恵器の高坏が横位の状態で置かれていた。検出した時、高坏の坏部の約半分は、既に割れており、掘り込みの周辺に散在していた。本来は完形の状態で、掘り込み内に埋設したものと思われる。

掘り込み内の覆土は分層できず、黒褐色土である。この覆土には部分的に微量の炭化物が含まれる。

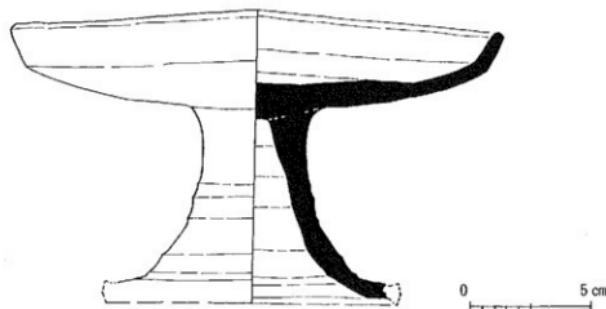
1号不明遺構の時期と41号掘立柱建物跡の築造時期を比較検討することが現状ではできない。しかし、仮に両者が同時期とすれば、両者が互いに隣接していることより、1号不明遺構は41号建物跡に関係する祭祀関連のものと考えられないだろうか。



第49図 1号不明遺構実測図

1号不明遺構出土遺物（第50図）

第50図は須恵器の高坏である。坏部は大きめの口径をもち、口縁端部が短く立ち上がる。脚部は長く「ハ」の字形に外に開きながらのびる。脚端部は短く下方に折れ曲がると思われる。



第50図 1号不明遺構出土須恵器実測図

第3表 遺物観察表

第20回

No	出土地点	層	部 位	法 量 (cm)	色 滅 (内／外)	胎 土	調 整 文 標			焼 成	備 考
							外器面	内器面	口唇・底部		
1	56号建物	壁地1層 No.44	土師器坏底部	底径(8.4) 器高(1.2)	赤褐色 赤色胎料	細砂粒多量 赤色砂粒少量	ヨコナデ	ヨコナデ	ヘラ切り	良	
2	*	整地1層 No.15	上師器高台付坏	底径(5.8) 高台高(0.4) 器高(2.1)	茶褐色	細砂粒少量	ヨコナデ	ヨコナデ		良	
3	*	整地1層 No.4	須恵器蓋	口径(15.0) 器高(3.2)	灰色	細砂粒少量	ヘラ削り ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	良	
4	*	整地1層 No.14	須恵器高环口器	口径(16.6) 器高(5.0)	内灰褐色 外灰褐色一部 灰黑色	細砂粒少量	ヨコナデ	ヨコナデ 横方向ナデ	ヨコナデ	良	
5	*	整地1層 No.11	須恵器胴部	器高(9.2)	烟灰色	細砂粒少量	平行タキ	平行タキ		良	

No	出土地点	層	部 位	法 量 (cm)	色 滅 (内／外)	胎 土	調 整 文 標			焼 成	備 考
							凹面	凸面	侧面		
6	56号建物 一括	壁地土層 平瓦		長径(9.1) 最大幅(5.5) 最大厚(1.8)	灰白色	砂粒多量	布目庄痕	不定方向ナデ	ヘラ切り 面取り	良	
7	*	整地土層 No.2	平瓦	長径(8.9) 最大幅(5.2) 最大厚(2.3)	淡茶褐色	細砂粒多量 中型砂粒少量	布目庄痕 布瑞痕	ナデ消し	ヘラ切り	良	

第21回

No	出土地点	層	部 位	法 量 (cm)	色 滅 (内／外)	胎 土	調 整 文 標			焼 成	備 考
							外器面	内器面	口唇・底部		
1	56号建物	礫石掘込 No.37	須恵器蓋	器高(1.5)	灰色	細砂粒多量	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	良	
2	*	礫石掘込 No.35	須恵器蓋	口径(13.4) 器高 3.2	灰色	細砂粒多量	ヘラ削り ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	良	
3	*	礫石掘込 No.23	須恵器蓋	つまみ押3.2	灰色	細砂粒多量	ヨコナデ ヘラ削り	ヨコナデ	ヨコナデ	良	
4	*	礫石掘込 No.29	須恵器高台付坏	高台径(7.0) 高台高(1.4) 器高(1.7)	内灰褐色 外灰暗黑色	細砂粒少量	ヨコナデ	ヨコナデ	ナデ	良	
5	*	礫石掘込 No.33	須恵器高环口神 器高(5.9)	口径長径(6.0) 短径(1.7) 器高(5.9)	内灰青色 外灰暗黑色	細砂粒少量	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	良	
6	*	礫石掘込 No.45	土師器底部	底径(7.0) 高(1.0)	内茶褐色 外白褐色	細砂粒多量	ヨコナデ	ヨコナデ	ヘラ切り	やや良	
7	*	礫石掘込 No.26	土師器高台付坏	高台径(6.0) 高台高(1.0) 器高(1.5)	赤褐色 赤色胎料	細砂粒少量	ヨコナデ	ヨコナデ	ヘラ切り ヨコナデ	良	
8	*	礫石掘込 No.18	土師器高台付坏	高台径(8.4) 高台高(1.2) 器高(2.0)	淡茶褐色	細砂粒中量 赤色砂粒多量	ヨコナデ	ナデ	ナデ	良	
9	*	礫石掘込 No.10	土師器高台付坏	高台径(8.0) 高台高(1.2) 器高(2.0)	茶褐色	細砂粒多量 里突浮彫 赤色砂粒多量	ヨコナデ	ヨコナデ	ナデ	良	
10	*	礫石掘込 No.26	土師器高台付坏	高台径(7.0) 高台高(0.6) 器高(4.0)	赤褐色	細砂粒中量 赤色砂粒少量	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	良	

No	出土地点	層	部 位	法 量 (cm)	色 滅 (内／外)	胎 土	調 整 文 標			焼 成	備 考
							凹面	凸面	侧面		
11	56号建物	礫石掘込 No.17	平瓦	長径(8.5) 最大幅(9.6) 最大厚(2.6)	灰白色	細砂粒多量 中型砂粒少量	布目庄痕	大型の子 目タキ		良	
12	*	礫石掘込 No.41	平瓦	長径(13.2) 最大幅(11.2) 最大厚(2.7)	灰白色 最大幅(11.2) 最大厚(2.7)	細砂粒少量 大型砂粒多量	布目庄痕	ナデ消し	ヘラ切り	良	

第4表 遺物観察表

第21回

No.	出土地点	層	部 位	法 量 (cm)	色 調 (内/外)	胎 土	調 整・文 標			焼 成	備 考
							外器面	内器面	口唇・底部		
13.	56号建物	磨石掘込 No.16	須恵器胸部	器高(8.0)	内 外 灰褐色 一部 茶褐色	細砂粒少量	平行タキ	同心円タキ		良	
14.	+	磨石掘込 No.27 No.28	須恵器胸部	器高(8.1)	内 外 灰黑色 墨灰色	細砂粒少量	平行タキ	平行タキ		良	
15.	+	磨石掘込 No.25	須恵器胸部	器高(12.3)	灰黑色	細砂粒少量 大型砂粒散在	平行タキ	平行タキ 同心円タキ		良	

第22回

No.	出土地点	層	部 位	法 量 (cm)	色 調 (内/外)	胎 土	調 整・文 標			焼 成	備 考
							外器面	内器面	口唇・底部		
1.	56号建物	4層 No.626	須恵器蓋	口径(11.4) 器高(1.5)	内 外 灰白色	細砂粒少量	ヨコナデ	ナデ	ヨコナデ	良	
2.	+	4層 No.744	須恵器蓋	口径(11.4) 器高(1.8)	内 外 灰褐色 茶褐色	細砂粒少量	ヨコナデ	ナデ ヨコナデ	ヨコナデ	やや良	
3.	+	4層 No.577	須恵器蓋	口径(13.0) 器高(1.0)	茶褐色	細砂粒少量	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	やや良	赤焼き?
4.	+	4層 No.408	須恵器蓋	口径(13.2) 器高(2.3)	灰色	細砂粒少量	ヘラ削り ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	良	
5.	+	4層 No.604	須恵器蓋	口径(13.0) 器高(1.8)	内 外 灰白色 灰色	細砂粒中量	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	良	
6.	+	4層 No.269	須恵器蓋	口径(16.0) 器高(1.5)	内 外 灰黑色	細砂粒少量	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	良	
7.	+	4層 No.276 No.277	須恵器蓋	口径(18.8) 器高(3.7)	灰色	細砂粒少量	ヘラ削り ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	良	
8.	+	4層 No.601	須恵器蓋	口径(16.2) 器高(2.5)	内 外 灰黑色 灰色	細砂粒少量	ヨコナデ	ナデ	ヨコナデ	良	
9.	+	4層 No.608	須恵器底部	底径(9.4) 器高(1.2)	内 外 灰黑色	細砂粒微量	ヨコナデ	ヨコナデ	ヘラ切り の後ナデ	良	
10.	+	4層 No.270	須恵器底部	底径(9.8) 器高(1.3)	灰色	1mmの大砂粒 多量	ヨコナデ	ヨコナデ	ヘラ切り の後ナデ	良	
11.	+	4層 No.598	須恵器坏	口径(13.8) 底径(7.6) 器高(4.1)	内 外 灰褐色 灰褐色部分に灰黑色 の競り混じり有り	細砂粒中量	ヨコナデ ヘラ削り	ナデ ヨコナデ	ヘラ切り	やや良	赤焼き?
12.	+	4層 No.590	須恵器坏	口径(14.0) 底径(8.6) 器高(3.6)	内 外 灰褐色 灰色	細砂粒少量	ヨコナデ	ヨコナデ	ヘラ切り	良	
13.	+	4層 No.695	須恵器坏口緣部	口径(13.0) 器高(3.0)	淡灰色	細砂粒多量	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	やや良	
14.	+	5層 No.902	須恵器坏口緣部	口径(14.0) 器高(3.9)	内 外 黑灰色 一部 黑灰色	細砂粒少量	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	良	
15.	+	4層 No.609	須恵器坏口緣部	口径(16.0) 器高(3.2)	灰黑色	細砂粒少量	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	良	
16.	+	4層 No.229	須恵器高台付坏	高台径(6.0) 高台高(0.5) 器高(2.4)	灰白色	細砂粒少量	ヨコナデ ヘラ	ナデ ヨコナデ	ヨコナデ	良	
17.	+	4層 No.594	須恵器高台付坏	高台径(7.0) 高台高(0.9) 器高(2.2)	灰色	細砂粒微量	ヨコナデ	ヨコナデ ナデ	ヨコナデ	良	
18.	+	4層 No.494	須恵器高台付坏	高台径(8.0) 高台高(0.8) 器高(3.0)	内 外 灰褐色 自然釉	細砂粒中量	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	良	
19.	+	4層 No.402	須恵器高台付坏	高台径(8.2) 高台高(0.9) 器高(1.7)	内 外 灰褐色 灰黑色	細砂粒少量	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	良	
20.	+	4層 No.294	須恵器	口径(10.2) 器高(1.95)	灰黑色	細砂粒中量	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	良	
21.	+	4層 No.294	須恵器	口径(10.2) 器高(1.95)	灰黑色	細砂粒微量	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	良	

第5表 遺物観察表

第22回

No.	出土地点	層	部 位	法 量 (cm)	色 調 (内/外)	胎 土	調 整・文 標			焼 成	備 考
							外器面	内器面	口唇・底部		
22	56号建物	4層 No741	須恵器高脚環	脚径(10.2) 器高(5.2)	灰色一部灰黑色	細砂粒中量	ヨコナデ	ヨコナデ しまり無	ヨコナデ	良	
23	+	1~2層	須恵器胴部	器厚(0.9~1) 器高(4.9)	内 外 灰褐色 淡灰黑色 一部自然釉	細砂粒少量	格子目 タキ	車輪文 タキ		良	
24	+	4層 No738	須恵器胴部	器厚(5.0) 器高(6.7~1)	内 外 灰褐色	細砂粒少量	格子目 タキ	車輪文 タキ		良	
25	+	4層 No610	須恵器胴部	器高(4.5)	内 外 灰褐色	細砂粒(黒雲母 ·石美)合む	ヨコナデ 桔子目タキ	ヨコナデ 同心円タキ		良	
26	+	4層 No606	須恵器胴部	器高(3.6)	内 外 灰褐色 淡灰褐色	細砂粒多量	ヨコナデ 格子目 タキ	ヨコナデ 同心円 タキ		良	

第23回

No.	出土地点	層	部 位	法 量 (cm)	色 調 (内/外)	胎 土	調 整・文 標			焼 成	備 考
							外器面	内器面	口唇・底部		
1	56号建物	4層 No288 No291	須恵器胴部	脚部径(4.0) 器高(10.0)	内 外 灰褐色	細砂粒多量	平行タキ	同心円 タキ		良	

第24回

No.	出土地点	層	部 位	法 量 (cm)	色 調 (内/外)	胎 土	調 整・文 標			焼 成	備 考
							外器面	内器面	口唇・底部		
1	56号建物	4層	土師器環口拂部	口径(13.0) 器高(3.4)	褐色	細砂粒多量	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	良	
2	+	4層 No604	土師器環口拂部	口径(8.0) 器高(4.7)	赤褐色	細砂粒中量	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	良	
3	+	4層 No600	土師器高台付环	高台径(7.4) 高台高 1.3 器高(3.7)	茶褐色	細砂粒多量 赤色砂粒微量	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	良	
4	+	4層 No687	土師器高台付环	高台径(6.7) 高台高 1.4 器高(3.4)	淡褐色	細砂粒多量	ヨコナデ	ヨコナデ	ナデ	やや良	
5	+	4層 No674	土師器高台付环	高台径 7.0 高台高 1.3 器高(3.7)	赤褐色	細砂粒多量 大型砂粒微量 赤色砂粒少量	ヨコナデ	ナデ ヨコナデ	ヘラ切り ナデ ヨコナデ	良	
6	+	4層 No697	土師器高台付环	高台径(7.2) 高台高 1.4 器高(4.0)	茶褐色	細砂粒多量 赤色砂粒少量	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	良	
7	+	4層 No771	土師器高台付环	高台径 7.8 高台高 1.4 器高(3.5)	赤褐色	細砂粒多量 大型砂粒微量 赤色砂粒少量	ヨコナデ	ナデ ヨコナデ	ヘラ切り ナデ	良	
8	+	4層 No694	土師器高台付环	高台径(8.4) 高台高 1.5 器高(5.5)	茶褐色 赤色粘土	細砂粒多量	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	良	
9	+	4層 No790	土師器高台付环	高台径(11.4) 高台高 7.2 器高 5.6	赤褐色	細砂粒多量 赤色砂粒少量	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	良	
10	+	4層 No220	土師器高台付环	高台径 7.4 高台高 1.5 器高(2.9)	淡赤褐色	細砂粒中量 赤色砂粒少量	ヨコナデ	ヨコナデ ナデ	ナデ ヨコナデ	良	
11	+	4層 No689	土師器高台付环	高台径(8.2) 高台高 1.4 器高(2.5)	茶褐色	細砂粒多量 赤色砂粒少量	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	良	
12	+	4層 No780	土師器高台付环	高台径(7.2) 高台高 1.6 器高(3.0)	淡褐色	細砂粒多量 赤色砂粒少量	ヨコナデ	ナデ	ヨコナデ	良	
13	+	4層	土師器高台付环	高台径(8.0) 高台高 1.5 器高(2.8)	淡褐色	細砂粒多量 赤色砂粒少量	ヨコナデ	ナデ	ヨコナデ	良	
14	+	4層 No679	土師器高台付环	高台径(7.8) 高台高 1.5 器高(2.8)	赤褐色	細砂粒多量 赤色砂粒中量	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	良	

第6表 遺物観察表

図 24 回

No	出土地点	層	部 位	法 量 (cm)	色 調 (内／外)	胎 土	調 整・文 標			備 考
							外器面	内器面	口唇・底部	
15	56号建物	4 層 No789	土師器高台付环	高台径(8.0) 高台高 1.3 器高(3.0)	内 外 赤褐色	細砂粒多量 黒雲母微量 大型颗粒少量	ヨコナデ	ナデ ヨコナデ	ナデ	良
16	*	4 层 No595	土師器高台付环	高台径(8.2) 高台高 2.0 器高(3.4)	茶褐色 赤色颜料	細砂粒多量 金雲母微量	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ ナデ	良
17	*	4 层 No581	土師器高台付环	高台径(8.2) 高台高 1.2 器高(2.4)	赤褐色 赤色颜料	細砂粒多量 赤色砂粒少量	ヨコナデ	ヨコナデ	ナデ	良
18	*	4 层 No576	土師器高台付环	高台径(9.6) 高台高 1.3 器高(2.8)	内 外 赤褐色 赤色颜料	細砂粒多量 赤色砂粒少量	ヨコナデ	ヨコナデ	ナデ	良
19	*	4 层 No603	土師器高台付环	高台径(10.6) 高台高 1.3 器高(2.1)	褐色	細砂粒多量 赤色砂粒少量	ヨコナデ	ナデ	ヨコナデ	良
20	*	4 层 No555	土師器高台付环	高台径(10.4) 高台高 1.5 器高(2.2)	内 赤褐色 赤色颜料	細砂粒中量 黒雲母微量	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	良
21	*	4 层 No603	土師器高台付环	高台径(10.5) 高台高 1.3 器高(2.05)	内 赤褐色 赤色颜料 外 赤褐色 赤色颜料	細砂粒多量 (赤色粒含む)	ヨコナデ	ヨコナデ	ナデ ヨコナデ	良
22	*	4 层 No766	土師器高台付环	高台径(7.8) 高台高 1.0 器高(2.2)	白褐色 赤色颜料	細砂粒多量	ヨコナデ	ヨコナデ	ヘラ切り 荒いナデ ヨコナデ	やや良
23	*	4 层 No575	土師器高台付环	高台径(6.8) 高台高 1.4 器高(2.0)	淡茶褐色	細砂粒多量	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	やや良
24	*	4 层 No563	土師器高台付环	高台径(7.0) 高台高 0.4 器高(1.7)	内 淡褐色 赤色颜料 外 淡褐色	砂粒微量	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	良
25	*	4 层 No261	土師器高台付环	高台径(6.6) 高台高 1.1 器高(1.8)	赤褐色 赤色颜料	細砂粒多量 金雲母少量	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	良
26	*	4 层 No589	土師器高台付环	高台径(7.3) 高台高 0.6 器高(1.8)	褐色	細砂粒少量	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ ナデ	良
27	*	4 层 No577	土師器高台付环	高台径(9.2) 高台高 0.6 器高(1.3)	褐色	細砂粒中量 赤色砂粒少量	ヨコナデ	ナデ	ヨコナデ	良
28	*	4 层 No354	土師器高台付环	高台径(7.4) 高台高 0.9 器高(2.4)	淡赤褐色	細砂粒多量 赤色砂粒少量 黒雲母微量	ヨコナデ	ナデ	ヨコナデ	良
29	*	4 层 No587	土師器高台付环	高台径(7.2) 高台高 3.0	淡褐色	細砂粒多量 赤色砂粒少量	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	良
30	*	4 层 No788	土師器甕口緣部	口径(21.2) 器高(7.1)	内 黑褐色 口縁茶褐色 外 赤褐色	細砂粒多量 大型砂粒少量	ヨコナデ 調整不明	ヨコナデ ヘラ削り	ヨコナデ	良
31	*	4 层 No777	土師器甕口緣部	口径(22.0) 器高(7.2)	赤褐色	細砂粒多量 人頭砂粒中量	ヨコナデ 調整不明	ヨコナデ 窓都不明	ヨコナデ	良

図 25 回

No	出土地点	層	部 位	法 量 (cm)	色 調 (内／外)	胎 土	調 整・文 標			備 考
							外器面	内器面	口唇・底部	
1	56号建物	4 层 No489	繩文土器腹部	器高(2.2)	内 黑褐色 茶褐色	細砂粒多量 黒雲母多量	沈埋 範文	ナデ(表面 荒れる)	ナデ	やや良
2	*	4 层 No582	土師器底部	底径(8.6) 器高(1.8)	淡茶褐色	細砂粒多量 大型砂粒少量	ヨコナデ	ヨコナデ	ナデ	やや良
3	*	4 层 No577	土師器底部	底径(7.2) 器高(1.3)	淡茶褐色	細砂粒多量(赤 色砂粒)	ヨコナデ	ヨコナデ	ヘラ切り	やや良
4	*	4 层 No360	土師器坏	口径(14.0) 底径(7.8) 器高 3.2	淡褐色	細砂粒少量	ヨコナデ	ヨコナデ	荒いヘラ 切り	良 須恵器模倣

第7表 遺物観察表

第25回

No.	出土地点	層	部位	法量 (cm)	色調 (内／外)	胎土	調整・文様			焼成	備考
							外器面	内器面	山唇・底部		
5	56号建物	4層 No.206	土師器組	口徑(13.0) 底径(10.4) 高さ2.4	茶褐色	細砂粒少量	ヨコナデ	ヨコナデ	ヘラ切り	良	
6	+	4層 No.386	土師器環底部	底径(10.6) 高さ(1.1)	内 赤褐色 赤茶褐色 外 茶褐色	細砂粒少 量 赤色砂粒微量	ヨコナデ	ヨコナデ	ナデ	良	
7	+	4層 No.383	土師器環底部	底径(10.8) 高さ(1.5)	茶褐色	細砂粒少 量 赤色砂粒微量	ヨコナデ	ヨコナデ	ナデ	良	
8	+	4層	土師器環底部	底径(9.8) 高さ(1.8)	内 赤褐色 赤茶褐色 外 褐色 赤色顏料	細砂粒少量	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	良	
9	+	4層 No.590	土師器環底部	底径(12.5) 高さ(1.6)	赤褐色 赤色顏料	細砂粒中量	ヨコナデ	ヨコナデ	ナデ	良	
10	+	4層	土師器環底部	底径(11.0) 高さ(1.7)	淡茶褐色	細砂粒中量 赤色砂粒少量 黒色砂粒微量	ヨコナデ	ヨコナデ	ナデ	良	

第26回

No.	出土地点	層	部位	法量 (cm)	重量 (kg)	色調 (内／外)	胎土	調整・文様			焼成	備考
								凹面	凸面	相面		
1	56号建物	4層 No.916	軒丸瓦	最大長(8.1) 下端幅(7.7) 厚さ(1.4~1.9)	(0.3)	四 茶褐色 下端の一部 赤茶褐色 凸 茶褐色	幅1~2mmの細砂 粒多量 幅4~5mmの大型 砂粒少量	ヘラ調整	ナデ	ヘラ調整	良	
2	+	4層 No.1040	軒丸瓦	最大長(14.0) 下端幅(8.2) 厚さ(1.4~2.0)	(0.4)	四 茶褐色 凸 赤茶褐色	幅1~2mmの細砂 粒多量 幅4~5mmの大型 砂粒少量	布目压痕	ナデ	ヘラ調整	良	
3	+	4層 No.226 他	軒丸瓦	最大長(19.5) 下端幅(5.0) 厚さ(1.5~2.5)	(1.5)	茶褐色	幅1~2mmの細砂 粒多量 幅4~5mmの大型 砂粒少量	布目压痕	ナデ	ヘラ調整	良	接合
4	+	4層 No.324 他	軒丸瓦	最大長(44.4) 上端幅(11.2) 下端幅(17.5) 厚さ(1.3~2.3)	(2.0)	赤茶褐色	幅1~2mmの細砂 粒多量 幅4~5mmの大型 砂粒少量	右日压痕 ナデ ヘラ調整	ナデ	ヘラ調整 切削痕	良	接合
5	+	4層 No.26他	軒丸瓦	最大長(39.6) 上端幅(12.4) 下端幅(16.5) 厚さ(1.0~2.2)	(2.0)	赤茶褐色	幅1~2mmの細砂 粒多量 幅4~5mmの大型 砂粒少量	右日压痕 ナデ ヘラ調整	ナデ	ヘラ調整 横方向のナデ	良	接合

第27回

No.	出土地点	層	部位	法量 (cm)	重量 (kg)	色調 (内／外)	胎土	調整・文様			焼成	備考
								凹面	凸面	側面		
1	56号建物	4層 No.645	丸瓦	最大長(22.8) 最大幅(15.1) 厚さ(1.6~2.2)	(1.0)	四 茶褐色 凸 赤茶褐色	幅1mmの細砂粒 中量 黒色砂粒微量	布日压痕 面取りヘラ 調整	ナデ	ヘラ調整 切断痕	良	
2	+	4層 No.30他	丸瓦	最大長(45.8) 上端幅(14.8) 下端幅(16.3) 厚さ(1.7~2.8)	(3.0)	灰色一部灰黑色	幅1mmの細砂粒 多量 幅4mmの大型砂 粒微量	布日压痕 ナデ ヘラ調整	ナデ	ヘラ調整	良	接合
3	+	4層 No.66他	丸瓦	最大長(32.0) 下端幅(19.5) 厚さ(1.8~2.5)	(2.0)	凹 茶褐色 凸 茶褐色	幅1~3mmの砂粒 多量	布日压痕	ナデ	ヘラ調整 切断痕	良	接合
4	+	4層 No.319 他	丸瓦	最大長(45.1) 上端幅(16.5) 下端幅(19.9) 厚さ(0.8~2.0)	(2.6)	茶褐色	幅1~2mmの細砂 粒多量 幅5mmの大型砂 粒少量	右日压痕 ナデ	ナデ	ヘラ調整 切断痕	良	接合
5	+	4層 No.94他	丸瓦	最大長(29.6) 下端幅(12.5) 厚さ(1.3~2.5)	(1.5)	灰色	幅1~2mmの細砂 粒多量 幅5mmの大型砂 粒少量	布日压痕	ナデ	ヘラ調整	良	接合

第 8 表 遺物観察表

第 28 回

No.	出土地点	層	部位	法量 (cm)	重量 (kg)	色調 (門/凸)	胎土	調整・文様			焼成	備考
								凹面	凸面	側面		
1	56号建物	4層 No59他	丸瓦	最大長(30.0) 最大幅(19.0) 厚さ(1.7~2.5)	(2.5)	淡褐色	幅1~2mmの細砂粒多量	布目庄痕	ナデ	ヘラ調整 切断痕	良	接合
2	*	4層 No105他	丸瓦	最大長(18.6) 最大幅(12.0) 厚さ(1.0~2.2)	(1.0)	灰色	幅1~2mmの細砂粒多量 幅5mmの大型砂粒少量	布目庄痕 ヘラ調整	ナデ ヘラ調整	ヘラ調整 切断痕	良	接合

第 29 回

No.	出土地点	層	部位	法量 (cm)	重量 (kg)	色調 (門/凸)	胎土	調整・文様			焼成	備考
								凹面	凸面	側面		
1	56号建物	4層 No36他	平瓦	最大長(41.5) 最大幅(33.0) 最小幅(28.0) 厚さ(2.0~3.4)	(5.0)	淡茶褐色	幅1~2mmの細砂粒多量 全表面微量	布目庄痕 模倣板張 ヘラ調整	タカキ→ナデ 削し 大型正方形格子タカキ	ヘラ調整 切断痕	良	接合
2	*	4層 No208他	平瓦	最大長 47.2 最大幅 39.8 最小幅 28.3 厚さ 1.3~2.6	(4.0)	灰褐色一部 淡茶褐色	幅1~2mmの細砂粒多量 全表面微量	布目庄痕 模倣板張 ヘラ調整	20×6mmの長 格子タカキ→ 一部ナデ	ヘラ調整 切断痕	良	接合

第 30 回

No.	出土地点	層	部位	法量 (cm)	重量 (kg)	色調 (門/凸)	胎土	調整・文様			焼成	備考
								凹面	凸面	側面		
1	56号建物	4層 No685	平瓦	最大長(14.6) 最大幅(12.6) 厚さ(1.5~2.7)	(0.5)	淡茶褐色	幅1~2mmの細砂粒多量	布目庄痕	小さい正方形の格子タカキ→ナデ	ヘラ調整 切断痕	良	
2	*	4層 No587他	平瓦	最大長(36.4) 最大幅(29.5) 最小幅 23.7 厚さ(1.5~2.8)	(3.0)	凹灰白色一部 凸灰白色一部 淡茶褐色	幅1~2mmの細砂粒多量	布目庄痕 模倣板張	8×3mmの長格子タカキ→一部ナデ	ヘラ調整 切断痕	良	接合
3	*	4層 No493他	平瓦	最大長 45.0 最大幅 31.3 最小幅 25.0 厚さ(1.7~2.2)	(4.0)	灰褐色	幅1~2mmの細砂粒多量	布目庄痕 模倣板張 ヘラ調整	7×3mmの長格子タカキ→一部ナデ	ヘラ調整 切断痕	良	接合 須恵質

第 31 回

No.	出土地点	層	部位	法量 (cm)	重量 (kg)	色調 (凹/凸)	胎土	調整・文様			焼成	備考
								凹面	凸面	側面		
1	56号建物	4層 No1090	平瓦	最大長(9.7) 最大幅(7.0) 厚さ(1.0~2.5)	(0.2)	凹茶褐色 凸淡茶褐色	幅1mmの細砂粒多量	ナデ	横方向の細い凹線	ヘラ調整	良	
2	*	4層 No432	平瓦	最大長(11.4) 最大幅(10.5) 厚さ(1.0~2.8)	(0.3)	灰白色	幅1mmの細砂粒多量	布目庄痕	横方向の細い凹線 一部輪郭痕	良		
3	*	4層 No533 No569	平瓦	最大長(17.9) 最大幅(9.6) 厚さ(1.2~2.6)	(0.5)	灰白色	幅1mmの細砂粒多量	布目庄痕	横方向の細い凹線 一部ナデ	ヘラ調整	良	
4	*	4層 No311他	平瓦	最大長 49.5 最大幅 33.4 最小幅 24.9 厚さ 1.7~2.0	(5.0)	灰白色	幅1~2mmの細砂粒中量	ヘラ状工具による削り取り 布目庄痕 →ナデ	横方向の凹線 横方向の凹線 →ナデ	ヘラ調整 切断痕	やや 良	接合

第 32 回

No.	出土地点	層	部位	法量 (cm)	重量 (kg)	色調 (凹/凸)	胎土	調整・文様			焼成	備考
								凹面	凸面	側面		
1	56号建物	4層 No197他	平瓦	最大長(35.0) 最大幅(22.4) 厚さ(1.0~2.7)	(3.0)	淡茶褐色一部 灰褐色	幅1~2mmの細砂粒多量	布目庄痕 模倣板張 ヘラ調整	横方向の細い凹線 一部凹線→ナデ ヘラ調整	切削痕	良	接合
2	*	4層 No793	平瓦	最大長(17.2) 最大幅(13.0) 厚さ(0.5~2.3)	(0.5)	灰褐色	幅1~2mmの細砂粒多量	布目庄痕 模倣板張	横方向の細い凹線 →ナデ	ヘラ調整	良	
3	*	4層 No1221 No1223	平瓦	最大長 43.5 最大幅 33.0 最小幅 24.9 厚さ 1.0~2.7	(4.5)	灰褐色	幅1~2mmの細砂粒中量	布目庄痕 模倣板張	横・斜め方向の ナデ	ヘラ調整 切断痕	良	

第 9 表 遺物観察表

第 33 図

No.	出土地点	層	部位	法量 (cm)	重量 (kg)	色調 (凹/凸)	胎土	調整・文様			焼成	備考
								凹面	凸面	側面		
1	56号建物	4層 No.164 No.225	平瓦	最大長 41.3 広幅幅 33.0 狭幅幅 26.0 厚さ(1.2~2.8)	(5.0)	灰色	細1~2mmの砂粒 多量	布目に痕 模倣痕 ヘラ調整	横・斜め方向 ナデ(一部布 目压痕)	切断痕	良	須恵質
2	*	4層 No.436他	平瓦	最大長 47.0 広幅幅 32.7 狭幅幅 26.0 厚さ(1.5~2.4)	(5.0)	淡茶褐色	細1~2mmの砂粒 多量 細5mmの砂粒 少量	布目に痕 ヘラ調整	ナデ	ヘラ調整 切断痕	良	接合

第 34 図

No.	出土地点	層	部位	法量 (cm)	重量 (kg)	色調 (凹/凸)	胎土	調整・文様			焼成	備考
								凹面	凸面	側面		
1	56号建物	4層 No.239他	平瓦	最大長(46.7) 広幅幅(30.7) 狭幅幅 22.0 厚さ(1.7~2.5)	(3.5)	茶褐色一部黒 褐色	細砂粒多量 黒雲母微量	模倣痕 布目压痕 →一部ナデ	ナデ(部分的 削り)	ヘラ調整 切断痕	良	接合

第 35 図

No.	出土地点	層	器種	石材	最大長(cm)	最大幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	欠損	備考
1	56号建物	4層 No.1025	砾石	砂岩	(11.5)	(5.3)	(2.2~3.0)	(228.0)	体部	
2	*	4層 No.828	砾石	砂岩	(8.3)	(7.2)	(1.7~3.9)	(216.0)	体部	

第 36 図

No.	出土地点	層	器種	最大長(cm)	最大幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	欠損	備考
1	長者原Ⅱ区	一括Ⅲ	鉄釘	(6.7)	(0.7)		(7.0)	体部	

第 36 図

No.	出土地点	層	器種	法量 (cm)	重量 (g)	色調 (凹/凸)	胎土	調整・文様		焼成	備考
								四面	凸面		
2	長者原Ⅱ区	4層 No.631	瓦二次加工品	最大長 5.5 最大幅 5.8 最小幅 2.5	(95.0)	灰白色	粗砂粒中量 大型砂粒少量	部分的に布目 痕・オケ板痕		良	
3	*	一括Ⅲ	瓦二次加工品	最大長 7.0 最小幅 2.2	(117.5)	灰色	粗砂粒多量 黒雲母微量	格子タタキ		良	縁辺部より加工

第 40 図

No.	出土地点	層	部位	法量 (cm)	色調 (内/外)	胎土	調整・文様			焼成	備考
							外器面	内器面	口唇・底部		
1	長者原Ⅱ区	1号土 坑No.1	須恵器壺胴部	器高(3.8)	内 茶褐色 外 灰色	細砂粒少量	ヨコナデ	ヨコナデ		良	
2	*	1号土 坑No.1	須恵器壺胴部	器高(4.8)	灰白色	細砂粒少量	平行タタキ	同心内タタキ		良	

第 41 図

No.	出土地点	層	部位	法量 (cm)	色調 (内/外)	胎土	調整・文様			焼成	備考
							外器面	内器面	口唇・底部		
1	長者原Ⅱ区	3号土 坑No.3	平瓦	最大長(17.2) 最大幅(14.1) 最小幅(2.6)	凹 茶褐色 凸 茶褐色	1mm~2mmの 砂粒多量	布目痕	平行タタキ		良	

第10表 遺物観察表

第41図

No.	出土地点	層	部 位	法 量 (cm)	色 調 (内／外)	胎 土	調 整 - 文 標			備 考
							外器面	内器面	口唇・底部	
2	長者原Ⅱ区	3号土坑No13	土師質土器小皿	口径(7.4) 底径(4.6) 器高(1.65)	内 ピンクがかった明るい白褐色。 外 青白い白褐色。	ごく小さな白と黒の砂粒	ヨコナデ	ヨコナデ	回転糸切り	不良
3	*	3号土坑No15	土師質土器環	口径(11.9) 底径(6.0) 器高 3.2	内 黄褐色。 外 スズが薄く付着して黒い茶褐色	細砂粒微量	ヨコナデ	ヨコナデ	回転糸切り	やや不良
4	*	3号土坑No23	瓦質すり鉢底部	底径(12.0) 器高(4.7)	灰黒色	細砂粒微量	指オサエ (部分的に) 指紋残る	斜め方向に 6本単位の 条線	荒いナデ	良
5	*	3号土坑No24	瓦質すり鉢口縁	器高(3.4)	灰色	粗砂粒微量	ヨコナデ	ナデ 条線	ヨコナデ	良
6	*	3号土坑No19	瓦質すり鉢口縁	口径(22.6) 器高(6.7)	灰黒色	粗砂粒微量 黒雲母微量	ヨコナデ 荒いナデ	ナデ 6本単位? の条線	ヨコナデ	良
7	*	3号土坑No6	瓦質すり鉢口縁	口径(25.4) 器高(7.9)	灰白色	細砂粒少量	ヨコナデ	条線	ヨコナデ	やや良
8	*	3号土坑No5	土師質土器底部	底径(14.2) 器高(2.2)	内 淡褐色。 外 黒色。前面に炭化物が付着	2mm大の石英 を含む砂粒多量	ハケ目 ヨコナデ スズ付着	ヨコナデ	ナデ スズ付着	やや良
9	*	3号土坑No4	青磁碗底部	高台(6.2) 高さ(1.1) 器高(6.0)	青緑色	密	蓮弁文	草花文		良
10	*	3号土坑No11	瓦質火舎底部 (三足?)	底径(34.5) 高さ(1.1) 器高(11.9)	灰色	細砂粒少量	ヨコナデ 木の葉の スタンプ	ヨコナデ ヨコマタは 斜め方向の ガキ印	ナデ	良

第43図

No.	出土地点	層	部 位	法 量 (cm)	色 調 (内／外)	胎 土	調 整 - 文 標			備 考
							外器面	内器面	口唇・底部	
1	長者原Ⅰ区	56土坑1号 No7	土師質土器小皿	口径 7.6 底径 7.0 器高 1.1~1.5	淡赤褐色	細砂粒多量 金雲母少量	ヨコナデ	ヨコナデ	回転糸切り	良
2	*	56土坑1号 No13	土師質土器小皿	口径 7.6 底径 7.0 器高 1.3~1.6	淡赤褐色	細砂粒多量 金雲母少量 黒雲母少量	ヨコナデ	ヨコナデ	回転糸切り	良
3	*	56土坑1号 No2	土師質土器小皿	口径 8.4 底径 7.4 器高 1.7	淡褐色	細砂粒多量 金雲母少量	ヨコナデ	ヨコナデ (指オサエ)	回転糸切り	良
4	*	56土坑1号 No3	土師質土器環	口径(12.6) 底径 8.4 器高 2.6	赤褐色	細砂粒多量 金雲母少量	ヨコナデ	ヨコナデ	回転糸切り	良
5	*	56土坑1号 No8	土師質土器環	口径 10.6 底径 7.2 器高 2.7~3.0	赤褐色	細砂粒多量	ヘラナデ ヨコナデ	ヨコナデ	回転糸切り	良
6	*	56土坑1号 No6	土師質土器環	口径 11.8 底径 6.6 器高 2.9	赤褐色	細砂粒多量 金雲母微量	ヨコナデ	指オサエ ナデ ヨコナデ	回転糸切り	良
7	*	56土坑1号 No4	土師質土器環	口径 10.8 底径 7.8 器高 2.6~2.9	淡茶褐色	細砂粒少量	ヘラナデ ヨコナデ	ヨコナデ	回転糸切り	やや良
8	*	56土坑1号 No11	土師質土器環	口径 11.6 底径 7.6 器高 2.9	赤褐色	細砂粒少量	ヨコナデ	ヨコナデ 指オサエ ナデ	回転糸切り	良
9	*	56土坑1号 No9	土師質土器環	口径 11.9 底径 9.4 器高 2.6	淡赤褐色	細砂粒少量 金雲母中量	ヨコナデ	ヨコナデ 指オサエ	回転糸切り	良

第11表 遺物観察表

第 43 図

No	出土地点	層	部 位	法 量 (cm)	色 調 (内／外)	胎 土	調 整・文 標			焼 成	備 考
							外器面	内器面	口唇・底部		
10	長者原Ⅱ区 分号1	56土坑1	土師質土器环	口径11.7 底径10.2 高さ2.1~2.6	淡赤褐色	細砂粒多量 大型砂粒微量	ヨコナデ	ヨコナデ	回転糸切り	良	
11	◆	56土坑1 分号10	土師質土器环	口径 横円形長径 12.0 底径 横円形長径 10.2 高さ 横径6.6 高さ1.8~2.2	内 淡赤褐色 外 茶褐色	細砂粒多量 大型砂粒少量	ヨコナデ ヘラナデ	ヨコナデ	糸切り痕 回転糸切り	良	
12	◆	56土坑1 分号6b	土師質土器环	口径(12.4) 底径(9.4) 高さ(2.3)	淡赤褐色	細砂粒多量 金雲母少量	ヨコナデ	ヨコナデ	回転糸切り	良	

第 50 図

No	出土地点	層	部 位	法 量 (cm)	色 調 (内／外)	胎 土	調 整・文 標			焼 成	備 考
							外器面	内器面	口唇・底部		
1	長者原Ⅱ区 透溝	1号不明	直筒器	口径(19.8) 脚径(11.8) 高さ(12.0)	内 灰黑色 白灰色(自然釉) 外 灰黑色 一部茶褐色、 白灰色(自然釉)	粗砂粒少量	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	良	

第III章 まとめ

56号建物跡と整地Ⅱ層について

56号建物跡が整地を行なう築造しているので、整地Ⅰ層及び礎石掘り込み出土の遺物には、築造時期より古い遺物が混じる。これらの遺物の中で、最も新しいものは、8世紀後半～9世紀前半である。この年代が56号建物跡の一期を示すと考えられる。また、56号建物跡より下層に位置する整地Ⅱ層や4層が存在することより、56号建物跡より古い時期の建物跡が想定できる。4層出土遺物の時期幅が7世紀後半～9世紀前半である。この年代が建物跡の使用時期を示すと考えると、56号建物跡の下層建物跡が砦城跡の創設期かそれに近い時期に築造され、56号建物跡の直前まで使用されたと推定できる。

その他の遺構について

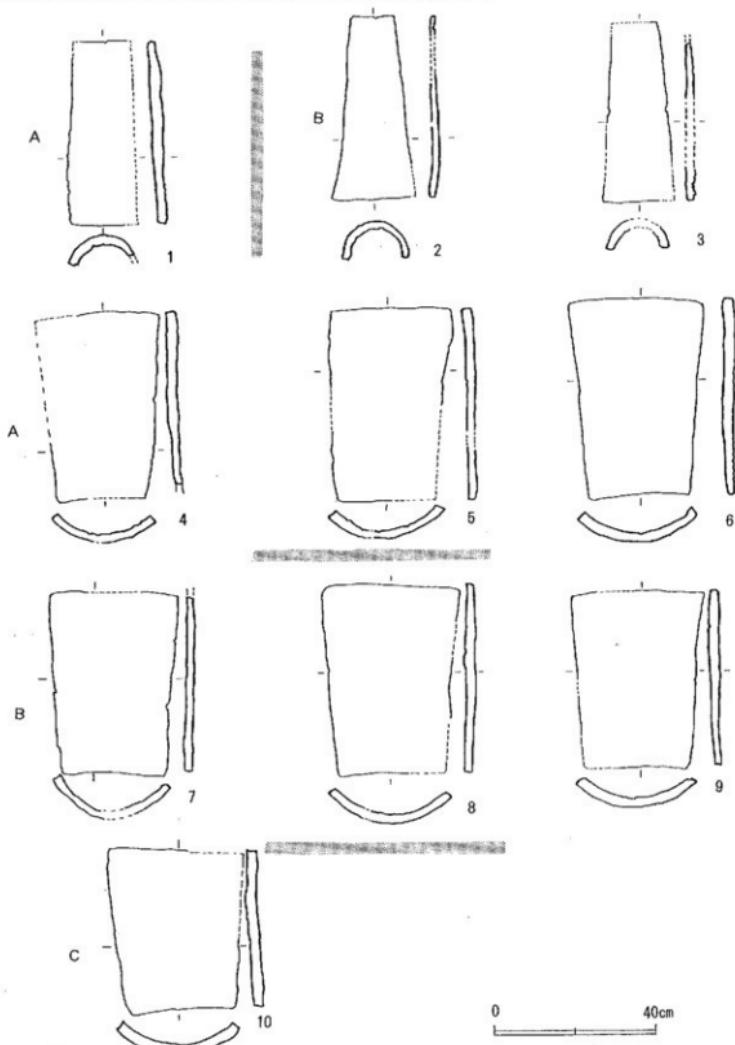
55号・57号・58号の建物跡の時期については不明である。ただし、57号は掘方の平面形や覆土が55号・58号とは異なるため、両者よりは後出するものと思われる。

1号～3号土坑は、覆土の類似性や互いに近接していることより、ほぼ同時期で14世紀前半～中頃と思われる。また、56号土坑1号は13世紀中頃～後半の時期が考えられる。

4層出土の丸瓦・平瓦の形態について（第51図）

出土した瓦の中で、全体形が復原も含めて把握できるものを次のように分類した。丸瓦A類（1）～上下端部の幅に大きな差がなく、筒状に近い平面形を呈する（上端幅約14cm・下端幅約16cm・最大長約46cm）。丸瓦B類（2・3）一下端幅が上端幅に比べて大きく、下端が「ハ」の字形に開く平面形を呈する（上端幅約11cm・下端幅約18～20cm・最大長約45cm）。平瓦A類（4～6）一筋縫幅が狭く、長めである（広縫幅約

29~33cm・狭端幅約22~24cm・最大長約47~49cm)。平瓦B類(7~9)一狹端幅がA類よりやや広く、長めである(広端幅約31~33cm・狭端幅約25~26cm・最大長約43~47cm)。平瓦C類(10)一B類の上下が短くなったもの(広端幅約33cm・狭端幅約26cm・最大長約41cm)。狹端部の狭い平瓦A類を並べた筋のすき間上面には、下端部の開いた丸瓦B類を重ねるセット関係が想定できる。



第51図 丸瓦・平瓦形態分類図

付 論

鞠智城跡56、59及び65号建物礎石の岩石および採石場調査

熊本大学名誉教授 田村 実

鞠智城跡56、59及び65号建物礎石の肉眼鑑定及び採石場所の検討を行ったのでその結果を報告する。

建物礎石の岩石の調査結果

城跡での岩石の肉眼鑑定では、礎石の表面が風化していても、保存上岩石を割って新鮮面の観察ができるものもあつたが、全体の報告に影響するほどのことではなかった。礎石は大きいものでも1.5mを越える物はなく運搬手段の発達していない当時としても運搬にさほど困難というほどのものはなかったと考えられる礎石の岩石名を以下に示す。

56号建物礎石	GD	GDF	Qu	Ah	Ap	Ab	WTo	WT
主要礎石（番号のあるもの 但しNo22は小石の集合なので省く）	28	2					11	15
小さい礎石	12	7		1	2			2
59号建物礎石（配置図の白）								
主要礎石（No1～No20）	20	2						18
小礎石	9	5	1			1	1	1
65号建物礎石（配置図のブルー）	16	15			1			

GD:花崗閃綠岩、GDF:細粒花崗岩、Qu:珪岩、Ah:角閃石安山岩、Ap:輝石安山岩

Ab:玄武岩質安山岩、WTo:溶結凝灰岩（黒曜石レンズあり）、WT:溶結凝灰岩

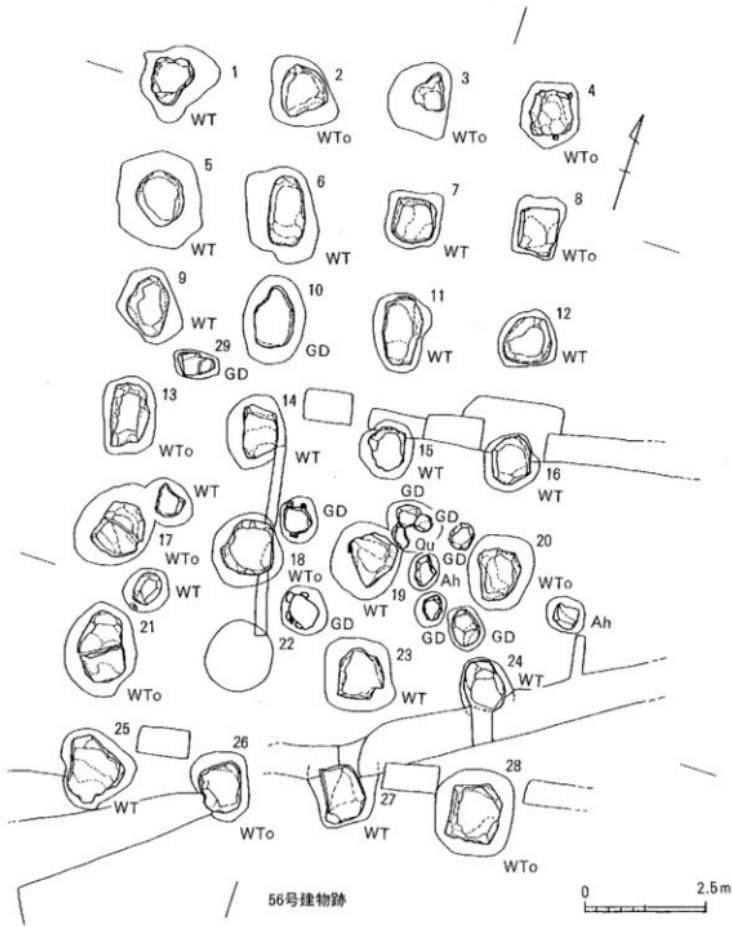
（黒曜石レンズなし）

礎石採集地の検討結果

鞠智城跡での岩石調査後、熊本県発行の1/20万地質図を参考にして、礎石採集地の検討を行った。この地質図は資料が古く部分的に訂正もあると思われるが、地質専門の立場での利用ではないので、岩石名など多少変更して使用したことを断つておく。礎石のなかの角閃石安山岩（Ah）が城跡の周囲に分布するようになっていないが、角閃石輝石安山岩（ApH）の角閃石の多い部分にも礎石の角閃石安山岩のような部分が存在するのか、あるいは存在するのに地質図に示されていないのか、あるいはなた礎石の角閃石安山岩は、遠方の産地から運ばれて来たのかは少ない資料からは判定できない。

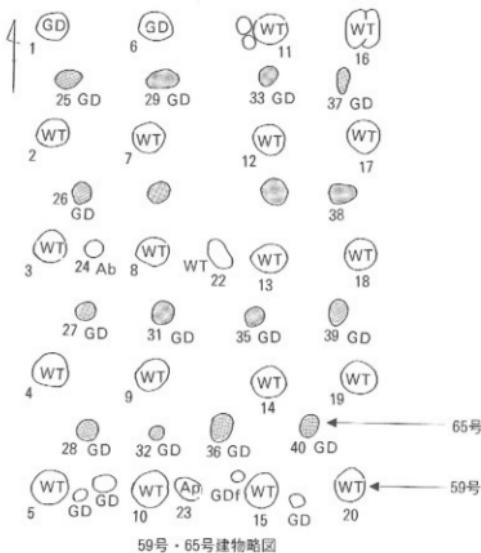
礎石の90%以上が花崗閃綠岩と溶結凝灰岩で占められているのでそれを念頭に置いて採石場所の現地調査も行った。添付した地質図に示されているとおり、鞠智城跡の北方山地には礎石に使用した岩石が広く分布しているので採石場がなくても、これらの山地を流下する西の内田川と木野川、東の迫間川の上流では河原での岩石の採集は可能である。しかし礎石があまり大きくなかったとはいえ、長距離を運搬することは労力を必要とするので、城跡周辺から調査を始め、花崗閃綠岩については鞠智城跡西方の土星線上に分布する灰塚、涼みの御所など、溶結凝灰岩では近くに広く分布するものの、礎石としての強度の点から菊鹿町鳥田の内田川川底の露出地を探石場として推定した。迫間川でも礎石の岩石の採集は可能であるが、主要礎石の花崗閃綠岩には長方形の角閃石が目立ち、鞠智城跡から近い迫間川の花崗閃綠岩には、角閃石が目立たないこ

とと、採集の難易を考慮して上述のごとく推論した。また添付写真で説明するように鞠智城跡土壘線上の灰塚では、花崗閃緑岩上に玄武岩質安山岩が分布しており、礫石の中にこの岩石が含まれていることもあるて両者を同時に採集したことにも考えられるからである。なお、礫石の輝石安山岩としたものは表面が風化していくで観察が十分に行えなかつたが、玄武岩質安山岩に性質が近く、これに含められる可能性も考慮すると、鞠智城跡西方の土壘線上から主要礫石の花崗閃緑岩採集の可能性は高い。



WT: 溶結凝灰岩(黒曜石レンズ殆どなし) WTo: 溶結凝灰岩(黒曜石レンズあり)
 Ah: 角閃石安山岩 Ap: 輝石安山岩 Ab: 玄武岩質安山岩 Qu: 岩
 Gdf: 花崗閃緑岩(細粒) GDf: 花崗閃緑岩(角閃石が目立つ)

付論A図



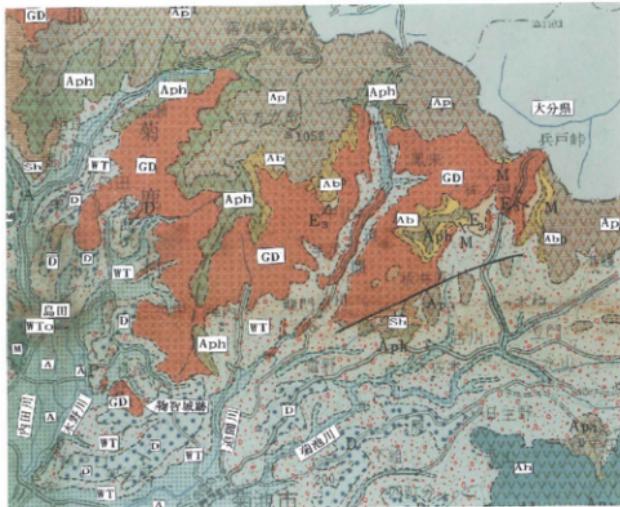
59号・65号津物略図

WT: 溶結凝灰岩(黒曜石レンズ殆どなし) WTo: 溶結凝灰岩(黒曜石レンズあり)

Ab: 角閃石安山岩 Ap: 煉石安山岩 Ab: 玄武岩質安山岩 Qu: 瓦岩

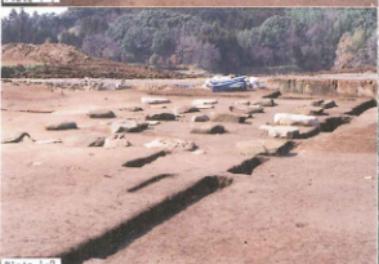
Gdf: 花崗閃綠岩(細粒) GD: 花崗閃綠岩(角閃石が目立つ)

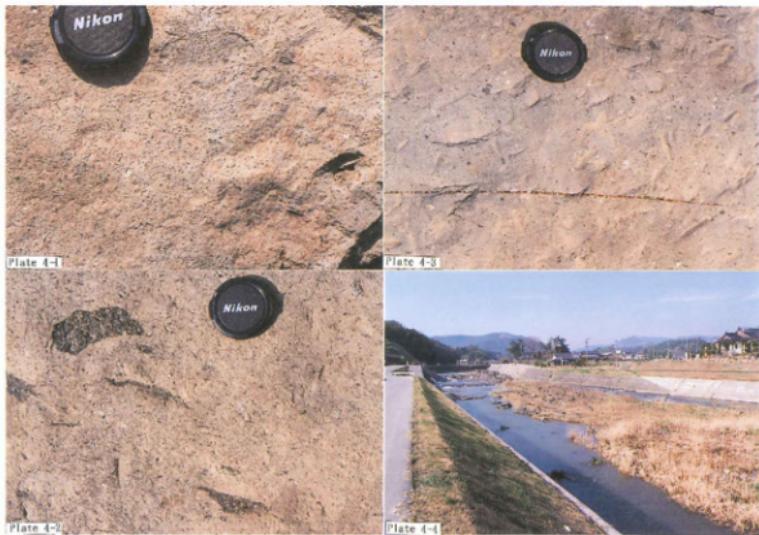
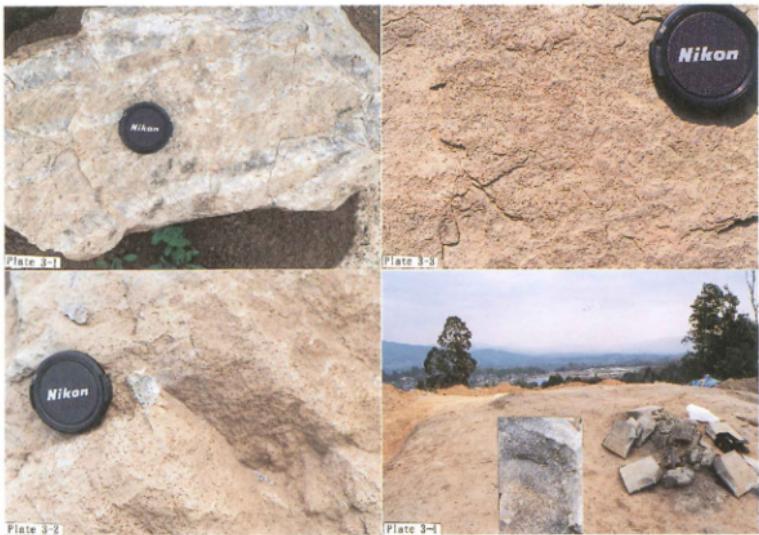
付論B図



鈴智城跡付近の地質図 熊本県発行の1/20万地質図(1963)を一部改編

A: 沖積層、D: 洪積層、
WT: 溶結凝灰岩(非溶結で、未固結のものも含む)
が菊鹿川島田付近のものは、黒曜石レンズを含み
固結していることは確認済みなので、調査目的も
考慮してWToで示した)、
Ab: 角閃石安山岩、Ap: 煉石安山岩、Aph: 角閃
石、輝石安山岩; Ab: 玄武岩質安山岩、CD: 花崗
閃綠岩、M: ハニレイ岩、Sh: 結晶片岩





添付写真説明

Plate 1-1

56号建物礎石を北望する。岩石名は配置図に記入してある。

Plate 1-2

59及び65号建物礎石を北望する。花崗閃緑岩は白い色を呈するが、岩石の色、特に阿蘇溶結凝灰岩は水を含むと黒くなるので、色のみでは岩石を判定できない。

Plate 1-3

59号建物礎石のNo.6の花崗閃緑岩。可なり風化していて赤みがかった色をしている。カメラキャップの下方などに、長方形の角閃石がみえる。

Plate 1-4

鞠智城跡土壘上の涼みの御所北側に露出する花崗閃緑岩。角閃石が多い。

Plate 2-1

涼みの御所西部に露出する長さ5mの花崗閃緑岩。

Plate 2-2

56号建物礎石のNo.19の右下の花崗閃緑岩と菊池市豊間の眼鏡橋の追間川の河原の花崗閃緑岩（上の岩片）との比較。追間川のものには角閃石が殆ど見えない。

Plate 2-3

鞠智城跡土壘上の灰塚に露出する節理の多い花崗閃緑岩。鞠智城跡の礎石はあまり大きないのでここで十分採取できたであろう。

Plate 2-4

涼みの御所からゴンゲンサンへの途中から谷を隔てて東北の斜面に露出する花崗閃緑岩の露頭を延る。ここでは風化が進んでいる。

Plate 3-1

56号建物礎石のNo.19のすぐ上方の珪岩。この付近ではチャートは分布しないので、結晶片岩中か花崗閃緑岩に由来するものであろう。

Plate 3-2

65号建物礎石のNo23の輝石安山岩。表面が風化していて一応輝石安山岩に同定したが、玄武岩質安山岩の可能性も同じくらいある。

Plate 3-3

59号建物礎石のNo24の玄武岩質安山岩。小さい穴は、ガンラン石が風化して落ちた穴である。

Plate 3-4

鞠智城跡上墨上の灰塚頂を西から望む。前方の台地は鞠智城跡発掘地。右方の作業用具の真ん中にあるのは玄武岩質安山岩で、この岩石の一部（縦4cm）を図に挿入して示す。黄色い点は風化したガンラン石である。

写真左辺1/3から円弧を描いて左上方に風化した花崗閃綠岩と風化した玄武岩質安山岩の境界線がみえる。

Plate 4-1

鞠智城跡56号建物礎石のNo19分の右（東）にあるやや多孔質の角閃石安山岩で、細い針状の角閃石が多く含まれている。1/20万地質図では、菊鹿町付近には分布していないが、その解釈については確実なことはいえないが、本文でも述べた。

Plate 4-2

56号建物礎石のNo13の黒曜石レンズを有する溶結凝灰岩。

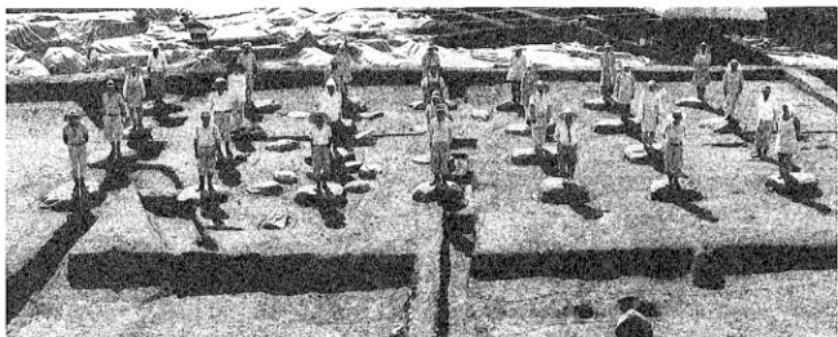
Plate 4-3

56号建物礎石のNo4の黒曜石レンズを欠く溶結凝灰岩。小岩片や軽石片が立つ。

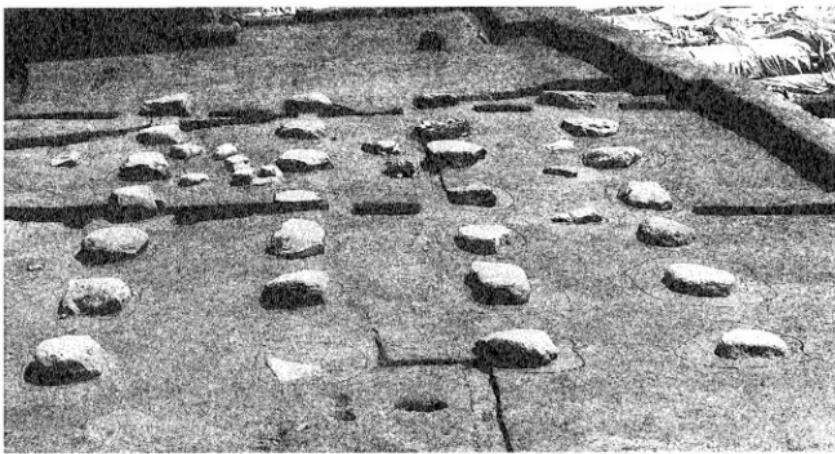
Plate 4-4

礎石に附れる固さの溶結凝灰岩が分布露頭する菊鹿町島田の内田川を下流より望む。ここも鞠智城跡からの距離と礎石の岩石の類似から採石地の最も重要な候補の一つであろう。

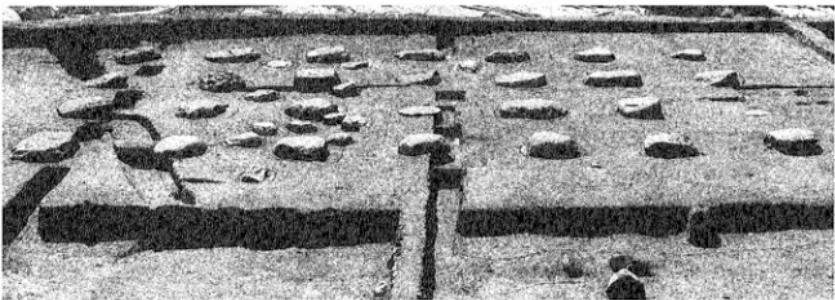
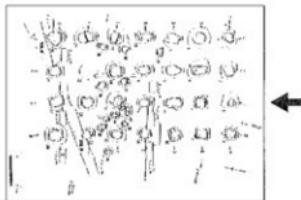
図版



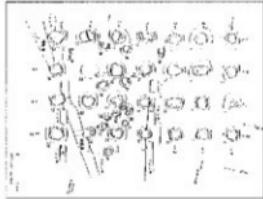
56号建物跡（東から）



56号建物跡（北から）



56号建物跡（東から）



土層断面A - Bの一部
(北東から)



土層断面C - Dの一部
(北東から)



土層断面E - Fの一部
(北東から)

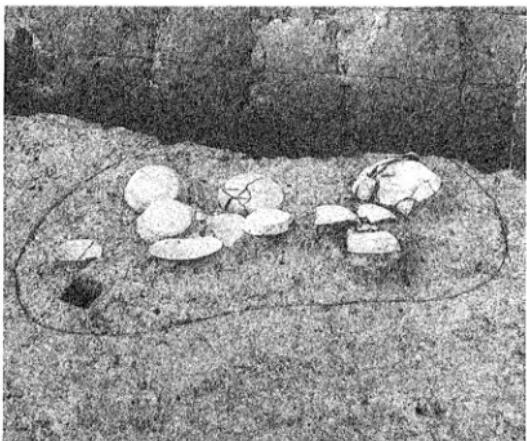




56号建物跡東側4層A地区の
一部遺物出土状況（北から）

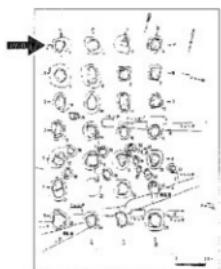


56号建物跡東側4層B地区の
一部遺物出土状況（南から）

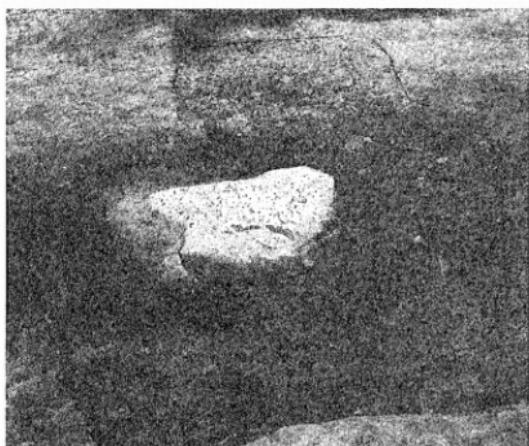
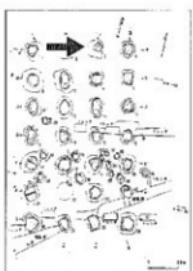


56土坑1号検出状況
(北東から)

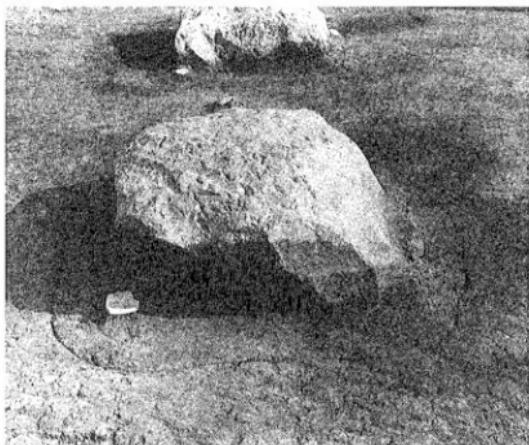
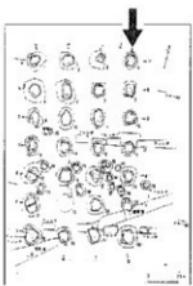
56号建物跡 1号礎石
検出状況（西から）



56号建物跡 3号礎石
検出状況（西から）

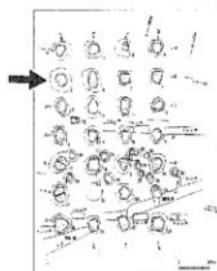


56号建物跡 4号礎石
検出状況（北から）

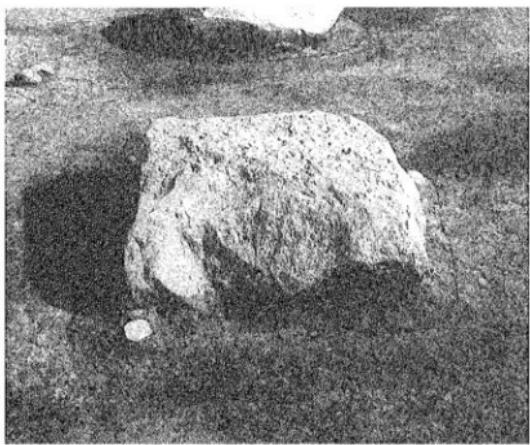
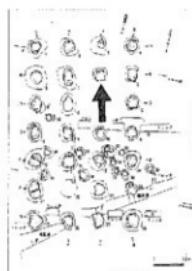




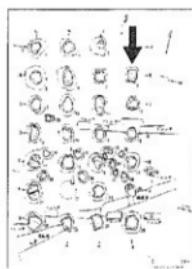
56号建物跡 5号礎石
検出状況（西から）



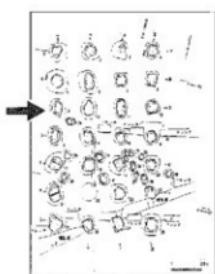
56号建物跡 7号礎石
検出状況（南から）



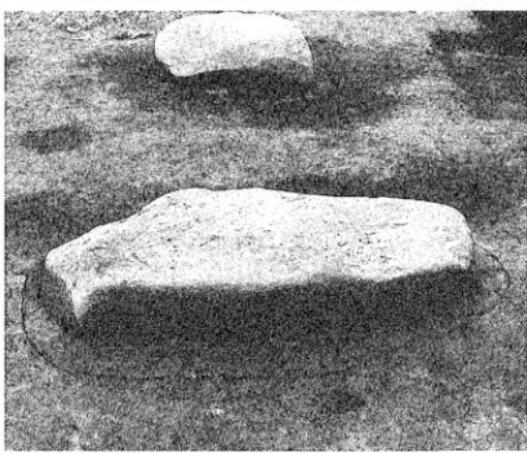
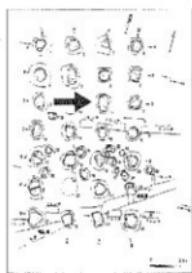
56号建物跡 8号礎石
検出状況（北から）



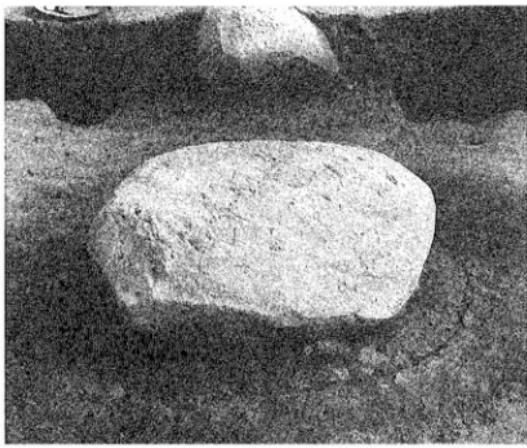
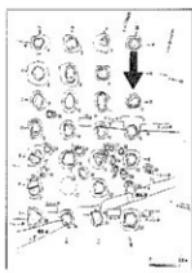
56号建物跡 9号礎石
検出状況（西から）



56号建物跡 11号礎石
検出状況（西から）

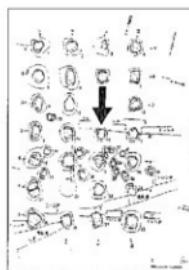


56号建物跡 12号礎石
検出状況（北から）

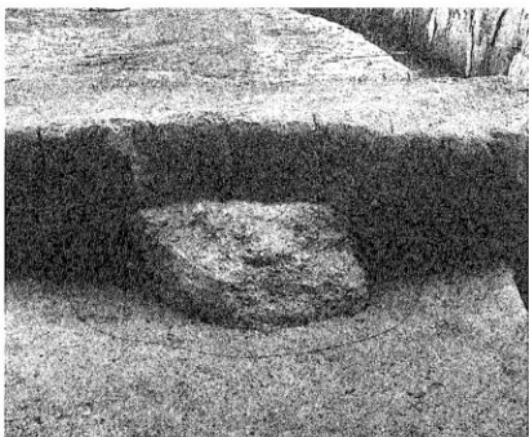
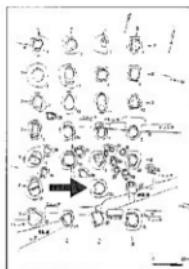




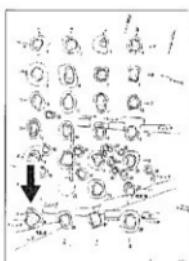
56号建物跡 15号礎石
検出状況（北から）



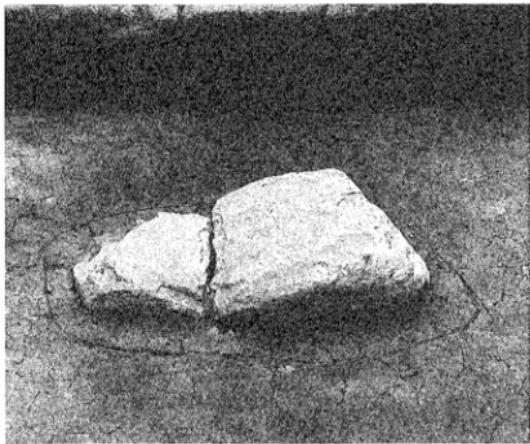
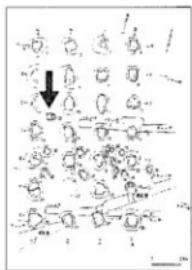
56号建物跡 23号礎石
検出状況（西から）



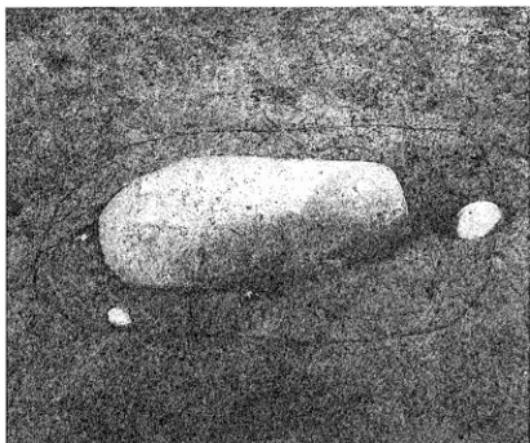
56号建物跡 25号礎石
検出状況（北から）



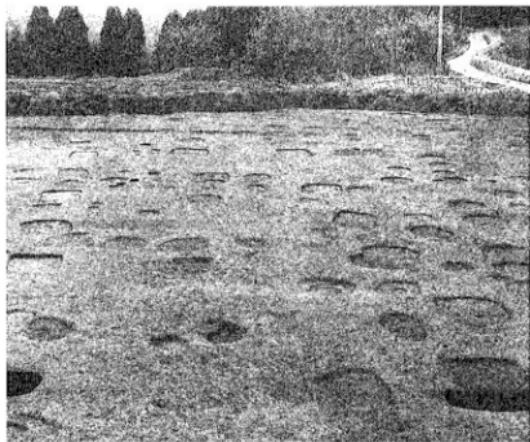
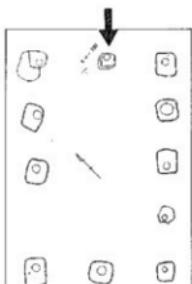
56号建物跡 29号礎石
検出状況（北から）



56号建物跡 35号礎石
検出状況



55号建物跡検出状況
(北東から)

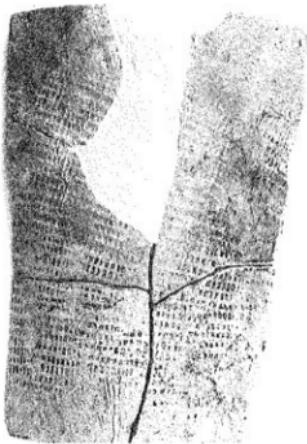




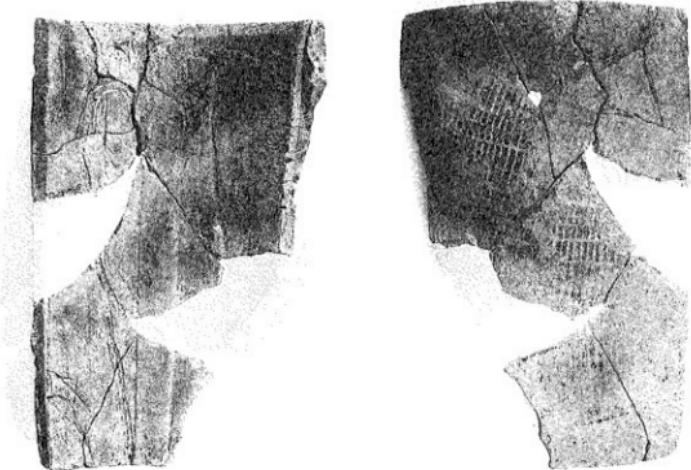
平瓦①
(第 29 図 1)



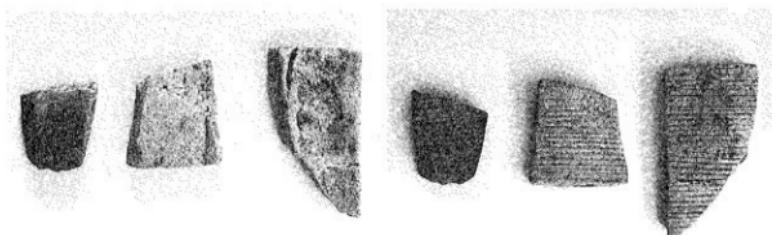
平瓦②
(第 30 図 2)



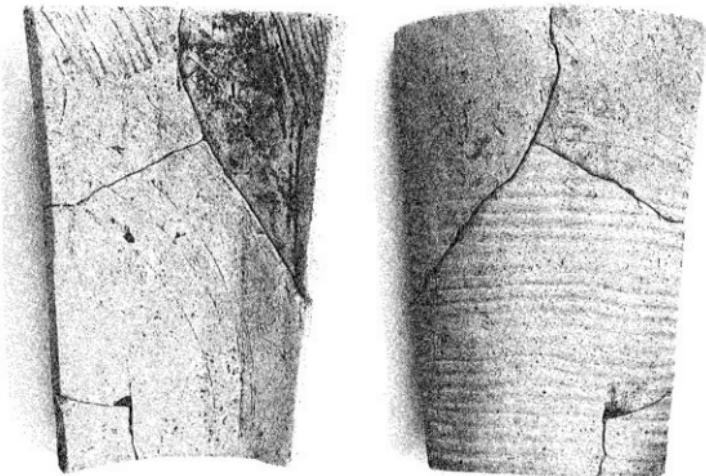
平瓦③
(第 30 図 3)



平瓦③
(第 29 図 2)



平瓦④
(第 31 図 1・2・3)



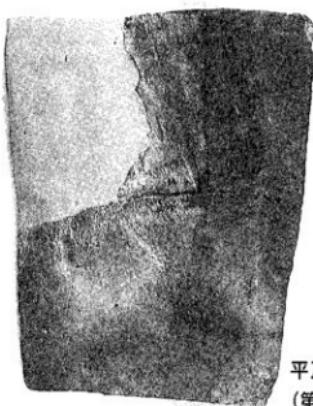
平瓦⑤
(第 31 図 4)



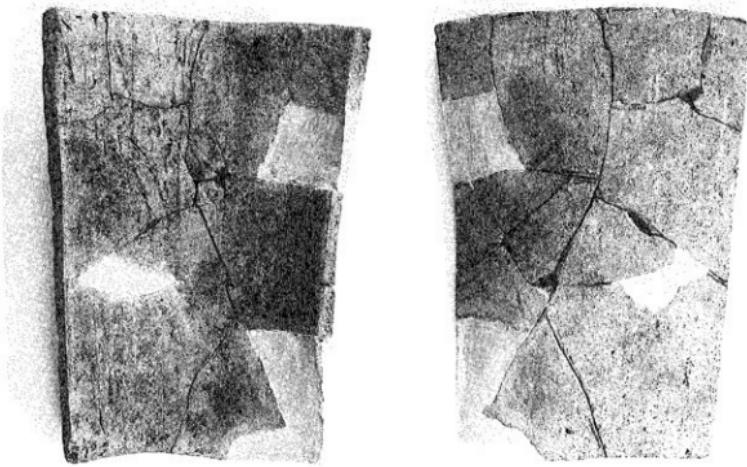
平瓦⑥
(第32図1)



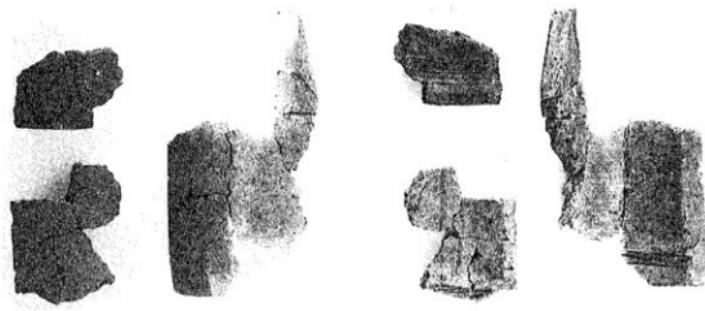
平瓦⑦
(第32図3)



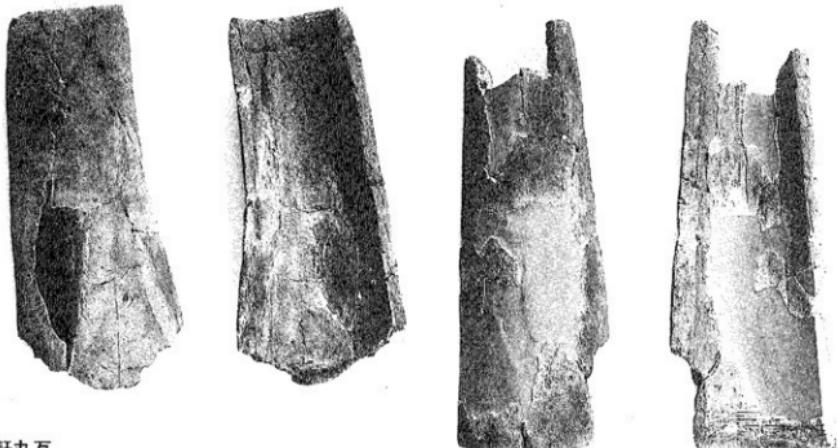
平瓦⑧
(第33図1)



平瓦⑧
(第33図2)

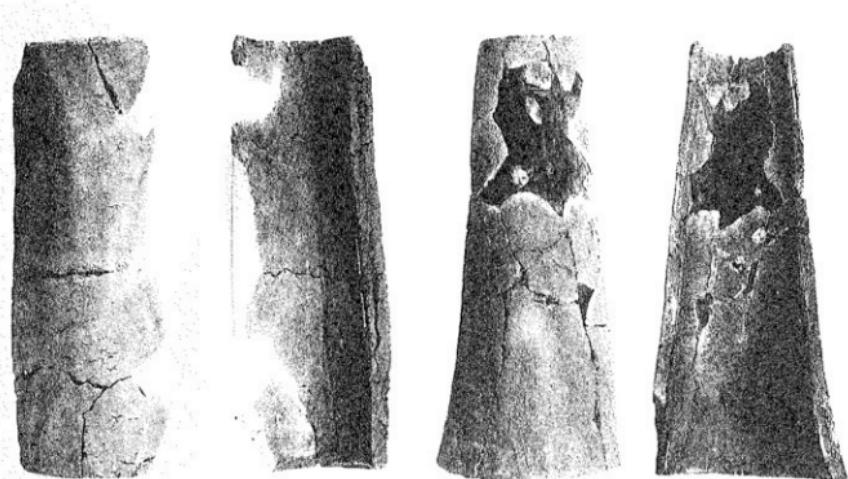


軒丸瓦
(第26図1・2・3)



軒丸瓦
(第26図5)

軒丸瓦
(第26図4)



丸瓦
(第27図2)

丸瓦
(第27図4)

報告書抄録

書名	鞠智城跡
シリーズ名	熊本県文化財調査報告
シリーズ番号	第164集
編著者名	西住欣一郎
編集機関	熊本県教育委員会
所在地	〒862 熊本市水前寺6丁目18番1号
発行年月日	1997年3月31日

所収遺跡名	所在地	コード 市町村：遺跡番号	調査期間	調査面積	調査原因
鞠智城跡	鹿本郡菊鹿町 大字米原		199604 ～199703	約5,000m ²	遺跡整備

主な時代	主な遺跡	主な遺物	特記事項
奈良時代 から 平安時代	礎石建物跡 1 掘立柱建物跡 3	布目瓦・須恵器 土師器	整地層が確認され、その上に礎石を据える。 方形の掘方・柱痕跡
中世		青磁・瓦質土器 土師質土器	

熊本県文化財調査報告 第164集
鞠智城跡

——第18次調査報告——

平成9年3月31日

編集発行

熊本県教育委員会

〒860 熊本県熊本市水前寺6丁目18-1

TEL (096) 383-1111 (代表)

文化財整備係 (内線 6714)

印 刷

株式会社大和印刷所

〒862 熊本県熊本市戸島町920-11

TEL (096) 380-0303

この電子書籍は、熊本県文化財調査報告第 164 集を底本として作成しました。
閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用
してください。

底本は、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、都道府県の教育委員会と図
書館、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用
方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

書名：鞠智城跡

発行：熊本県教育委員会

〒862-8609 熊本市中央区水前寺 6 丁目 18 番 1 号

電話： 096-383-1111

URL : <http://www.pref.kumamoto.jp/>

電子書籍制作日：2015 年 12 月 24 日